

第五編  
郷土の宗教

## 第一章 郷土の神社

### 第一節 豊海地区の神社

#### 武雷神社(産土様)

西野一―五七ノ二番地に鎮座。豊海県道に面した入口には、一九四〇年(昭和一五)に建立した「村社 武雷神社」と刻んだ石柱が立つ。つづいて一七一六年(享保元)建

立の鳥居があり、その奥に拝殿・幣殿・本殿と続く。

境内面積 二二九九・三一平方メートル

社殿 拝殿二三坪七合五勺 幣殿六坪 本殿六坪二合五勺

建造物 ①石柱(村社武雷神社裏面 皇紀二千六百年固威宣揚為祈願)

②石灯笼二基(御實前氏子中明治二十四年旧五月元西野)

③御手洗(御實前寛保二年か戊辰年九月吉日願主佐久間寛兵衛)

④鳥居(石造明神鳥居)由率寄進雷大明神上総國山辺郡西野村高橋権太兵衛惣氏子(享保元丙申九月吉日貝塚村氏

子行木弥兵衛下粟生村□□□□惣氏子)



写28 武雷神社(西野岡) 川島撮影

- ⑬石碑 (明治四十四年十月 大工職人 報恩碑)
- ⑭幟立
- 撰社
- ⑥子安神社 (共同館内) ⑨天照大神 宮 (昭和二十六年三月西野芝上より移 築) ⑩弁天宮 ⑪琴平宮
- 管理 西野区

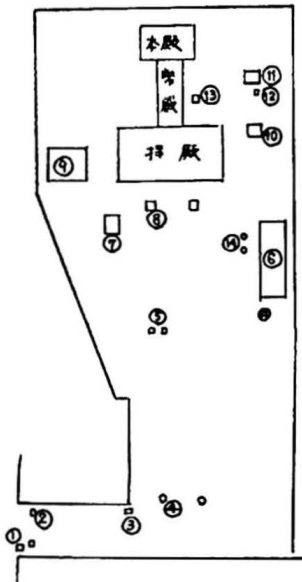


図7 西野武雷神社配置図

- ⑦御水屋 (平成元年七月吉日建之)
- 御手洗 (奉納 明治三十六年四月 豊海村貝塚)
- ⑧狛犬 (奉納 文久壬戌年七月吉日 氏子 大野屋 源太郎 齋藤惣右工門)
- ⑫御手洗 (奉納 明治四十一年一月)
- ⑤幟立 (昭和三十年十二月建立更生會)
- ⑥西野区農村共同館
- 鳥居扁額 (武雷大明神源義致拜書 奉納額 一面西野 村貝塚村粟生村天明<sup>(二七八四)甲</sup> 辰年八月吉日願主葛岡藤兵衛世話 人篠崎新右衛門鋤工江戸神田住中村喜八郎)

口碑によれば、正徳年間（一七一〇—一七二五）、京都上賀茂別雷大神の御分靈を勧請したと伝えられる。一八七九年（明治一二）に千葉県が編纂した「上総国山辺郡神社明細帳」にも祭神・別雷命とある。この神は、八咫鳥と化し神武東征を導いた神といわれる賀茂建角身命の孫であり、葵祭りや名高い京都賀茂別雷神社（上賀茂神社）の祭神である。鳥居の建立年代からも正徳年間に勧請したという伝えは納得できるものである。

なお、賀茂別雷神社は武雷神社を別社（分雷社）として明細帳に記録している。

また、祭神は武甕槌神（建御雷神）ではないかとの説もある。この神は伊邪那岐神が火の神、迦具土神の頸を斬ったとき剣の鐔際にほと走った血より生れた神とされ、藤原氏の氏神である奈良の春日大社の祭神であり、関東においては鹿島神宮の祭神として広く信仰をあつめている。西野武雷神社の祭神もそこから勧請ではないかというのである。

神社名からみると、鳥居には「雷大明神」一七三二年（享保一七）の文書には「鎮守大明神宮」一七八四年（天明四）に奉納された鳥居には「武雷大明神」とある。武雷はタケイカヅチと読める。武甕祭神説も捨てきれないところではある。さらに、江戸中期、関東の農村では雷神を祭ることが流行したといわれる（神社は落雷のあった場所等に建立されたという）最も古い享保元年の鳥居の文字からすれば、雷神と推定することも出来よう。

武雷神社は一九一九年（大正八）三月、村社に指定され、内務大臣床波竹次郎より幣帛（神前に奉獻する物品の総称）が供進された。

さて、武雷神社には、神社の宝ともいふべきものが二つある。一つは秋田藩主、佐竹義敦たけちかの手になる「武雷大明神」の軸書をもとにして製作、奉納された鳥居の青銅製扁額である。裏面には、貝塚村、西野村、粟生村惣氏子、天明四年八月奉納等の文字が見られる。(氏子は粟生、下貝塚にも及んである)佐竹義敦(一七四八—一七八五)は、一七四八年(宝暦八)から一七八五(天明五)間の秋田藩主(八代)である。彼は曙山しよせきんと号し、書面に優れ、洋画にも手を染めるほどの風流大名としても知られている。(秋田藩財政難打開のため、平賀源内を招まね聘し、銅山開発を依頼した際、藩士小田野直武に源内より洋画の技法を学ばせた)

軸書奉納の天明四年といえ、義敦病没の前年にあたる。靈験あらたかなる神社として江戸まで聞こえたともいわれる武雷神社に、病におかされた義敦が平癒を祈願して奉納したものであろうか。

他の一つは鰐たにち口とそれに添付された古文書である。(兩者とも盗難に遭い失なわれた)古文書は難解な漢文であったが、町誌編纂委員長木島里八の解説を要約すると次のような内容であった。

「宝暦五年(一七五五)四月、広瀬村(現東金市)の百姓が二つの神器を発掘した。俗に鰐口というものである。直径は、十六、四センチメートル、八、五センチメートルであり、小器は無銘であったが、大器には『上総國北山辺郡東(東経)雷宮御神前 永和三年(一三七七)三月七日』と刻まれていた。近隣の西野村に雷宮があるが、それに関係するものであろうか。(中略)宝暦九年(一七五九)名主である私が、これを記録して広瀬村の里社に納めた。しかし安永二年(一七七三)春、これを取出して見たところ箱も文書も虫に喰くい荒あされていた。よってこれを補修し再び記して本城寺に納めた。

(安永二年、一七七三)  
安永癸巳春正月 広瀬村正 惟親ちかひら誌す

先年、西野村武雷宮修補の年、村老の請うによって、一器及びその記録を雷宮に納めた。今年、若衆連中のために神号をのぼり旗に書き、その記録を再び記し神殿に奉納した。

寛政癸丑（一七九三）の春

（広瀬）惟親并せて書す

鯉口の銘文にある「北山辺郡東□□雷宮」とはこの神社であろうか。残念ながら肝心の地名を示す二文字が摩滅して判然とはしないが、東土河（川）と推定もされる。東土川とは現在は東金市宿であり、地元では「とつか」と呼ぶが、中世末には、薄島、荒生、宿、大沼、関下、西野、藤下、細屋敷、貝塚、粟生不動堂を含む一帯の郷名であった。しかし、この中に「雷」の名を持つ神社は西野以外には見当たらない。鯉口奉納年代の永和三年（一三七七）のころ西野武雷神社はすでに建立されていたのであろうか。またなぜ鯉口が広瀬村に埋没していたのであろうか。解明の手懸りはない。

### 祭 礼

二月一日、一〇月一日（平成元年より一〇月一〇日）。明治時代までは、春祭りに境内において獅子舞や村人による芝居等が行なわれていたが、大正から昭和期には一〇月の秋祭りに獅子舞、鳥刺、和唐内などが演ぜられ、近隣の村々からも観客を集め盛大であった。

### 熊野神社

通称おくまん様 藤下六二三番地に鎮座。祭神は家都御子神（「上総国山辺郡神社明細帳」には、備御子命とある）

縁起について、「神社名鑑」によれば、藤下村に紀州熊野権現を深く信仰する者があって、御尊像を画く軸物を奉戴して奉祀したという。



写29 熊野神社(藤下岡) 川島撮影

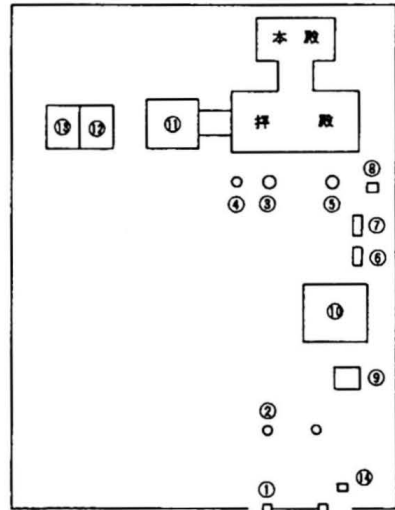


図8 熊野神社配置

境内 四三六平方メートル  
 社殿 拜殿一二・五坪 幣殿三坪 本殿三・七五坪

建造物 ①鳥居(コンクリート、明神鳥居尙奉納 昭和六十二年九月吉日 尙氏子一同)

旧鳥居は昭和六十二年十二月の東方沖地震で倒壊  
 (御地頭様武運長久 藤下邑 八丁堀上総屋卯之助 剃金邑  
 金坂藤右衛門 下総國中野邑 林蔵 鈴木□之助 川島□右)

衛門 文政八乙酉年九月吉日

② 鳥居 (4) 奉寄進御實前 文政八乙酉年九月吉日 (御當村氏子中) ③ 鳥居再建碑

④ 御手洗 (昭和十四年六月七日)

⑤ 御手洗 (昭和二十六年一月吉日)

⑥ ⑦ 旧公民館 ⑩ 職立

撰社 ⑧ 子安神社

管理 藤下区

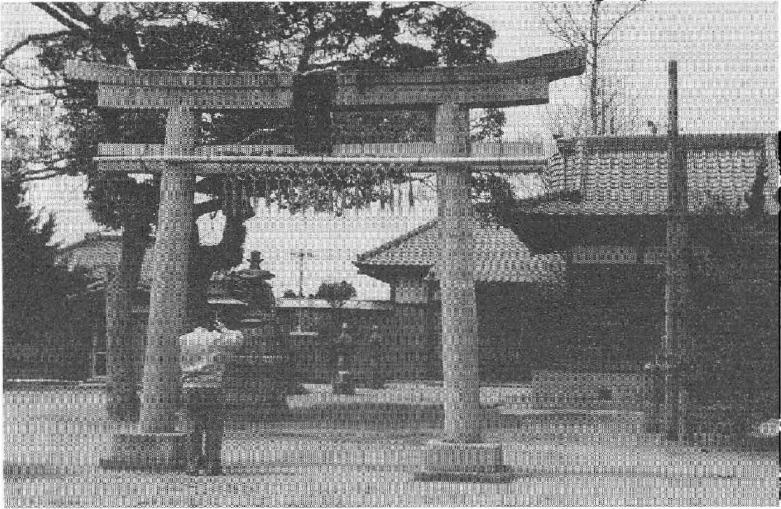
江戸時代、熊野三山(熊野本宮神社、熊野速玉神社、那智神社)信仰は、熊野御師、熊野聖、熊野比丘尼の活動により全国各地に広まったが、神仏習合の影響下に諸神は垂迹神として権現とも呼ばれるようになった。また補陀落淨土(インド南端の觀音の住む山)は、海上にあるともいわれたので、漁業関係者の信仰するところともなった。房総各地に熊野神社が広く勧請されたのも、紀州漁民の進出による漁業の発展がその背景にあるものと考えられる。

祭神である家都御子神とは建速須佐之男命(素盞鳴尊)の別名である。

例祭日は一月一三日、一〇月一六日。一月には羯鼓舞をもって村内各戸を廻り悪魔払いをおこなっていた。本殿には八坂神社が合祀されている。この神社は、明治年間に村内字天ノ後より合祀されたものである。

一七三六年(元文元)の飯高家文書によれば、「……藤の下村鎮守祇園牛頭天王様」と記され、牛頭天王を祭神とする八坂神社が藤下村の鎮守であったことが知られる。祭神は、神仏分離令により、明治初に他の牛





写30 須賀神社(真亀上) 川島撮影

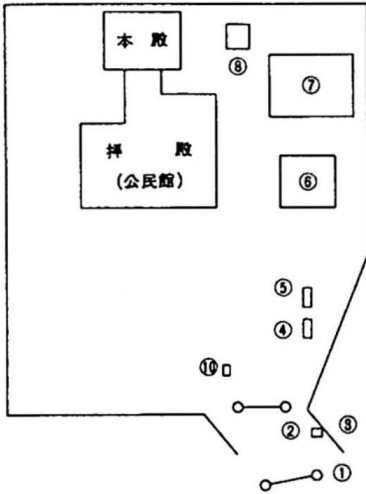


図9 真亀須賀神社配置図

頭天王社と同様に「須佐之男命」とされ、神社名も「八坂神社」と定められた。礼祭日は一月七日、七月七日である。

須賀神社

通称天王様。真亀六五二番地に鎮座。  
境内 六四〇・六九平方メートル。

社殿 拝殿一二坪 幣殿五坪 本殿七・五坪。

建造物 ①鳥居 (石造明神鳥居尙率納氏子中 天保午年六

月吉日、「牛頭天王」の扁額)

② 常夜燈 ③ 石灯籠 (奉納牛頭天王、文化<sup>二八二</sup>年吉日、真龜邑上、施主、惣若者中)

④ 石灯籠 (奉納、牛頭天王、真龜邑上、願主□□) ⑤ 石灯籠 (奉納御實前、安永九<sup>二七八〇</sup>庚子年九月吉日願主佐久間氏)

⑥ 御手洗 (奉納安永八<sup>己</sup>亥六月吉日願主片貝久布留川弥惣兵衛) ⑦ 御手洗 (奉<sup>正</sup>獻、謹祈願ス永久家内安全維持昭和七年<sup>一九三二</sup>)

十一月吉日 真龜区施主)

⑧ (奉納、大正十四年旧六月廿日) ⑨ 子安神社 ⑩ 御輿庫 ⑪ 社務所 ⑫ 花車庫 ⑬ 山車庫 ⑭ 幟立

撰社 子安神社 (祭神、木花開耶姫命)

管理 真龜全区

創建時代、由緒共に不詳であるが、口碑によれば、享保(一七一〇年代)以前という。祭神は、江戸期においては、インド祇園精舎の守護神といわれる牛頭天王であった。現に鳥居の扁額にも記されている。明治新政府は、神仏分離を重要政策の一つとしたが、一八六八年(慶応四)三月、次のような布告を発している。

「中古以来、某権現、或ハ牛頭天王之類其外仏語ヲ以、神号ニ相称候神社不少候、何レモ其神社之由緒委細ニ書付、早々可申出候事

そして、神仏分離令により諸国の牛頭天王社の多くが、八坂神社と改称、須佐之男命を祭神とすることになった。(本地垂迹説によると、須佐之男命は牛頭天王の垂迹とする)

しかるに真龜の牛頭天王社は須佐之男命を祭神としたものの八坂神社とは改称しなかった。これについて、昭和五十九年、真龜上小倉一郎家から「寛政八年(一七九六)島根大原郡須我神社」なる書付が発見された。この須我神社は、島根県大原郡大東町須賀の地に鎮座する。「出雲風土記」によれば、八岐の大蛇を退治し、

稲田姫と結婚した須佐之男命は、新居を求めていたが、出雲のこの地を山上よりながめ、「我が心須賀須賀斯」と言い、新宮を建設したと伝える。島根県の須我神社と真亀の須賀神社の関係、そして「寛政八年」が何を意味するのか不明である。

例祭日 かつては、旧六月七日であったが、現在は七月最終の日曜日に行なっている。他に比較して派手な祭りとして知られている。須賀神社の祭礼の日程は次のようになっている。

第一日 幣束作り、お饌米、神輿、山車、しめ飾り

第二日 ビシヤ、夜宮、天王様お供物、お供餅と赤飯

祭当日 午前零時、倉上り神輿を本殿へ移す。祭礼、神輿渡御（浜下り）

この祭礼の様子は、一九一七（大正六）年、粟生納屋に家族と共に滞在した徳富蘆花が、日記と創作「新春」の中で詳述している。

日記には次のように記している。

「七月廿五日（水）晴

…（前略）祭りの帰りの囃子が来た。花笠をかぶった男、揃ひの浴衣の足袋はだしの若者、手手に小さな御幣を持ち、先入入って来る。次に鯛と称する空荷を担ふたのが二人入って来る。ぐるり環を作って、振事があり、御幣を打合はせる。薩摩の棒踊をとびまわする豪壮なものだ。筵が真中に敷かれ、主人が羽織袴でそれに座はると、若い者が扇をひろげた年寄両三人の音頭につれて、且つ歌い且つ振事する。米搗きの真似をする。足踏みをする。浜大漁、陸満作の祝ひなのだ。音頭取りの手拍子につれて、同拍手——それから、お家が繁昌で、云々、主人を胸揚げにして家へかゝえ込む。や

第一章 郷土の神社

がて一同には茶と瓜漬が出る。——真亀の天王は胡瓜を食はぬそうだと、昔者は未だに胡瓜を食はぬそうだ……（後略）

筑摩書房「蘆花日記」巻五

以上は、蘆花が中西月華に招かれ、その親戚である真亀の植松家を訪れた時のことである。蘆花にとって一ヶ月余の九十九里滞在中で、この祭礼が特に印象深かったものとみえて、「新春」の「天王祭」の中でも「九十九里の印象の中で恐らく一番嬉しいのは、これでした。」と記している。

面足神社

栗生六五〇番地に鎮座。

通称 天王様、産土様。

例祭日 旧一月七日

境内 一〇九二・五〇平方メートル

社殿 拜殿 瓦葺方形造一三坪 幣殿瓦葺三坪、本殿

瓦葺破風造九坪、社殿は平成二年三月一日未明焼失。平

成三年七月再建。

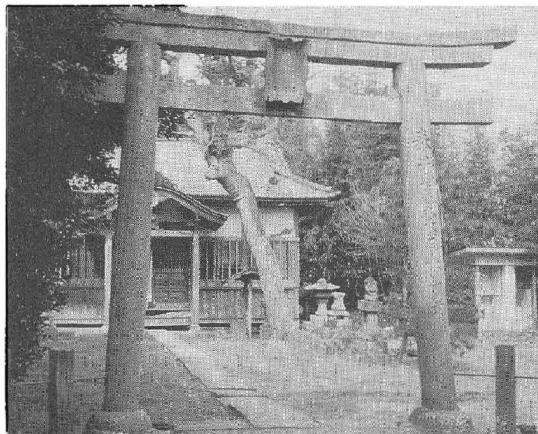
建造物 ①織立 ②鳥居（石造明神鳥居尙奉寄進第六天宮

御實前尙元禄三年庚午九月十九日願主栗尾村飯高重兵衛）③弁財

天（寛保元歳九月 飯高十兵衛同内方 同名宗兵衛同内方 同名

助右衛門同内方）④力石（奉納勇力石正味二十四貫目岡浜若者

中）



写31 面足神社（栗生岡）川島撮影  
（本殿は平成2年（1990）3月焼失）



写32 焼失前の面足神社 社殿正面 川島撮影

- ⑤ 道祖神 (一九〇六年正月廿日)
- ⑥ 石碑 (正面足神社 五峯高林寛拍手敬書大正七年戌)
- ⑦ 石碑 (奉納御影板石廿四枚明治三十九年一月)
- ⑧ 西宮大明神 (飯高十兵衛十郎右衛門元文四未年正月二十日)
- ⑨ 大黒天自在天神 (飯高十兵衛宗兵衛十郎右衛門元文四未年十一月廿一日)
- ⑩ 石灯笼 (天保十年亥霜月日俊次郎綱支配人利七同神合佐二兵衛)
- ⑪ 石灯笼 (奉納天保十年霜月日飯高俊次郎)

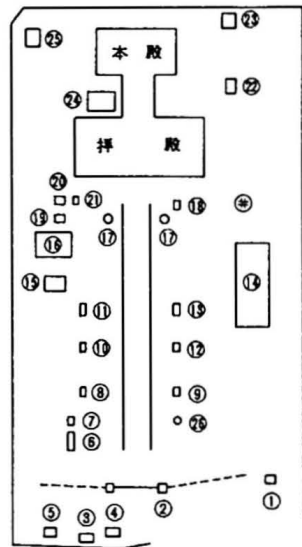


図10 粟生面足神社配置図

第一章 郷土の神社

⑫ 石灯笼 (御神燈沖合篠崎佐七天保四巳九月十九日石工大沼田七郎右衛門)

⑬ 石燈籠 (御神燈飯高重兵衛同陸藏天保四年巳九月十九日石工大沼田七郎右衛門)

⑭ 社務所 ⑮ 子女神社 ⑯ 御輿堂

⑰ 狛犬 (願主沖合伊右衛門飯高宗兵衛延享三年寅九月十九日江戸八丁堀石工上総屋仁兵衛)

⑱ 御手洗 (御寶前湯浅文三郎吉田喜兵衛享保十八歲癸丑正月吉日)

⑲ 船玉宮 ⑳ 大龍王

㉑ 御手洗 (奉納嘉永六丑閏九月吉日納屋松本千代姿)

㉒ 疱瘡神 ㉓ 撰社 ㉔ 御輿堂

㉕ 石灯笼 (奉納平成元年春吉日)

撰社 子女神社 (磐長姫命)

疱瘡神社 (白兔神)

熊野神社 (明治四十一年五月二十日移築合祀)

秋葉大神 (伊弉諾尊)

香取大神 (経津主命)

道祖神 (猿田彦命)

管理 粟生区

祭神は、修験道で信奉された天界最高位にある第六の魔王(第六天)であったが、明治初めの神仏分離令に

より、面足命おもあそのみこととなり、社名も「第六天宮」(大六天王宮)から「面足神社」となった。この両神は、天神七代(神代七代)の神々の六代目にあたることから第六天に擬せられたものといわれる。ちなみに七代目は、伊邪那岐、伊邪那美両神であり、天神七代の最後の神とされる。

面足命(男神)とは大地の表面が完成したことを意味し、惶根命(女神)とは、いよいよ大地が成り立ち、「あやにかしこし」と美称したものとされる。

小川家文書によれば

「 覚

一、富田村駒形大神、上武射田村武射神社、小関村、粟生村面足神社、右四社において五穀豊熟之御祈禱仰せ付けられ候に付き、大参事甲賀秀実来ル十八日御代拜として相越され候間、村役人一人居村御先払致すべき候也(後略)

明治三年正月十五日柴山郡政方

とあり、明治三年にはすでに面足神社と改称していたことがわかる。

神社創建年代には次のような諸説がある。

- 一、応永年間(一三九四～一四二七)千葉県編上総国山辺郡神社明細帳。
- 二、大永二年(一五二二)口碑。
- 三、貞享二年(一六八五)神社名鑑。

以上であるが、金丸善兵衛家文書によれば、粟生村より知行所宛に提出された記事の中に祭礼は「延宝三四年頃より相始り候由…」とある。延宝三年は一六七五年である。

粟生飯高家（表・本家）の系図（東京在住、続山静子氏蔵）によれば、千葉一族である飯高家の祖は、その居城飯高城（現 八日市場市飯高）の守護神として妙見導星王、大六天王の二神を祀<sup>よ</sup>っていた。応永二十一年（一四一四）十一月、飯高左衛門胤氏は、飯高城より大六天王を勧請、粟生村に神殿を造立、子孫がその神主の職を務めるようになった。と記されている。神社創建年代は、「神社明細帳」にある応永年間とするのが妥当ではなからうか。

附言

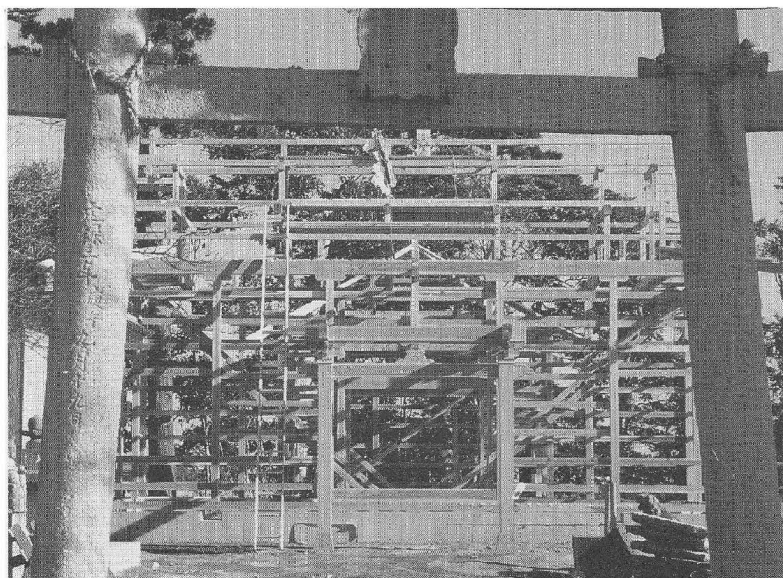
社殿および神輿舎は、平成三年七月落成した。

淡島神社（淡島様）

西野岡に鎮座

祭神は少彦名命。  
すくひのひこのみこと

例祭日は、旧二月三日。境内は九二・七平方メートル。本殿は四坪、御手洗（奉納弘化三歳）  
（八四〇）



写33 上棟式翌日の再建を目指す面足神社  
(1992.2.8.) 木津川撮影





写34 淡島神社(西野岡) 木島撮影

丙午正月がある。

縁起、由緒については明らかではないが、和歌山県の加太神社の祭神を淡島様という。元禄年間(一七〇〇年前後)、淡島願人が神棚を背負い、全国的にこの信仰を広めた。西野の淡島神社も、そのころの勧請であろうか。

婦人病平癒、安産を祈る女人の信仰をあつめ、またこの神を頗利采女はかりさいめというところから、針供養とも結びついた。昭和二〇年代まで祭日には露店も並び、賑わいを見せていた。

管理 齊藤益胖

若宮八幡神社

西野一七七三番地

(八幡様)

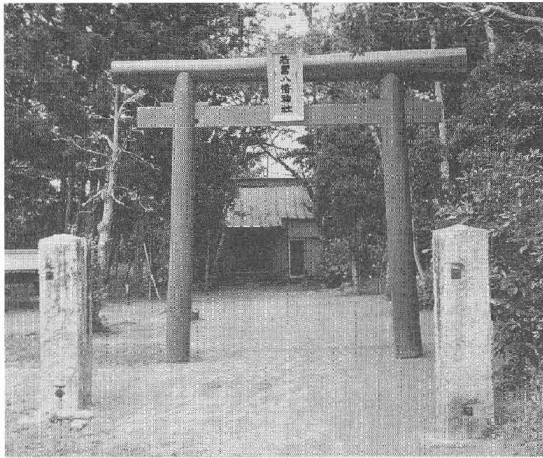
祭神 誉田別命はんだわかのみこと

例祭日 一月一五日、旧九月九日(一〇月一七日に変更)

境内 一五九七・二〇平方メートル

社殿 拜殿二二坪 幣殿二・二五坪 本殿三・五坪

建造物 鳥居(木製朱塗り)、「若宮八幡宮」の扁額、幟立(二九六カ)(昭和四十四年建之西野区氏子中)、御手洗(二八三三)(奉納文政六歳)



写35 若宮八幡神社(西野納屋) 川島撮影

未九月吉日願主當村齊藤長兵衛江戸赤坂五丁目金木屋權八、狛犬(二八六四)(尙奉文久四子年正月吉日尙納西野村大野源太郎)

管理 西野納屋区

創建は、一六六九年(寛文九)一月豊後守代官上野伊左衛門尉の勧請といわれる。当時は、正八幡大菩薩(八六〇)と称され、修覆願主地頭、遠山次郎兵衛尉と共に、村人の農業豊饒、息災安穩、寿命延長、代官長久延命、萬民快樂(一六六)を熟禱(一七〇)せるに其の靈驗者しきものあり。明治初年、若宮八幡神社と改称された。(「由緒記」による)

面足神社(第六天)

不動堂八二番地に鎮座。

祭神 面足命 惶根命。

例祭日 旧九月九日

境内 一三七三・六平方メートル

社殿 本殿五坪二合五勺

建造物 鳥居(石造明神、尙奉建立第六天王命御實前不動堂村

畑中惣氏子(一七三)尙保三(一七三)亥九月中村源之進正重佐久間覚兵衛勝命)御手

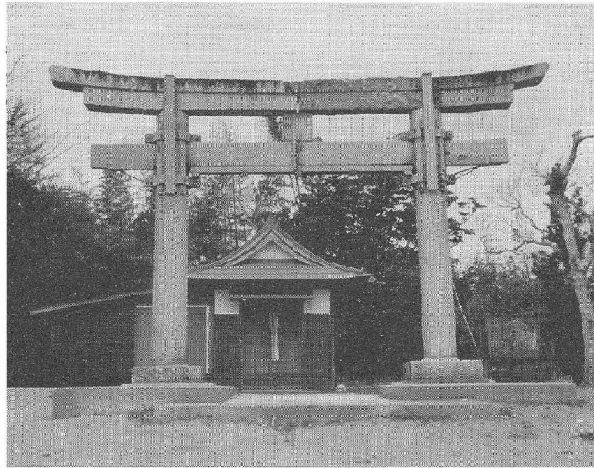
洗(一八六)(奉納萬延二年西三月吉日)

摂社 道祖神 管理 不動堂畑中区

縁起には、享保三年(一七一八)九月吉日、氏子の安全、

五穀豊穰、災害除去の守護神として奉斎されたと伝えられ

る。  
(「神社名鑑」による)



写36 面足神社(不動堂) 川島撮影

八幡神社(八幡様)

不動堂二七番地に鎮座。

祭神は菅田別命。古河正明に

よれば、御神体は僧形八幡であるという。八幡神が本地垂迹によって釈迦如来とされたことになる。

境内 七四〇平方メートル。

社殿 本殿三坪

建造物 烏居(木製) 御手洗(奉納當村古川五右衛門安

政四丁(一八五七)  
巳年九月吉日)

当社は、赤松家(東金酒井氏家臣団、東土川衆)の氏神で、同家旧宅内にまつられていたと伝えられる。古く

から近隣村民の尊崇を聚めていた。(西野溝口利兵衛家文書にも、同家の祖が向野新田の下田一反二畝一五歩を御供料として奉納し、正月十五日の奉射ひしの席に招かれる約定がある)

なお、同社には青銅造の鰐口(町文化財)を所蔵する。その銘には「奉納御宝前願主中村正重敬白享保二十歳孟夏吉日」とある。

享保二〇年(一七三五)は、南町奉行組与力給知上総代官赤松源之進典村が、青木昆陽の指導の下にサツマイモを不動堂村に試作した年にあたる。奉納者中村正重とは典村の父である。正重は典村の試作の成功を八



写37 八幡神社(不動堂) 田村撮影

幡神に祈願し、鰐口を奉納したのだと伝えられている。

境内に、いぬまきの大樹(周囲三メートル、高さ二〇メートル以上)が三本あり、町の天然記念物に指定されている。(九十九里町の文化財) 九十九里町教育委員会発行) 管理 不動堂区

姫吉神社 不動堂新田に鎮座。

(獅子の宮) 祭神 経文張子の獅子頭

例祭日 一月一五日

境内 二三一・七平方メートル

社殿 本殿 七・五坪

建造物 鳥居(木製) 御手洗(奉納昭和十六年六月二

十三日)

撰社 二十三夜神社(三夜様)、祭神、月読命、本

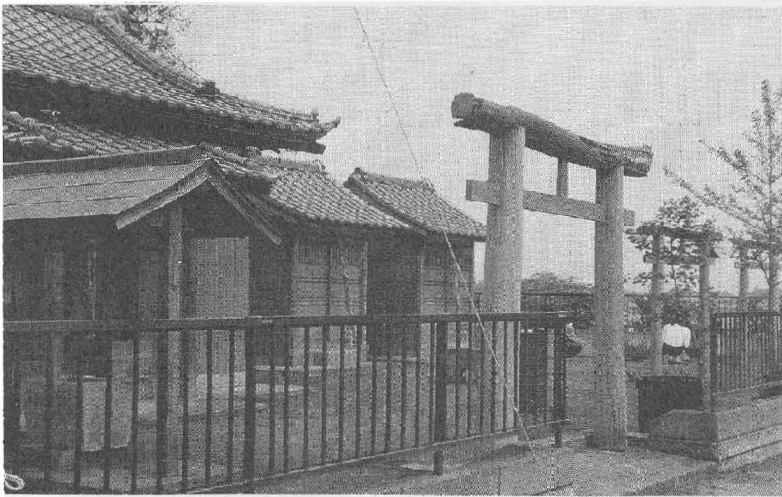
殿一・五坪

子安神社(子安様)、祭神、木花咲姫命、本殿一・

五坪

管理 不動堂納屋 新田区

本社の縁起については、次のように伝えられている。



写38 姫吉神社(不動堂新田) 川島撮影

一四八八年(長享二)、土氣城主酒井定隆のいわゆる「上総七里法華」発令により、不動堂畑中にあった真言宗寺院の住職法均は、生家桜井左内家へ密かに真言の経文を隠匿した。その後、桜井家の子孫は、一五九〇年(文禄四)、東金の彫刻師喜右衛門から獅子頭の型を借り、これに経文を貼付して張子の獅子頭を製作した。

この獅子頭は、不動尊・二十三夜社・網主佐久間覚兵衛家に保管されてきたが、一九二四年(大正一三)不動堂区民有志により一社を建築、これに奉納した。それから五十余年老朽、破損した社殿を、一九七六年(昭和五一)に新築、これを期に神社名を「姫吉神社」と定めた。(獅子舞の合の手に「姫吉様よ」という句からという)(九十九里町の文化財)

水神社(産土様)  
細屋敷三八七番地に鎮座。

祭神は水波能売命。

例祭日は一月一五日、九月一六日。

境内 六四四・二二平方メートル。

社殿 拜殿六坪、幣殿一坪、本殿四坪。

建造物 鳥居（石造明神佑率寄進鎮守水神宮御實前佑享保

五庚<sup>(二七三〇)</sup> 子年六月吉日 細屋敷村惣氏子 幟立（奉納昭和<sup>(一九六三)</sup>三十八年

九月吉日）

御手洗（奉納天保<sup>(一八三九)</sup>十亥二月吉辰）

摂社・合祀社

駒形神社（祭神稚産靈命大正四年合祀）御手洗（御實前）

子女神社・御手洗（奉納昭和<sup>(一九八〇)</sup>五十六年五月吉日）

縁起は不詳である。 管理 細屋敷区

龍 社 細屋敷五四一

祭神 海津見神<sup>わたつみのみかみ</sup>

例祭日 一月一六日、九月一六日。

縁起 不詳

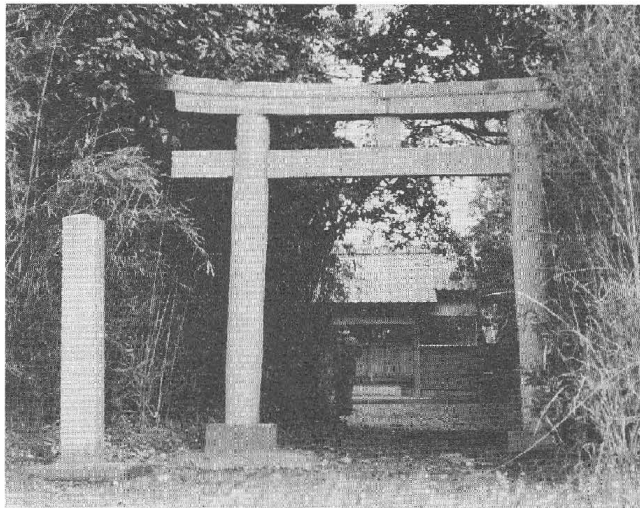
境内 四〇五・九三平方メートル

社殿 拜殿一二坪 本殿一・六五坪

建造物 鳥居（石造明神）御手洗（奉納昭和<sup>(一九二五)</sup>十年旧五月吉日）

管理

細屋敷納屋区



写39 水神宮（細屋敷岡）川島撮影

命)

愛宕神社(三夜様)

下貝塚二〇三番地に鎮座。  
祭神 月読命(月夜見之)



写40 龍神社(細屋敷納屋) 川島撮影



写41 愛宕神社(下貝塚岡) 川島撮影

第一章 郷土の神社

例祭日 一月二三日、旧九月二三日

境内 二〇一・三八平方メートル

社殿 拜殿八坪 本殿三坪

建造物 鳥居（石造明神奉納者当区佐久間佐一郎昭和二

<sup>(一九五三)</sup>  
十八年一月吉日）御手洗（奉納<sup>(一九三二)</sup>大正元年）織立（昭和二十

<sup>(一九五〇)</sup>  
九年十二月三十一日）

摂社 子安神社

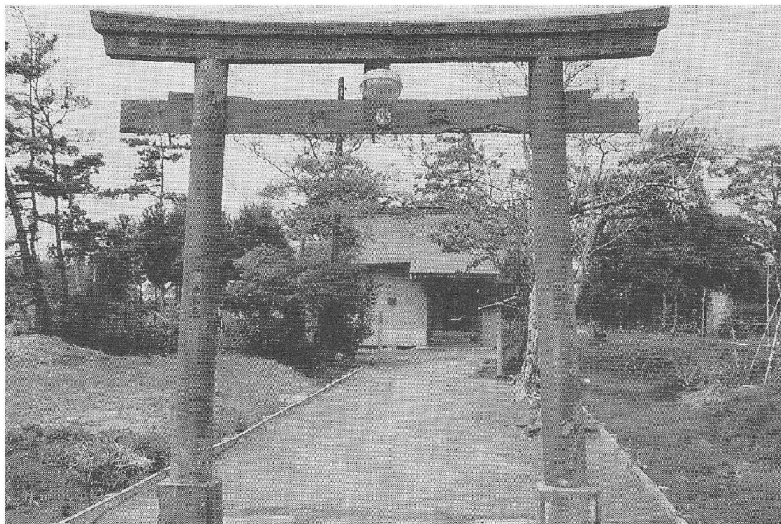
管理 下貝塚区

創立年代は不詳であるが、口碑によれば、享保年間（一七一六―一七五五）年、当村行木弥兵衛が、月夜見大神の靈験を感じ、村人とこの地を清め勧請、五穀豊穰、氏子安全祈願所として奉斎したという。（「神社名鑑」による）また、赤松家（現当主赤松正夫氏）の氏神であったとの伝えもある。

下貝塚八四三番地（卯高入）に鎮

座。  
天照大神社

祭神 大日雲女貴神  
おほひのもめむすめのかみ



写42 天照皇太神宮（下貝塚納屋） 川島撮影



第一節 豊海地区の神社

例祭日 一月一五日、九月一五日。

境内 五四八・六五平方メートル

社殿 拜殿一四坪、本殿一坪

建造物 一の鳥居(一九八三)〔天照大神社〕の扁額 奉納昭和五

十八年二月吉日区二同) 二の鳥居(一九六六)〔昭和四十一年九月吉

日(尙充兒丸) 手洗(二八五〇庚)〔奉納御實前嘉永 戊九月吉日) 錨(いか)〔鉄

製)

摂社 鵜羽大神(娶々神様)

管理 下貝塚納屋

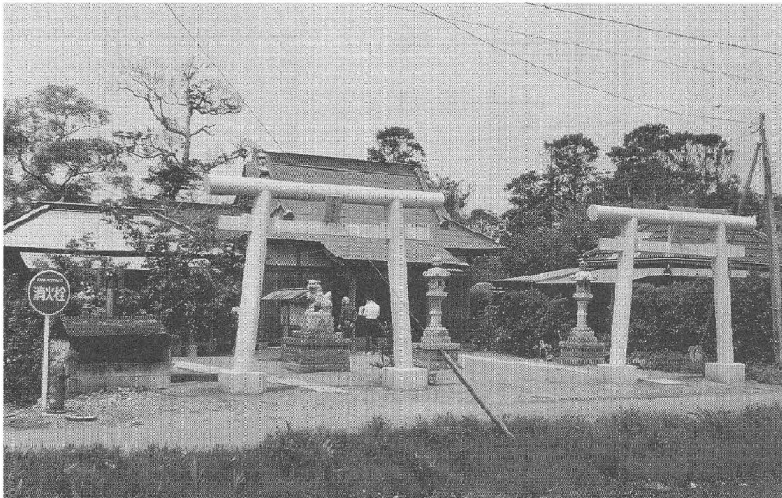
なお、縁起、由緒については不明である。

龍神社 藤下九一五番地に鎮座。

祭神 海津見神

例祭日 一〇月一五日

創立年代は不詳であるが、一七二二年(正徳二)、大沼新田の利右衛門という者が当浦辺に塩田をつくり、松下加兵衛の免許塩揚場を創設、塩田守護神として海津見神を勧請。一七七一年(明和八)村の鎮守



写43 龍神社(右)と月読神社(左) (藤下納屋) 川島撮影



写44 天照皇大神宮(宿新田) 川島叔影

社と称す。文化年間、当村岡の住人が浜に地曳漁業を創設の折、漁業の守護神として諸人の崇敬があり、氏子一八軒を以って祭礼を執行、以来、安永、天保、明治と三度に亘り社殿を改築したという。「千葉県明細帳」には祭神「高添加美命」とある。(「神社名鑑」による)

月読神社(撰社)

龍神社と同所に鎮座。

祭神 月読命

社殿 拜殿一〇坪 本殿二・五坪

建造物 鳥居二基 石灯笼 狛犬(一九三八年十月漢)

口陥落記念) 御手洗(一九五五年)(奉納二十三年昭和十年六月一日)、御

手洗(一九二五年)(文化十二年乙亥正月吉日藤下村納屋子安四郎右兵衛門)

管理 藤下納屋区

天照皇大神宮

宿一八二〇番地に鎮座。祭神

大日靈命。

例祭日 一月一六日、一〇月一六日。

境内 五一〇・六八平方メートル。

社殿 拜殿一二坪 本殿〇・五七坪。

建造物 鳥居(一九八三) (神明昭和五十八年九月建之) 石碑 (稻荷

大神) 石碑 (鎮座二百五十年記念昭和十六年九月十九日建之、

御手洗(一九七七) (元文)天 九月吉日宿新田村施主湯浅屋吉二郎、御手

洗(一四九) (嘉永二歲酉八月吉祥日大沼邑木村柳藏 同喜藏當邑入江元

吉 松井幸藏 小栗山丑太郎) 鈴(一八八) (文政元戊 八月吉日 願主

野口弥宗八)

合祀 稻荷神社 (倉稻魂命)

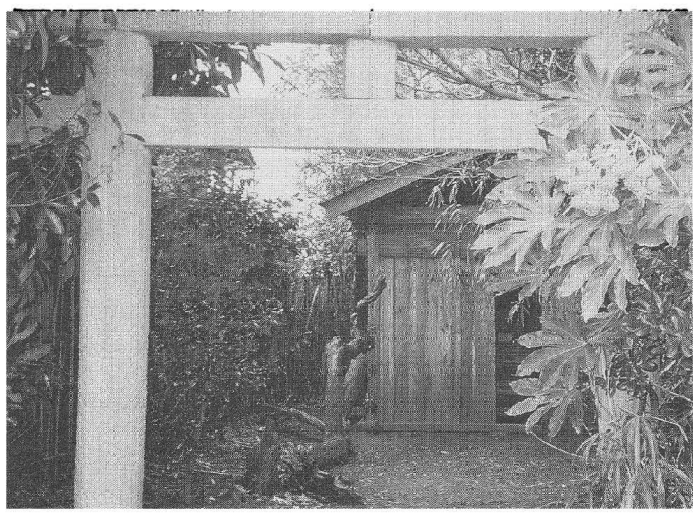
子安神社 (木花開耶姫命)

管理 宿新田区

本社は、一六九二年(元禄五)、御門村妙善寺三〇世日理師により、大日靈命を勧請したといわれる。その後、一七四〇年(元文五)五月に再建、社殿は、武射郡借毛村大工野口三重郎が建築した。(「神社名鑑」による)

水 神 社 粟生四八〇番地に鎮座。

祭神 水速女命 例祭日 縁起ともに不詳。



写45 水 神 宮(粟生岡) 木島撮影

第一章 郷土の神社

境内 一四八・五〇平方メートル

社殿 本殿二・二五坪

建造物 鳥居(石造神明奉寄進水神宮御實前 延享三歲<sup>(一七四〇)</sup>丙寅九月十九日)

(粟生村願主 飯高十兵衛 斉藤六右衛門)

管理 斉藤俊司

粟生岡

熊野神社

社殿なし、小祠のみ(明治二年<sup>(一八八〇)</sup>、面

足神社に合祀か。)

建造物としては、鳥居(上部欠 □□寄進熊野大権現御

宝前願主 斉藤□□□ 飯高□□□ 享保十六年<sup>(一七三二)</sup>辛亥九月一九

日) 管理 粟生区

若宮八幡神社 所在 粟生六八五番地

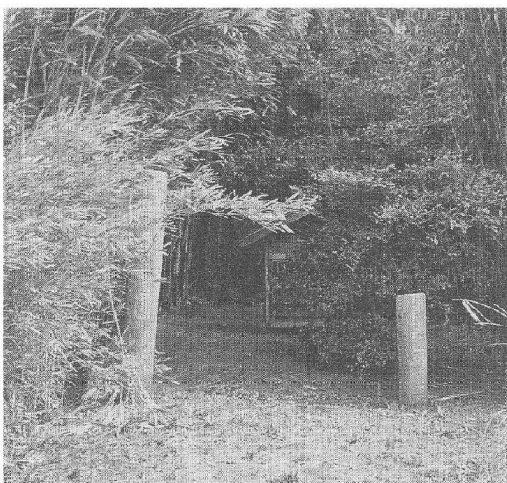
(若宮様) 祭神 菅田別命

例祭日 旧一月七日、縁起は不詳。

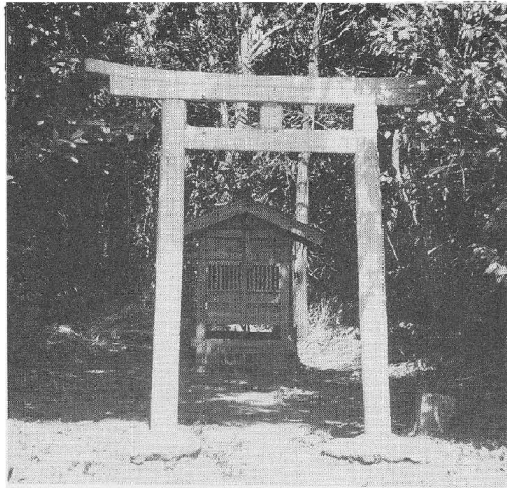
境内 二〇八・五平方メートル。

本殿 〇・五六坪。

建造物 鳥居(石造明神 佑明和三年<sup>(一七六〇)</sup>丙戌正月吉日 願主



写46 熊野神社(跡) (粟生岡) 川島撮影



写47 若宮八幡神社(粟生岡) 川島撮影

日月神社

所在 粟生岡

祭神 日月天王

境内 七〇平方メートル

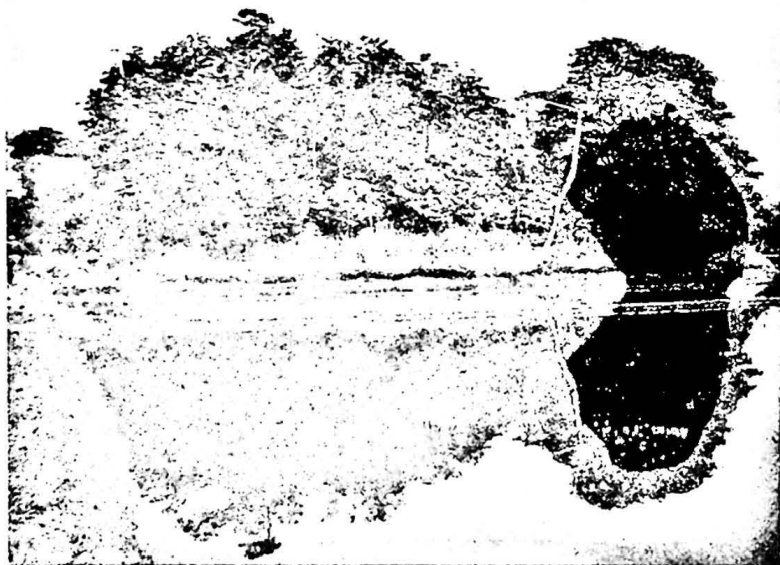
社殿 本殿〇・五坪。

縁起は不詳であるが、一八〇九年(文化六)の飯高家文書に「日月講という備社を催していた」という



写48 日月神社(粟生岡) 川島撮影

飯高総兵衛(寄進若宮八幡御寶前) 御手洗 (宝曆十三) 末飯高  
寛〇〇) 管理 粟生区



写49 上は粟生岡上人塚  
写50 下は八幡神社 川島撮影

記述がある。  
建造物 鳥居（石造神明貫を欠くゆ奉寄進大日月天  
王御寶前粟生村<sup>二ハシ</sup>延宝四<sup>丙</sup>辰九月十九日願主惣氏子）  
管理 篠崎大正

八幡神社(八幡様)

所在 粟生一三二  
四番地(上人塚)

祭神 菅田別命。例祭日 旧一月七日。

境内 一〇五〇・六二平方メートル。

社殿 本殿〇・五六坪。

建造物 鳥居(倒壊尙奉寄進八幡大菩薩御宝

口<sup>(四)</sup>御享保十八<sup>(二七三三)</sup> 丑九月十九日) 御手洗(願主 飯

高瀬源右衛門 〇七 文政四巳年九月吉日)

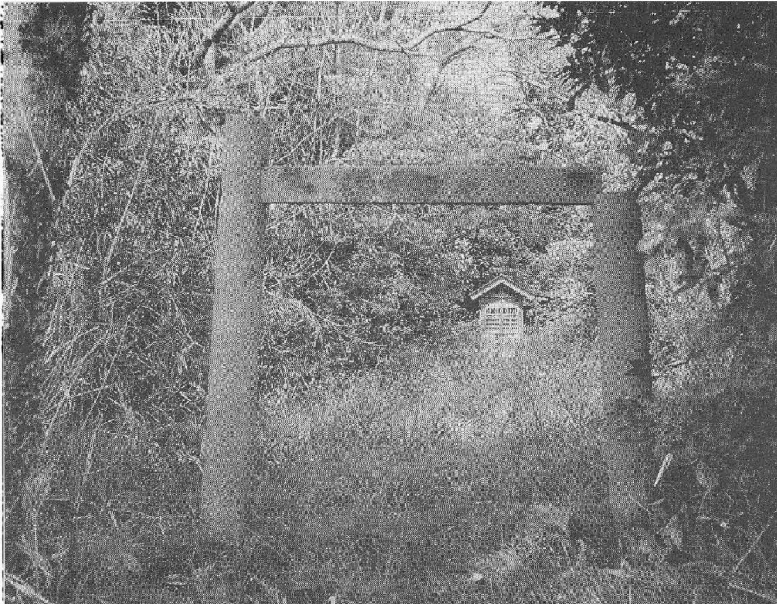
管理 粟生区

上人塚は、経文、仏具を埋めた地か？この地は元禄の大津波の時、納屋の人々が難を避け、波が高くなるにつれ、塚全体が浮き上り、難を免れたと伝えられる場所である。

諏訪神社(諏訪様)

所在 粟生一三〇  
〇番地。

祭神 建御名方命<sup>(行みなからのみこと)</sup>



写51 諏訪神社(粟生岡) 川島撮影



写52 龍神社(粟生新田) 川島嶺影

例祭日 旧一月一日。  
縁起 不詳。境内 六七四・八五平方メートル。  
社殿 本殿〇・五六坪。

建造物 鳥居(上部欠) 尙奉寄進諏訪大明神御實前

尙享保十五年(一七三〇)庚戌九月十九日 願主〇〇〇〇〇〇 管理

粟生区

龍神社(龍神様)

所在 粟生一八一八番地  
(新田字蓮川)

祭神 海津見神。例祭日 旧一月七日。

縁起 不詳。境内 六七三・二〇平方メー

トル。社殿 拝殿八・七五坪。本殿一坪。

建造物 鳥居(石造) 神明昭和三十九年八月十一

日、御手洗(奉納) 幟立(昭和五十五年一月吉日)

撰社 子安神社 御手洗(奉納) 安政(一八五〇)丙辰年四月吉

日當村納屋子安講女中) 管理 粟生新田区





写53 龍神社・子安神社(火消神社・西之宮大明神) (粟生納屋) 川島撮影

龍神社(龍王大明神・大海童神社)

所在 粟生二〇〇一番地

(通称龍神様)

祭神 海洋見神

例祭日 旧一月七日に近い日曜日

境内 四二二・四〇平方メートル 社殿

本殿二〇坪。

縁起 不詳。浜大漁と家内安全の守護神として崇敬をあつめる。例祭日には神輿と共に獅子舞をする。

(含祀)  
火消神社

祭神、水波女命・埴山姫はたけのひめ

(火消大明神)

命・(不動明王)

例祭日 旧一月二八日

創建年代は不詳。一九一三年(大正二)六月、龍神社に合祀。例祭日には、現在も旧住民、獅子連関係者は、風呂をたてないという習慣がある。また粟生納屋区だけの消防の出初式を行なう。

第一章 郷土の神社

なお、東金市上宿にも火正神社〔東金市史〕総集編五によれば、社名は、はじめは火消大明神といわれたというがある。この社の祭神は伊邪那美神の子 迦具土神（火の神）とされるが、粟生火消神社の祭神は「日本書紀」によれば、迦具土神の妹にあたる。

西之宮大明神 〔舎祀〕 例祭日 旧一月七日。

（恵比須様） 建造物 鳥居（石造明神）二基、幟立、御手洗（船中安全 寛延二己年十一月 飯高長五郎）

摂社 子安神社 祭神 磐長姫命

例祭日 旧一月一四日

社殿 本殿九坪。 建造物

御手洗（奉納文久元酉年五月日 納

屋女中衆） 管理 粟生納屋区

八幡大明神 所在 粟生納屋

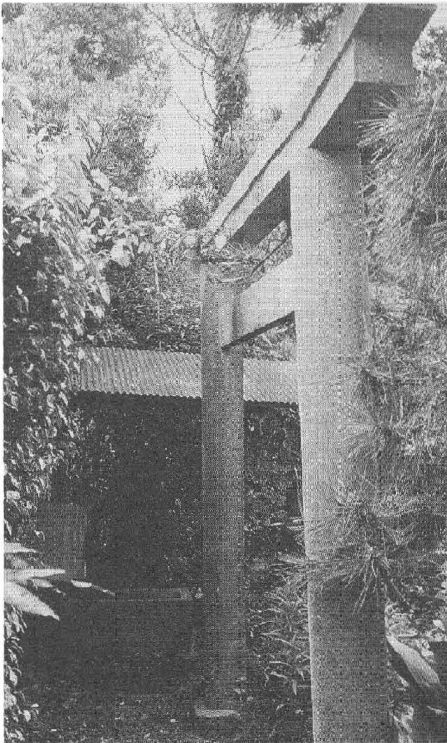
祭神（不詳） 菅田別命か。

社殿、本殿七・五坪

建造物 鳥居 御手洗（奉納

八番組 昭和三年二月廿七日） 地

蔵尊（昭和十一年二月吉日） 八幡大



写54 八幡大明神（粟生納屋） 川島撮影

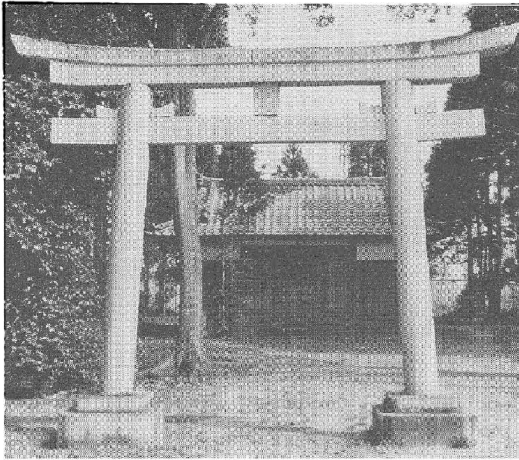
明神(二九七五) (昭和十年十二月二十八日)。供養塔(二九七七) (南無妙法蓮華經 昭和十二年旧七月信者一同建之)

管理 粟生納屋 (八番組)

熊野神社 真亀一四七四番地 (東土川境) に鎮座。

祭神 建速須佐之男命

例祭日 一月二日 九月二八日。



写55 熊野神社(真亀上) 川島撮影

境内 一二四九・三二二平方メートル。

社殿 拜殿一二坪。幣殿三坪。本殿四坪。

建造物 鳥居 (石造明神佑奉十一月吉日願主中村覚左衛門他五

名(二八三六) (納天保九年加藤五郎左衛門他四名) 御手洗 (奉納三峯山昭和

三年一月吉辰) 御手洗 (奉納御實前願主新網仲間)

踏石 (施主濱野村小倉覚治郎)

摂社 三峯神社 他二社 管理 真亀全区

所在 真亀上荒場。

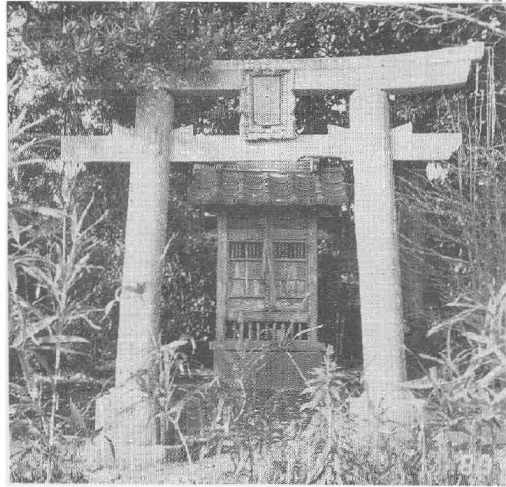
祭神 (不詳) 水速女命か。

例祭日 一月二七日。

縁起 不詳。境内 一〇〇平方メートル。

社殿 本殿〇・二五坪。建造物 鳥居 (石造明神佑奉昭和

第一章 郷土の神社



写56 水神社(真亀上) 川島撮影

境内 三〇平方メートル。社殿 本殿一坪。

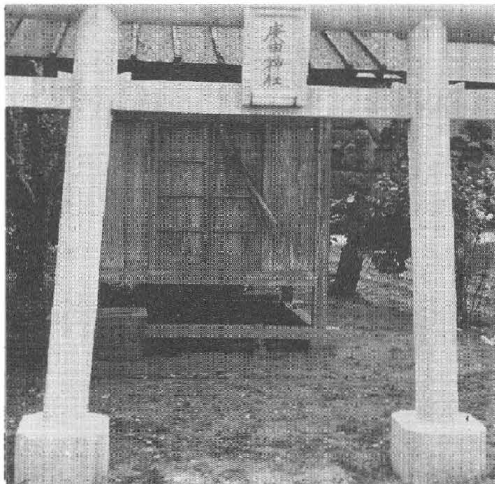
建造物 鳥居(コンクリート製昭和六十一年十一月三十

日)御手洗(奉納昭和十一年九月)

管理 井沢俊雄

水神社

所在 真亀二三一五ノ一番地・二三  
一六番地。



写57 庚申神社(真亀下) 川島撮影

(一九三四年) 御納 九月吉日) 御手洗(奉納昭和九年九月吉日)

管理 真亀上荒場入地

庚申神社

所在 真亀下川島前。

祭神

青面金剛神しょうめんこんごうしん。縁起

由緒は不

明。

祭神 水速女命。例祭日 旧一月二〇日、一〇月一七日。

境内 六一六・一七平方メートル。社殿、本殿八坪。

建造物 ①②木製朱塗両部(四脚)鳥居、③并財天、④子安神社、⑤八幡神社、⑥八幡神社、⑦鳥居(奉納

昭和十二年六月吉日)、⑧御手洗(大正十三年八月吉日)、⑨石柱(御御大典記念昭和参年六月吉日建之(大村入地)、⑩

撰社、⑪御手洗(奉納文政二年五月吉日(當村字津木七兵衛)、⑫天神社(菅原道真公)、⑬(折武運長久 事変一周年記念

昭和拾貳年七月七日造立)、⑭踏石(奉納昭和二年六月一日)、⑮踏石(奉納武運長久昭和十二年八月下青年団)、⑯御手

洗(奉納御實前延享五年十一月吉日(願主真龜村桜井次郎衛門)、⑰撰社

撰社 八幡神社 子安神社 天神社 并財天 他四社

創建時代は不詳であるが、真龜下入地の氏神として崇敬をうけている。正月の祭日には獅子舞は悪魔払いのため全戸を廻っていたが現在は、岡、納屋の氏神様を廻っている。夏祭は区社須賀神社の渡御に参加する。

諏訪神社 所在 同所

祭神 建御名方命。

例祭日 一月 五月 九月二七日。

社殿 本殿四坪

創建年代不詳。明治末期、水神社の地に移

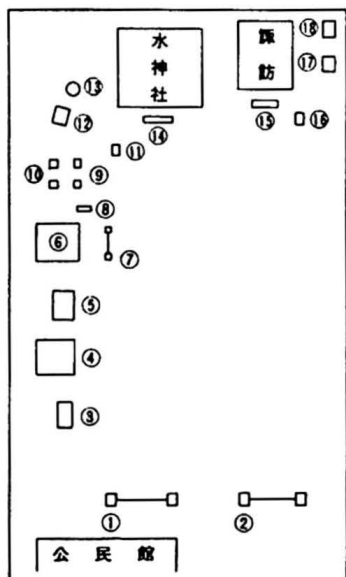
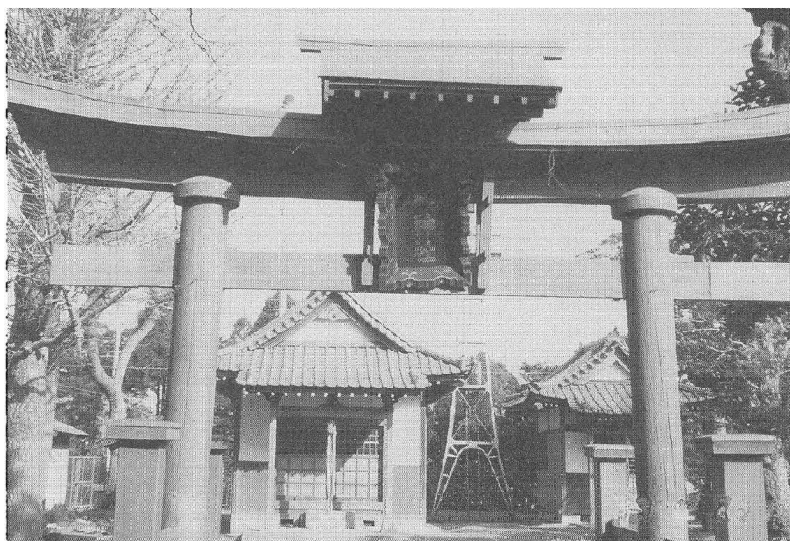


図11 真龜、水神社、諏訪神社配置図



写58 水神社(左)と諏訪神社(右) (真亀下) 川島撮影

築合祀。中村太郎右衛門家文書「諏訪再興縁起」

(修<sup>ちゅう</sup> 葺<sup>り</sup> 諏訪宮上梁文 寛文十二年(一六七二)九月二十

九日、経王山日靈によれば、

「…村ノ東沙浜ニ鎮座<sup>し</sup>在<sup>し</sup>テ老若ノ歩ヲ運<sup>フ</sup>宝殿ナリ。  
而シテ松老山<sup>まね</sup>菴<sup>あま</sup>之佳境、昔竹蒼柏之祠林古木枝ヲ交エ海<sup>うみ</sup>  
嶺<sup>ね</sup>若<sup>わか</sup>ヲ重<sup>かさ</sup>ネ幾屋箱ヲ経タル奥深キ神社也。……」

とあり、真亀の字諏訪の地がかつての鎮守地であつたのであろう。また同文書にはさらに、昔、八尺の蛇(信州諏訪大明神の化神)が海上より出現、これを守護神として祀つたと記されている。また、内山信雄家の祖、縫右衛門が神の化神である白蛇を祀り、同家の氏神として崇敬したとの伝えもある。

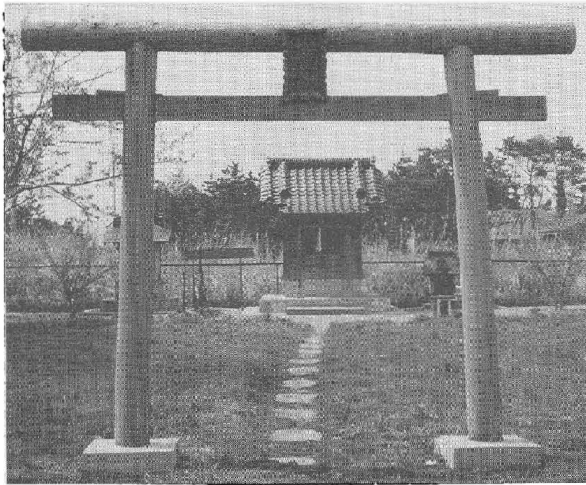
管理 真亀下(第二自治区)

龍宮神社

所在 真亀竜宮前四三三二ノ一

例祭日 一月二〇日。

境内 六五七・八五平方メートル(旧境内は真亀川河川敷拡張のため、河川内となった)。



写59 龍宮神社(真亀) 川島撮影

社殿 本殿一坪

建造物 鳥居(木製「龍宮神社」の扁額) 幟立(御大典記念) 鉄製锚 御手洗(奉納願主 當村 左次衛門 文政二)

卯天十月吉日)

撰社 三峯神社

創建年代は不詳。豊漁、漁業安全を祈願して勧請。

往古は真亀岡の氏神であったといわれる。昭和初期、海岸白砂地に移転したが、漁業事故が続発し、再び元の場所に戻した。(内山信雄談) 管理 真亀三、五

区

蛭子神社 所在 真亀四二二三番地

(恵比須様) 祭神 蛭子神(恵比須)

例祭日 一月二〇日。境内 六七二平方メートル。

社殿 七・五坪。本殿 二坪。

建造物 鳥居(木製) 御手洗(奉納願主當村佐次衛門

文政二卯天十一月吉日)

創建年代不詳。恵比須=蛭子神は、元來、漁民や海人の間に漁業を保護する神(海の彼方の異郷から訪れ幸福

をもたらず神)として信仰をあつめていた。

管理 真亀三・五区

稻荷大明神 所在 真亀北浜屋布後四〇九七番地。

(稻生神社) 祭神 稻生神。

例祭日 一月二二日。

境内 四九九・一七平方メートル。

社殿 拜殿(一九三三) 二二坪 本殿一・三七坪。

建造物 鳥居(木製朱塗) 鳥居(木製) 御手洗(奉納大)

(一九三三) 正十五年旧十一月) 正一位稻荷大明神

摂社 薬師様 子安神社 竜神宮(流造)

創建は、安永五年(一七七六)と伝えられる。(山辺

郡神社明細帳)によれば)

管理 真亀新田区

顯利大明神(七四) 所在 真亀新田。

(センガシ様) 祭神 五智如来(顯利信土)

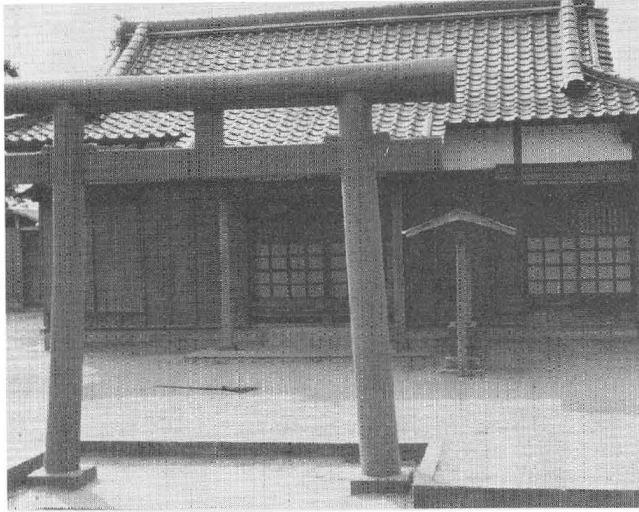
境内 六四平方メートル。社殿 本殿〇・六九坪。



写60 蛭子神社(真亀) 川島撮影



第一節 豊海地区の神社



写61 稲荷大明神(真亀新田) 川島撮影



写62 顕利大明神(真亀新田) 川島撮影

建造物 御手洗 (奉納明治四十四年七月世話人中)  
(二八三〇)  
 年四月十七日卅三回忌造立之

口碑によれば、天明から寛政期(二七八〇年代)、当地に滞在した修験者を祀るといふ。

管理 真亀新田区

三夜神社

所在 真亀納屋

祭神 月読命(月夜見命)

例祭日 一月二〇日

境内 二六〇平方メートル

第一章 郷土の神社

社殿 本殿一・二・五坪。

建造物 御手洗(一九三三)  
御手洗(一九三三) 奉納昭和七年三月吉日

幟立(一九三三) (皇太子殿下御誕生記念昭和八年十二月)

管理 真亀三、五区

(川島秀臣)

参考文献

千葉県神社庁編

千葉県神社名鑑

千葉県編

千葉県山武郡神社明細帳

明治一二

歴史と旅 昭和六四年二月号

秋田書店

川口謙二著

神々の系図

東京美術

昭和六三

井上光貞監修

歴史散歩事典

山川出版社

昭和五五

九十九里町教育委員会編 九十九里町の文化財

昭和六三

なお、次の方々から御教示をいただいたことを付記して、感謝の意を表する。(順不同、



写63 三夜神社(真化納屋) 川島撮影

敬称略)

内山信男	篠崎大正	篠崎長夫
篠崎敏	白石勝人	鈴木和
鈴木銀市	中村太郎右衛門	古河正明
平川松己	行木利夫	

## 第二節 片貝地区の神社

皇産霊神社(関 片貝五一五九番地(前里)に鎮座する。

万歳)旧郷社

祭神は天御中主神・高皇産霊神・神皇産霊神の三柱の神。境内は一九四六平方メートル

ル。例祭日は二月一日。社殿は、拜殿が瓦葺入母屋造一二坪。幣殿は銅板葺、一〇坪。本殿は、瓦葺流造九坪。内陣は一間社流造り、屋根は檜皮葺破風造りで、内部が一間正面二か所板扉になっている。中央は扉口破風軸部は几帳面角柱。柱に麻様模様が目立っている。花肘木葺股は、近世初期の様式で、特に海老虹梁逆蓮柱に特色がある。

また、本殿入口向拝の柱の二双竜の彫刻には、「(東京浅草神田川住 俊元九代孫東喜斎嶋村俊豊 同富五郎俊照 全八太郎俊正)」と記されている。

建造物

①鳥居(石造明神型尙奉裏に皇産霊神社氏子一同建之由納裏に平成元年十二月吉日、旧鳥居は貞享五<sup>(二八八)</sup>戊辰年九月

第一章 郷土の神社



写64 皇産靈神社(前里) 古川力撮影

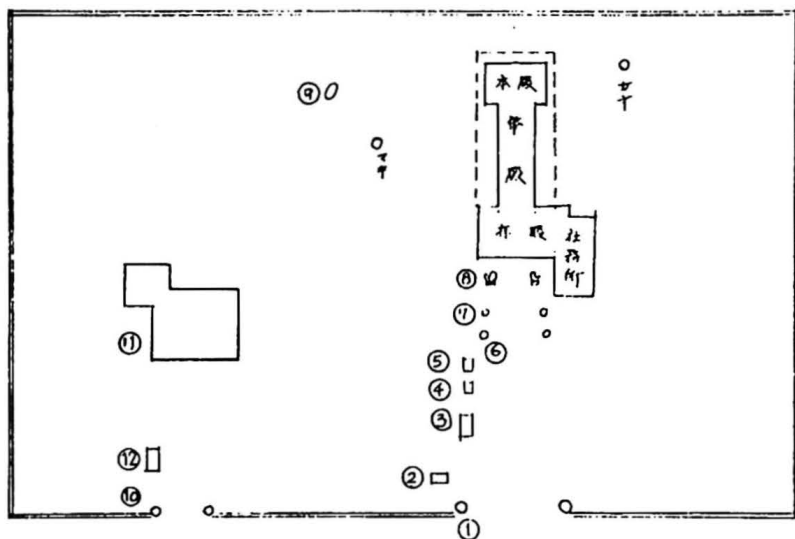


図12 皇産靈神社配置図 田村作図

吉日、片貝村氏子によるもので破損著しく危険なため新たに建立)、②石碑(表郷社皇産靈神社裏昭和九年旧九月吉日古川廣)、③・④・⑤御手洗、⑤は「奉納第六天神(尙文化十五)」<sup>(一八一〇)</sup>庚午年正月吉日(尙當村須原冲合重五郎)、⑥燈籠(白石にスクリユの印あり大正十五年旧三月建之別に寄付者の名を記した碑あり)、⑦燈籠(尙奉納船中安全海漁満足天保九戌年五月吉日願主鈴木幸右衛門(尙天保九戌年五月吉日願主鈴木九郎左衛門)、⑧狛犬(尙石工江戸八丁堀上総屋兵衛(尙寛延三年九月吉日鈴木条之助冲合権介)、⑨さし石(□□三巳歳初秋式拾七貫目須原小高弥八)、⑩鳥居(コンクリート)、⑪御手洗(御實前當村願主小河宇左衛門)撰社、⑫子女神社(合祀八坂神社)社殿 九・六五坪。(公民館・消防庫としても使用)

本社は、朱雀天皇の天慶年間(九三八―九四六)の創建で、往時は本隆寺を別当寺とし、第六天神宮と称したと、口碑に伝えられる。一八三九年(天保一〇)の上棟の際の記録が「小川家文書」にみえるので、次に掲げたい。

「 奉 願

一、風折烏帽子淨衣御許状

一、上棟略次第

一、三部御被神伴式次第

一、願名酒井長門源勝房

右は私儀職分ニ付上棟之節御家御作法ヲ以テ執行仕り度願ヒ上ゲ奉リ候、然ル上ハ御家御法令堅ク相守リ申スベク候。右ニ付自他故障御座無ク候間此段宜敷御沙汰願ヒ上ゲ奉リ候

天保十亥年八月

上総国山邊郡片貝村

第六天神宮大工

吉田様

御役所

前書之通願ニ付奥印仕り候以上

上総國山邊郡片貝村

第六天神宮大工

酒井氏重藏

宮別当本陸寺

名主 藤左衛門

俗名 北増勘右衛門事

酒井長門守源勝房

右上棟之節風折烏帽子淨衣并ニ上棟略式三部被等免授之事□承り置ク者也

但采九月中本紙引替フベキ事

天保十亥年八月九日

神祇官領吉田殿

關東御役所

奉願

(同 文略)

上総國山邊郡片貝村

第六天神宮大工

俗名 八右衛門悻甚藏

土田大阿藤原義徳

『九十九里町誌資料集』第七輯下所収

とある。その後、一八八二年(明治一〇)上屋修築、一九一三年(大正二)には拝殿新築、同年、郷社となる。

例祭日には各部落からの幟を立て、須原の羯鼓舞、屋形、西の下の獅子舞の奉納が続けられている。

特殊神事として、例祭日には神官は翁かみなの面をつけ、五穀豊穡・大漁満足の祈願をし、福の種蒔きを例とし

ている。

また、内陣に「愛染明王」と称する画像がある。

(1)「第六天」とは、仏教でいう天部の三界のうち欲界に属する六重の天の最高の所。「他化自在天」のこと。ちなみに、第一から第五天までの他の神々がつくり出した対象についても、自在に楽しみを受けるのでこう名づける。

面足神社 旧村社

(第六天様) 所在地 小関二二七番地。

祭神 面足尊(游母陀流神)・素盞鳴尊・水波女之命。

例祭日 一月一日、一〇月一七日。

境内 三四四八・五平方メートル。

社殿 拝殿、瓦葺向拝造

一一坪、本殿、銅板葺(千

木・堅魚木)九坪。

建造物 ①鳥居(鉄板で被

覆されている。礎石に大正五年

九月吉日とある)、②御手洗

(表、奉納御實前御延享三丙三

月吉日由願主小関色板倉庄衛

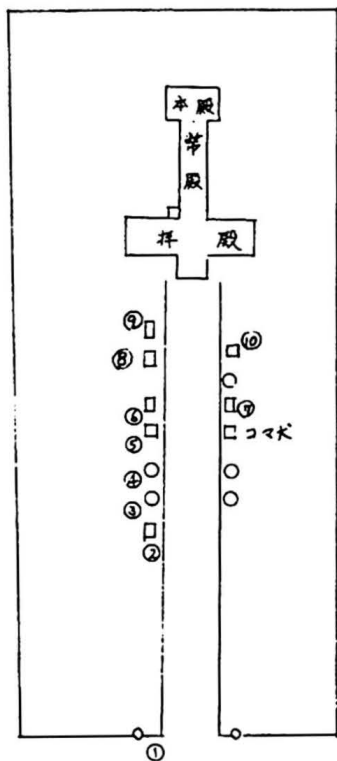
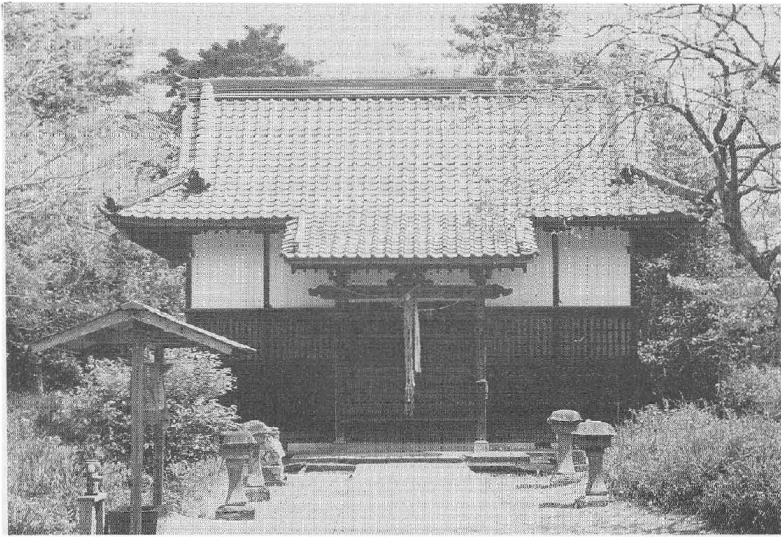


図13 面足神社配置図 田村作図



写65 面足神社(小関) 木島撮影

門)、③燈籠(佑御實前願主新網寛延三歲午九月吉日、上総  
國山辺郡小関村佑御實前願主本網寛延三歲午九月吉日、上総  
國山辺郡小関村)、④燈籠(佑奉納御實前小関村親船宝曆十  
三癸未九月吉日佑奉納御實前願主小関村親船宝曆十一己巳歲九  
月)、⑤狛犬(御實前寛延二年己巳上総國山辺郡大榎村八川  
村惣氏子中・網方二帖子女兵吉)、⑥燈籠(御實前諸願成就  
上総國山辺郡大榎村)、⑦燈籠台石(正面裏に卍の紋、左  
右に三つ巴紋)、⑧燈籠(御實前上総國山辺郡小関村)、⑨  
燈籠(御實前願主巳待講中寛延三歲午九月吉日上総國山辺  
郡小関村)、⑩燈籠(御實前平山権左衛門鈴木勘六寛延三年  
午九月吉日)

古老の口伝によると、当社は、一〇三八年(長暦  
二)二月の創建と伝えられ、一四八七年(長享元)以  
後、第六天社と称した。一五九三年(文祿二)四月、  
宮殿再興の棟札、一六九二年(元祿二)三月、宮祠再  
興の筆録がある。

一八六九年(明治二)「神仏分離令」により、面足



神社と改称し、現在に至っている。その後、一九二六年（大正二五）拜殿改築。一九四五年（昭和二〇）三月、米軍機の爆撃により本殿焼失。一九五一年（昭和二六）九月、本殿・幣殿を再建竣工した。その後、四十余年、老朽化に加えて、一九八七年（昭和六二）千葉県東方沖地震の被害により、荒廃甚だしく、平成三年四月より社殿の修復中である。

また、別の口碑によれば、往古この地に棲む大蛇が人を害し、これを退治するために素盞鳴尊を斎祀されたという。

また、この地に原因不明の病いが流行し、多くの村人が犠牲になったので、村人が集まって相談した結果、打上げ花火を奉納し、祈禱したところ、その靈験あらたかとなり、以来秋祭には必ず花火を奉納する慣習となって現在も続けられている。戦時中は火薬がなく、線香花火を奉納した。

摂社 子安神社

社殿 二坪。建造物 鳥居（石造）<sup>（一九六九）</sup> 奉納  
小関女人中<sup>（一九五三）</sup> 御手洗（奉獻昭和二十八年九月吉日小関本区女人中）

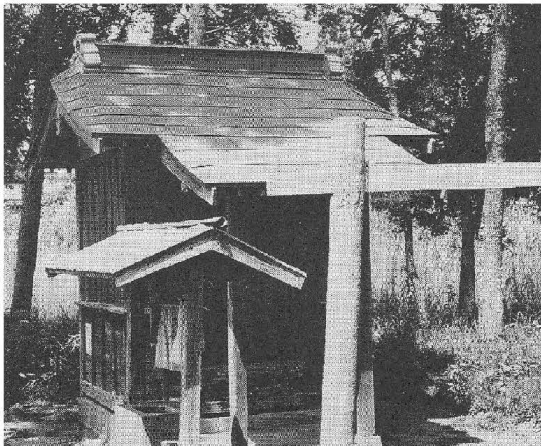
旧村社

面足神社

所在地 田中荒生四一六番地の二

祭神

游母陀琉神



写66 子安神社(小関) 木島撮影

例祭日 一月二日、二月一日、九月九日。

社殿 拜殿八坪、幣殿二坪、本殿破風造四坪。

境内 八七五・一五平方メートル

建造物 ①鳥居(一九五五) (石造明神尙奉昭和三十四年一月十日尙田中

荒生氏子建之)、②御手洗、③さし石(二八四九) (嘉永二己酉年四十二日

七月十五日奉納さし石當村金、倉、兼松、矢向弥五郎)、④鳥居

(撰社子安神社の鳥居石造明神尙奉昭和四十一年九月尙納田中荒生

氏子)

撰社 子安大明神、社殿一坪。一月一七日例祭日として、子安講の祭りを執り行い現在にいたる。

合祀社 八大龍王、駒形神社、愛宕神社、八坂神社。

口伝によれば、一七四四年(延享元)九月祥日、小関村

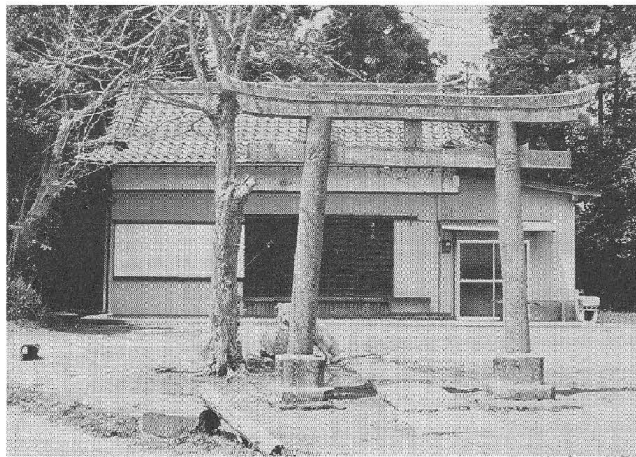
東頭山妙覚寺一五世日信にん師、田中新生村惣氏子、同名主

都辺新太夫が願主となり第六天社を創建する。

明治初年、神仏分離令により、湍母陀琉神を祭神とした面足神社と改称した。

以来、幾星霜、氏子による修築が行なわれたが、詳細は明らかでない。

一九五二年(昭和二六)氏子一結して本殿拜殿の大改修をし、同年九月九日遷宮祭を執行し、神威の高揚と



写67 面足神社(荒生) 木島撮影



写68 さし石(荒生面足神社境内) 木島撮影

氏子崇敬者の敬神の念を新たにした。さらに、一九七六年(昭和五〇)、拝殿の大改修を行ない瓦葺屋根とする。

巖島神社 所在地

片貝五九五一番地。

祭神 市杵島媛之命。  
いちきしまのひめのみこと

例祭日 一月二日。

社殿 拝殿三坪。本

殿一坪。

境内 二七〇二・七

平方メートル。

建造物 鳥居(石造・明神) 幟立、御手洗。

棟札によれば、一六八六年(貞享三)日光辯才天女、願主片貝

村一結敬白。又曰く元文二巳(二七三七)年二月吉日辨在天女神

信心之靈惣氏子敬白とある。一九五六年(昭和三二)修復され

た。

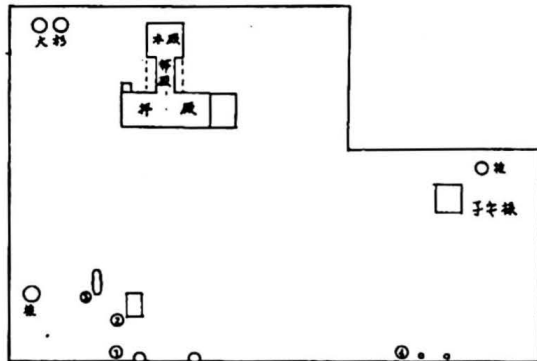


図14 面足神社配置図(荒生) 田村作図



写69 巖島神社(弁天沼) 木島撮影

(一) 弁天・大井才功徳天ともいう。古くはインドの河神として崇拜され、後に梵天ばんてんの妃とされた。音楽・財物・智慧ちゐの徳がある。像容は天女形で、吉祥天とともに最も多く信仰され、仏教に入って古くから造像され、もと河の女神であったところから、日本でも弁天の祠堂は、湖辺・海辺にある。

實船神社(實船様)

所在地、片貝三四二番地。  
(法久)

祭神 高雷龍神たかねりゅうじん。例祭日、二月第一・第三日曜日。

一〇月第一日曜日。

社殿 拜殿七坪。本殿一坪。(垂鉛引鉄板葺)

境内 一六五平方メートル。

建造物、鳥居(コンクリート・昭和(一九八五)十年建立) 御手

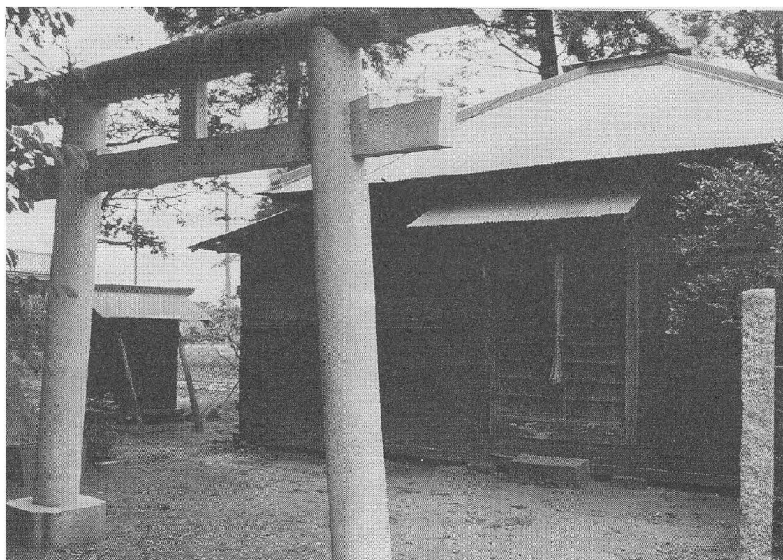
洗(御實前 古川市右衛門 高柳八郎兵衛 寛保(一七四三)二戊戌九月

吉日) 幟立(慈恵大学卒業記念 昭和十二年三月 吉井與

志雄)

撰社 子安神社。

創建は不詳であるが、寛保二年(一七四二)寄進の



写70 貴船神社(法久) 木島撮影

御手洗が現存するところをみると、そのころに建立されたものと推察される。

口伝では、一八三〇年(天保元)に建てられた社殿は、一九一七年(大正六)三月西風の強い日、火災に遭って焼失し、古文書なども鳥有に帰したという。

鳳凰神社

所在地、片貝四四一番地。(川間)  
祭神 日本武尊

例祭日 一月二八日。

社殿 瓦葺九一平方メートル。境内、四五八平方メートル。

本社の沿革を示す古文書として、「鳳凰大明神御厨子裏書寫」があるので引用したい。

「鳳凰大明神御厨子裏書寫

(二七三〇) 享保五 子 歳九月吉日

寄進し奉る新桐中間

南無鳳凰大明神御寶前 願主

古川権三郎

志 南部平兵衛

享保五 庚 子 年九月吉日

願主古川與兵衛敬白一枚

右裏書の御札は天明五巳六月御札納め候節城之内新次

第一章 郷土の神社



写71 鳳凰神社(川間) 木島撮影

郎内神へ持参納め候

鳳凰大明神は往昔より社地共に城之内布留川氏所持なり。然る所河間屋内の者信仰致し、其上下部平兵衛縁者故拜殿萱立し、之に依り御札へ南部氏番記す。然りと雖も古川氏所持之神社に候間、子孫永々心得の爲に之を書く者なり。

鳳凰大明神御宮殿裏御札三枚之れ有り候。古川新次郎内神へ御札老枚之れ有り候。天明五巳六月宮殿之を塗る。此時御札之を改め、此寫新次郎内神一枚與兵衛内神二一枚之を納めし者なり。

天明五巳年六月二十五日

布留川與兵衛久富謹書

片貝村川間鳳凰原に勸請し奉る鳳凰大明神御札裏書寫  
宝永五戌子十一月十五日

願主 古川與兵衛御札一枚

延享四丁十二月吉日 日慈審判 古川弥平次

信心願主 南部平兵衛御札一枚

成就山本隆寺二十三更 片貝村 布留川新

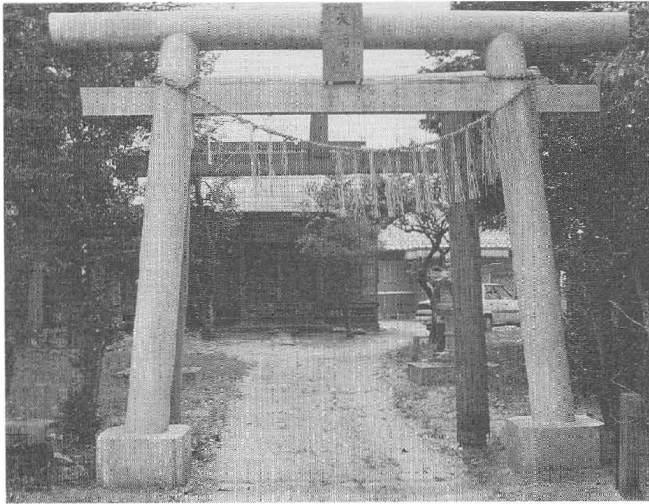
次郎武知

天明五巳六月

日格審判

城之内 布留川與兵衛久富御札一枚

布留川弥平次



写72 菅原神社(天満宮)中里 木島撮影

とある。一八九八年(明治三二)までは、現在の境内地の東方五〇メートルの地にあり、再建を三か年計画で立案、青年館建設と併せて実施、免田を埋め立て、一九七八年(昭和五三)一月着工、同年三月竣工した。

現在では、区会、消防、婦人会、敬老会、子供会などの会合に活用された。

建造物、鳥居(石造・明神) 御手洗(一九三五)  
氏

菅原神社(天満 所在地、片貝二八二番地の一  
宮・天神様) (中里)

祭神 菅原道真公

例祭日 一月二三日

社殿 六坪。

境内 三七六・二メートル。

建造物 鳥居(石・木) 燈籠(二対) 御手洗(抱茗荷の

紋あり) 石碑(一九三三)  
次郎九十歳小川萬之助)

再興世話人 南部喜兵衛

子安神社(子安様)

所在地 片貝五九二一番地(西)

社殿 一五坪

境内 一〇九・〇九平方メートル

建造物 地藏尊(背面に「由来」あり。昭和十六年三月建立(一九四二))

現在は、西区の公民館として共用している。旧正月二七日、婦人によるピシヤが催され、安産と繁栄を祈願する。

八坂神社(天王様)

所在地 片貝五〇六四番地の二

(高畑)

祭神 素戔鳴尊。古くは牛頭天王。

例祭日 二月七日、六月七日。

社殿 八・七坪。境内 四三六・三六平方メートル。

摂社 子安神社(三坪)

創建年代は詳らかでないが、一五二八年(享祿元)と伝えられ、その後、一八二二年(文政四)火難に遭つたため、一八二三年(文政六)再建され、永く高畑区の守護神として崇められてきた。

戦後、一九五二年(昭和二七)修復した。

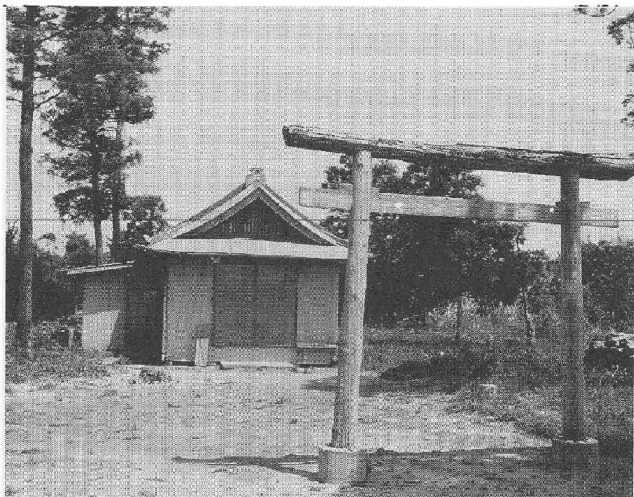
古来から、五穀豊穡・悪疫退散を祈願し、氏子の信仰が篤かった。幟旗に「奉納牛頭天王宮」記されているが、虫くいのため年代不詳である。



写73 子安神社(西) 木島撮影



第二節 片貝地区の神社



写74 八坂神社(高畑) 木島撮影



(北) 木島撮影

一九七九年(昭和五四)土地改良法により換地、旧所在地は、片貝五五二八番地。社殿内には、武運長久祈願額、国防婦人会写真などがある。

八坂神社

所在地 片貝五二九〇番地。  
(北)

祭神 須佐之男命。  
すさののおみこと

例祭日 二月七日。

社殿 拜殿二坪、雨屋〇・五坪、本殿〇・一  
二坪。

境内 一六五平方メートル。

摂社 子安神社(一・七五坪)

建造物 鳥居(木) 御手洗(二八五六)丙辰  
(奉納) 安政三辰年

二月七日(當村北、北新田氏子中)

創立年代は不詳であるが、当氏子部落は、高畑地内の新田地で、元和年間(二六一五―二三三)に、古川八左衛門という者が、高畑の古川家より分かれ、当地区の開拓に当たったといわれる。従って、高畑の八坂神社の分霊を勧請創建されたものと思われる。

古老の言によると、氏は「裸参り」と称し、例祭日は寒さをつけて、当番の家で沐浴ゆぐ潔斎し、新しい下帯と足袋のままに額かぶづくことをならわしとした。この神事は、明治二〇年ごろまで継続されたと伝え



写75 八坂神社(右)と子安神社(左)

られている。

八坂神社(牛頭天 所在地 片貝四三八九番地の二(北新田) 祭神、須佐之男命。古くは牛頭天王。例  
 王神社・天王様) 祭日、二月七日、二月一日、一〇月一七日。 社殿、二四坪。 境内、九九平方メ

ートル。 建造物、鳥居(石造・二基) 御手洗(自然石) 幟立台。

一九五五年(昭和三〇)、社殿を新築し、皇産靈神社・子安神社・龍神社を合祀した。  
 管理は、区内の順番制で、例祭日の宿(当番)が毎年当たっている。

八坂神社 所在地 片貝四三四〇番地(南新田)

祭神、須佐之男命。社殿、一三・五坪。 境内、一二八・九二平方メートル。 建造物、

鳥居(石造) 御手洗(自然石) 旗立(昭和三年十一月吉日 御大典記念 外に境内に大楠、牡丹桜あり。

道祖神(道陸) 所在地 片貝四五九九番地(南新田)

神様・観音堂) 社殿、瓦葺一坪。 境内、五平方メートル。

かつて御神体の礎石の裏側に、古川卯之松の記があったが、現在はない。木札(陳札)に「奉修覆道祖神文  
 政九戊年四月〇日、大工甚蔵」とある。

所在地 片貝四二二三番地。(下夕谷)

諏訪神社

祭神、建御名方命。

例祭日、九月一九日、正月一四日。

合祀社、子安大明神(木花咲耶姫・大正七年合祀)・天満宮(菅原道真公) 社殿、合祀社を含めて二二坪。 境内、

第一章 郷土の神社



写76 八坂神社(北新田) 木島撮影



写78 道祖神(南新田) 木島撮影



写77 八坂神社(南新田) 木島撮影

第二節 片貝地区の神社

三六六・三平方メートル。

建造物、鳥居（石造）御手洗（大正十二年三月吉日  
中西徳三郎）

創建は不詳であるが、一九一九年（大正八）子安  
大明神合祀、天満宮扁額あり。なお、お曼陀羅  
（享保一三年一七二九）、御題目扣帳（文化四年一  
八〇七年）を収蔵する。

八坂神社（天王様）  
所在地 片貝二一五三番  
地（下モ谷）

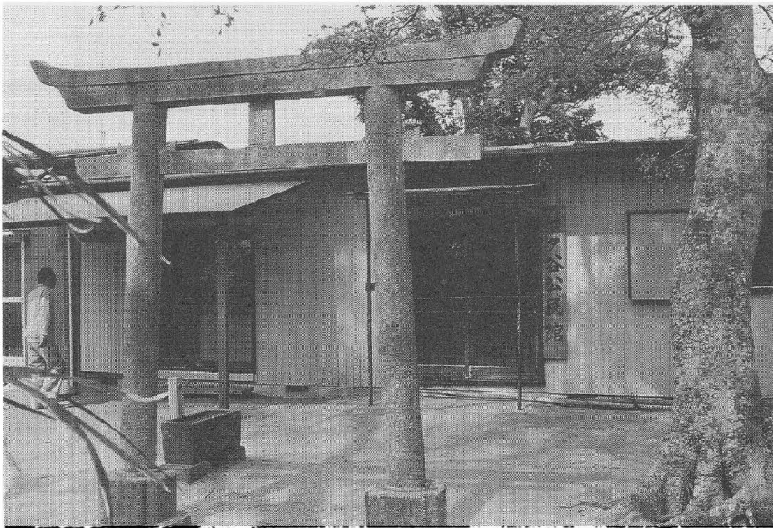
祭神 素盞鳴命。古くは牛頭天王。

例祭日、二月七日。 社殿、一〇坪。

境内、二五四・一平方メートル。

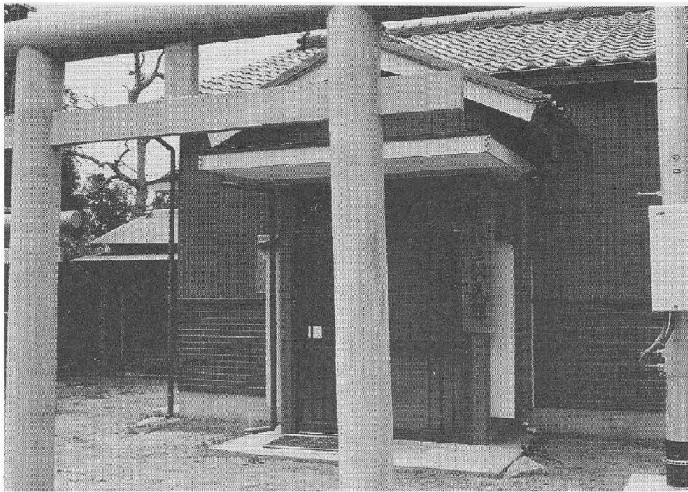
建造物、鳥居（石造）撰社、子安神社（二坪）鳥居（石  
造）

創建は詳らかでないが、御神札によると、「明和  
（一七六八）  
五年戊子歳本隆寺二十世日演師書、南無妙法蓮華  
經牛頭天王、再興仏師武射田村川嶋時左衛門」と



写79 諏訪神社（下タ谷） 木島撮影

第一章 郷土の神社



写80 八坂神社(下モ谷) 木島撮影

残されていることから、それ以前の創建と想定される。

当時は牛頭天皇神社と尊称されていたが、一八七六年(明治九)以降から八坂神社と改称され、氏子の崇敬をあつめてきた。以来幾星霜による老朽化のため、護持運営に困難をきたし、一九八五年(昭和六〇)、氏子の総力をあげて全面改築をし、正・五・九月、二月七日の新年祭(春祈禱)の祭事をしている。

水神社 所在地 片貝一一二番地(水神山)

(水神様) 祭神 弥都波能売命。例祭日、二

月二〇日。

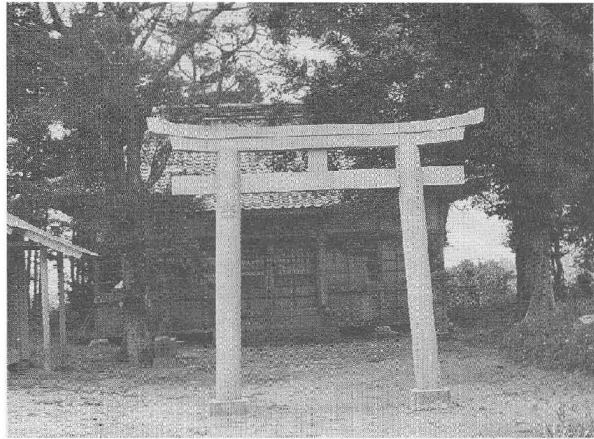
社殿、拜殿一四坪、幣殿三坪、本殿四坪。

境内、一六三〇・二平方メートル。

建造物、①参宮橋(石造大正三年)、②鳥居(石造昭和四  
 (一九七四) 九年) 旧鳥居には、「華寄進水神宮御宝前、寛保元  
 (一七四二) 年九月九日、片貝村屋形惣氏人」と記されてあった。

③記念碑(昭和九年拜殿新築)、④摂社、子安神社(三坪)、⑤御手洗(嘉永三(一八五〇) 庚戌年三月吉祥日屋形古川金

藏水神山鈴木源藏)、⑥社務所(区民会館) 昭和六三年新築(六坪)、⑦石碑(尚延享三(一七四三) 丙寅年(今関仁右衛門岸本孫八)、



写81 水神社(水神山) 木島撮影

験あらたかと伝えられている。

社伝によれば、農地の寄進も一町一反余りあり、九月の秋祭りには神楽の奉納と菊人形も盛大で、露天も張られて盛況であった。往古は水神郷(屋形郷)と呼ばれ、当社は、水神山・屋形・北増・中新田・新堀新田の五地区の総氏神として崇敬されていた。

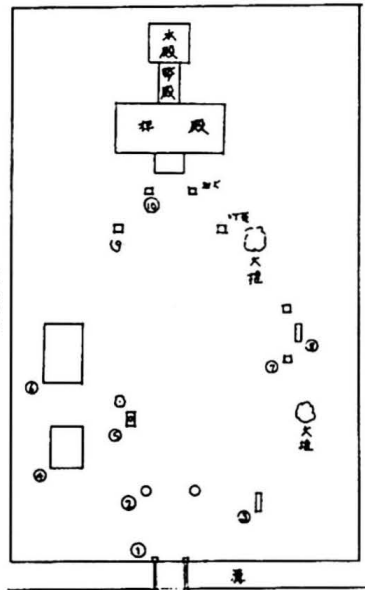
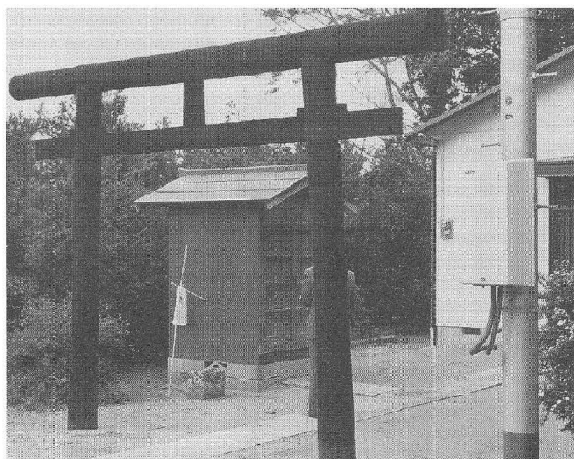


図15 水神社配置図 田村作図

⑧背面金剛像、⑨燈籠(文化六<sup>二八〇</sup>九<sup>二</sup>巳年正月吉日古川右馬之助一丁目同仙太郎)、⑩狛犬(寛保元<sup>一七四一</sup>辛酉年九月九日鈴木助左衛門高橋惣右衛門)

創建は詳らかでないが、奉納されている鳥居などによって古くから崇敬されていたことが推察される雨乞い・安産の靈



写82 稲荷神社(中新田) 木島敏彰

一九三四年(昭和九)拜殿落慶。一九五一年(昭和二六)本殿再建杉皮葺。一九八〇年(昭和五五)瓦葺かえ。一九九〇年(平成二)社殿内外壁、本殿廊下修理、屋根塗装。神輿はかつて皇産靈神社に鎮座した。

稲荷神社

所在地 片貝一八七四番地の二、(中新田)

祭神 宇迦之御魂神。猿田彦神。大宮女神。

例祭日、二月一日(初午の日) 社殿、一

二坪。摂社、子安神社。(〇・二五坪) 建造物、鳥居(木

製) 御手洗(二七五甲)(宝暦四年十一月吉日、施主南部氏) 神像(狐の

台座像えびす大黒像昭和一七年奉納)

口伝によると、伏見稲荷大社の分霊を奉斎し、正一位稲荷大明神の記録が見られる。古老の言では、宝暦年間(一七五一―一六四)には、当区の南境に鎮座し、社殿広柱で、子供が梁の上で遊べたという。老朽化により現在地に遷座し、一九八四年(昭和五九)に改築し、公民館と共用して現在に至っている。以前は、屋形の獅子舞の奉納、村回りがあった。

恵比須神社

(夷榎・天王様)

田

所在地 片貝一四四〇番地。(新堀新

祭神 事代主命。



例祭日 二月七日。

境内社 八坂神社、子安神社。

境内 四七八・五平方メートル。

社殿 拜殿六坪。幣殿一・五坪。本殿三坪。

建造物 鳥居（石造尙奉起立鳥居、夷大明神宮正徳元<sup>（一七二二）</sup>辛卯九月

吉日尙上総國山辺郡片貝村願主敬白）神輿庫（一〇坪）御手

洗（元文四<sup>（一七二九）</sup>己未年九月〇〇）狛犬（昭和七<sup>（一九三三）</sup>年旧十一月二十八

日屋形区氏子中）外に境内の東北隅に「西宮大明神之碑」

惣兵衛奉納の小碑があった。（昭和三五年調査）

創建は詳らかでないが、奉納の鳥居などから、一七

一年（正徳元）の建立と考えられる。

口伝によれば、中新田林与治兵衛氏の氏神八坂神社

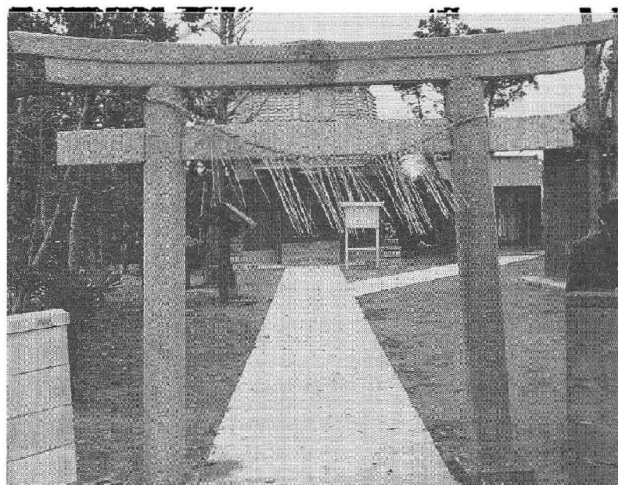
が、正月七日を例祭日とし、悪魔、悪疫を払う御利益

があると信じられてきた。嘉永・安政のころ（一八四八

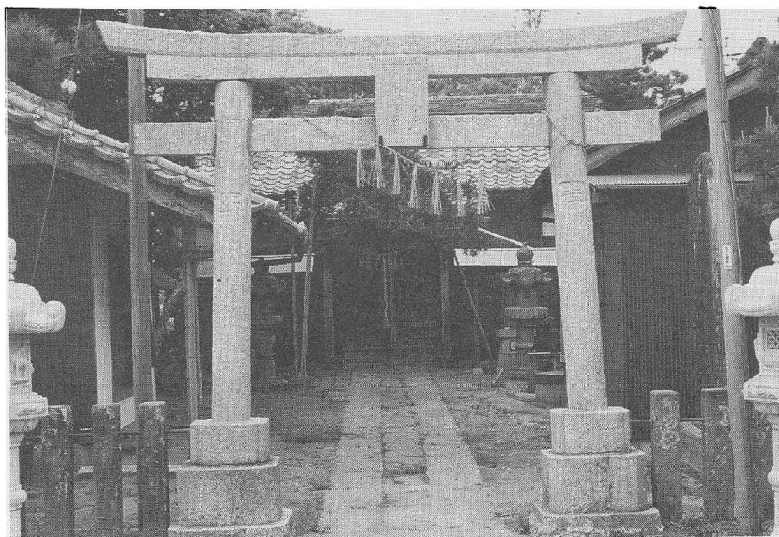
一六〇）、伝染病の流行を防ぐために前記の八坂神社を合祀したと伝えられる。一九二一年（大正一〇）、社殿

を改修、以後氏子により神徳の高揚につとめてきた。

当社の獅子舞は、同じ屋形郷の北増から伝えられたものと言われている。皇産霊神社の祭礼には宮獅子と



写83 恵比須神社(屋形) 木島撮影



写84 稲荷神社(須原) 木島撮影

して、須原の羯鼓舞について奉納される。翌日は村  
回りをして悪魔払いをする。

稲荷神社 所在地 片貝一九四七番地(須原)  
祭神 宇氣母智神。うけもちのたま(宇迦之御魂神)

例祭日、一月二二日。境内、二六〇・七平方メ  
ートル。社殿、拜殿一一坪。本殿二坪(内陣〇・二  
五坪)。摂社、子安神社二坪。稲荷社(〇・五六坪)  
建造物、燈籠二対(昭和六〇年、氏子中、大正六年正月  
吉日東部組合)鳥居(石造、大正六年旧正月二十二日)神  
輿庫 御手洗(奉納天保十四卯年正月二十二日願主須原  
二八四三癸) 御手洗(奉納) 神使(白狐  
神合源太郎、善太良、平太郎) 御手洗(奉納) 神使(白狐  
一対) 大正十三年二月吉日梅野平次郎石政刻) 玉垣(外周)  
創立年代は不詳であるが、漁家の信仰はことのは  
か篤い。例祭日には、神輿の渡御があり、浜大漁・  
岡満作を祈願する。羯鼓舞と神輿が氏子の家々の村  
回りをしお枚おけいをする慣習がある。

「須原」の地名は、江戸中期、中里城之内網に沖合

として招かれた紀州有田郡栖原村（現湯浅町栖原）の重五郎が、一本松と呼ばれた地に居住し、「須原の重五郎」と俗称されたことに始まると、されているが（町誌各論編上巻二五六ページ）、その際、郷里の栖原村の家中にある住吉神社の摂社「稻荷神社」（山城国紀伊郡伊奈利山鎮座の稻荷大明神（現在の伏見稻荷）を勧請）を分霊し、これを奉祀して屋敷の鎮守としたという。

その後、須原集落の戸数の増加に伴い、年代はさだかではないが、当社が数々の奇瑞を現わし、靈驗あらたかであったため、「正一位稻荷大明神」と尊称するようになった。

最近まで、祭礼当日の朝、重五郎の末裔である小川家（現在は町外に居住）が宮元として神社に詣でてから祭礼諸行事を始める慣例になっていた。

八坂神社（天王様）  
所在地 片貝三八八五番地。（西の下）

祭神、須佐之男命。例祭日、二月七日。境内、五五四・四平方メートル。社

殿、拜殿瓦葺七坪。本殿破風造六・二五坪。内陣板葺〇・四四坪。建造物 燈籠（二対）幟立（二対）鳥居

（石造、神明型奉納昭和二年二月吉日）御手洗（奉納大正十年一月早船松井茂三郎）狛犬、燈籠（一対）銚子港願主世話人

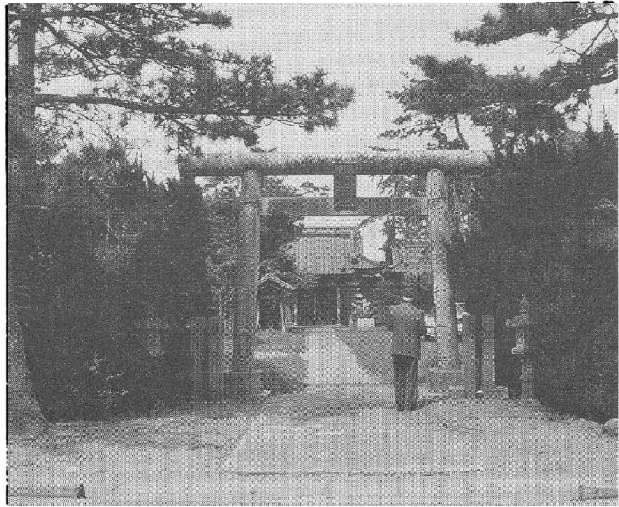
白鳥六藏、白鳥金太郎、太田美代子、芦崎甚三郎（銚子港願主瓦林留三郎、八木平吉、江戸野弥兵衛、高橋仙藏、尾張市五郎

大正八年）狛犬（昭和十二年旧二月七日二代目古川長太郎同房子）

摂社、子安神社、社殿四・五坪。石碑（子安大明神昭和二十七年二月初戌日西ノ下区北岸女中連 鳥居（奉納昭和三十

十年旧正月北岸子安講一同）御手洗（三基）。龍神社、〇・三七五坪。

創立年代は詳らかではないが、漁業家の信仰が特に篤い。



写85 八坂神社(西の下) 木島撮影

例祭日には神輿の渡御の外に、千葉県無形民俗文化財指定の獅子舞の奉納が行なわれている。

社殿は、一九〇四年(明治三七)の台風で倒壊、一九〇九年(明治四二)再建し、その後一九五二年(昭和二七)社殿及び神輿の大改修を行なった。同年、子安神社新築、遷宮祭、子供神輿の奉納があった。

盛大な祭事で村回りも二日の日時を費やし各氏子の家庭を巡幸して悪疫退散を祈禱した。現在はこちらも神輿を奉賛会で運営している。

月読神社(三夜様)

所在地 片貝四〇〇四番地。  
(北の下)

祭神、月読命。つきよみのみこと 例祭日、一月二三日。社殿、拝

殿瓦葺八坪。幣殿、銅板葺、四坪。本殿銅板葺四坪。

撰社、子安大明神(祭神木花咲耶姫)一坪。建造物、鳥

居(石道台輪馬居) 怡率大正十二年正月竣工石に工事世話人官本辰五郎、桑田浅吉、銚子町新生仲之町石工中嶋金之助(尙) 獻発起

人土田義一、木嶋大八、岸本弥三郎、松倉福司) 燈籠(一対) 御手洗(奉納三つ) 巴大正四年一月當区岸本徳太郎、細谷長吉、

木村松之助非常連(一同) 御手洗(天明元丑十一月吉日施主新生岸本市三郎) 御水屋(奉納長谷川勝雄昭和十五年十二月



写86 月詠神社(北の下) 木島擬影

吉目(御手洗(洗心月詠神社氏子中)玉垣(前面に)神輿庫(二二坪)境内、八五二・一五九平方メートル

創建は詳らかでないが、御神体には正徳三年三夜講

奉納と刻まれてあるのによつても、古くから尊崇を集

めていたものと推察される。「嘉永二年北組北之下契講

連名綴 契頭長次郎外十五名」によると、

「明治五年正月、免田新納屋場三六一九番地、田二畝二十

五歩二十三夜神社お賽銭にて金四圓買入れ、のぼり旗竿及

び台柱新調此の代金貳円十五銭、屋根普請金五円也」

の記録あり。

かつては、北の下のみにとどまらず、遠く町外から

の参詣者が多く、正月二三日の例祭日のみならず、五

月、九月の二三日には賑わいを示し、境内や社前には

露店が店をつらね盛況を呈した。

神社名も、二十三夜神社、月夜見神社、三夜神社などとも称され、北の下集落の発展とともに現在に及ん

でいる。社殿の老朽化に伴い、本殿は、昭和二年改築、<sup>(一九三七)</sup>拝殿は明治四十二年建立という。

平成元年(一九八九年)社殿の改築に着手し翌年竣工した。

特殊な神事として、昔から当社の草箒くまぼうしをもって「疣いぼ」を払うと治癒するという言い伝えがあり、参拝者はいまでも絶えない。

日枝神社(山王様)

所在地 田中荒生一〇三番地。  
(田中)

祭神、大山咋神おほやまのこ。

例祭日、二月二日(五穀豊作祈願)

春の祭り、九月十五日(豊作感謝祭) 秋の祭り。 社殿、

六坪境内、三九・六平方メートル。社田、二反四畝あり。

縁起は定かでないが、古老の言によると、あつく本社を信心すると、無病息災、五穀豊穰間違いないという。

その昔、ひどい日照り続きで、稲作を始め畑作まで大打撃を受けたが、当部落においては、その被害が非常に少なかったと伝えられる。昭和六三年(一九八八)、石造鳥居・御手洗が氏子によって建立された。

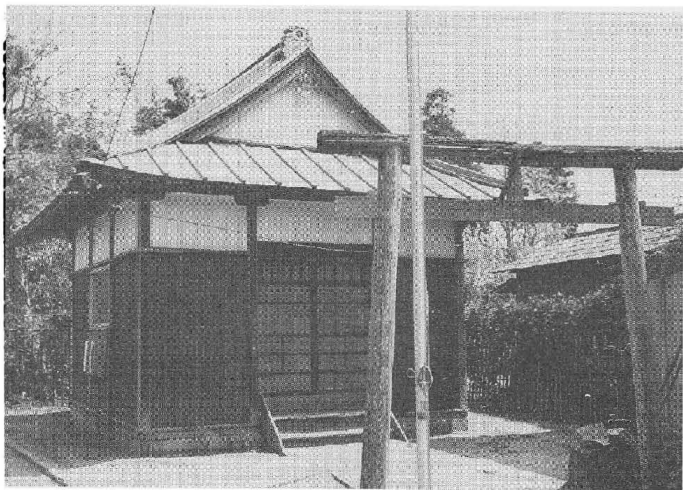
駒形大神

所在地 田中荒生一〇三六番地の二。  
(田中)。

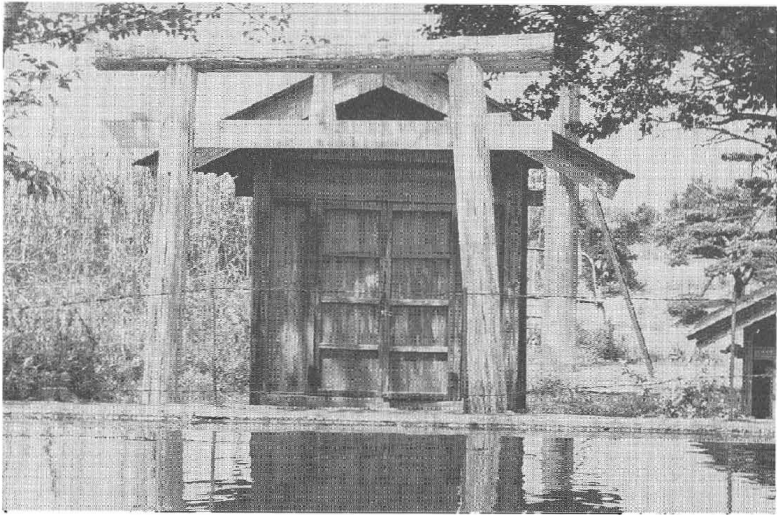
祭神、馬頭観音。

社殿、一坪。

境内二三・一平方メートル。他に神社所有の山林三三六平方メートルが



写87 日枝神社(田中) 木島撮影



写88 駒形大神(田中) 木島撮影

ある。

摂社、天満宮(〇・二五坪)

(一) 神仏習合信仰のころの名残り。馬頭大士ともいう。怒りのはげしさによって、人びとの苦しみを救う力を示す観音。六観音の一つ。観世音菩薩の化身で、煩惱を断じる功德がある。忿怒相で人身馬頭と頭上に馬頭を置く像とがある。三面八臂、四面八臂など種々ある。俗に馬の病氣と安全とを祈る。路傍に文字を石に刻み、信仰するものが多い。

境内に大椎がある。

愛宕神社 所在地 田中荒生二二四五番地の一。

(あた)様 (荒生納屋)

祭神、手力雄之命。たぢからのおのみこと 例祭日、二月二四日。境

内、一三三九・八平方メートル。

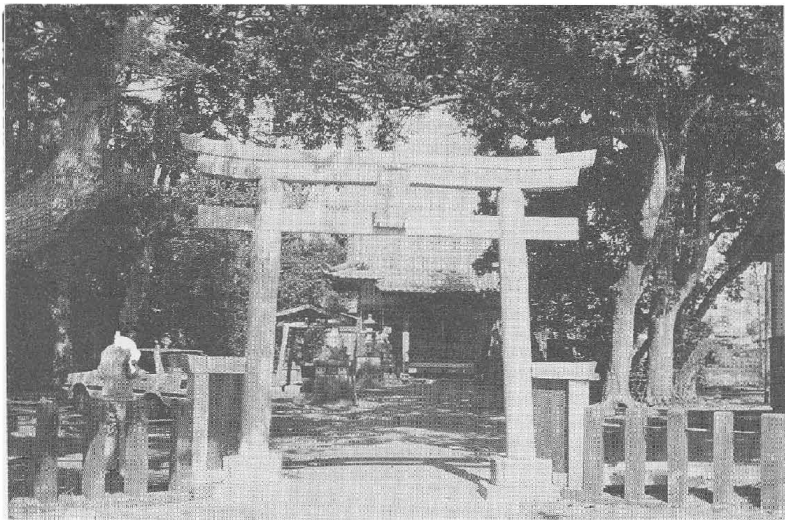
社殿、拜殿八坪。幣殿二・二二坪。本殿四坪(瓦

葺権現造) 建造物、鳥居(石造明神扁額愛宕神社陸軍大将男

爵荒木貞夫敬書昭和十一年十二月二十四日竣工) 燈籠一对

(昭和五十二年三月鈴木幸喜、田口鏡光、望月八郎) 御手洗

第一章 郷土の神社



写89 愛宕神社(荒生納屋) 木島擬影

(二七八) 辛  
安永十一年新生納屋岸本市三良 御手洗(洗心昭和五十一年十一月祇屋音藤昇) 燈籠(昭和五十一年十二月) 狛犬一对  
(昭和五十二年七月鈴木源左衛門) 愛宕神社造営遷座縁起、  
神輿庫六坪。倉庫三・五坪。

合祀社、子安神社、疱瘡神(少名彦名之命)

創建年代は不詳であるが、現存の記録に次のようなものがある。「寛保四<sup>(二七四)甲</sup>子歳二月吉祥日山神守護處勸請之主東頭山妙覚寺住、奉納主、上総國山辺郡田中新生村名主粗頭惣百姓一同」

また、境内に建つ「縁起文」を掲げると、

「愛宕神社はその創建年月は不詳なれど現存する寛保年間  
の記録より推察すると今より二百四十年前に創立の業がな  
され以采氏神として崇敬を集め例祭を旧正月二十四日とし  
て年を刻み今日に至りました、当社は境内に楠椎の巨木が  
群生しその中に昔ながらの三社が竝ぶまきのまの姿で鎮座  
して居り長い歴史はその神殿の古さと周囲の巨木に伝へ参  
拝する毎に人その年代に起きたいろ／＼な事柄を思い氏神  
の加護に感謝し深い折りを捧げるものであります時が流れ  
歴史が積重ねられて行くにつれ社屋の老朽も一層進み将来





写90 子安神社(八川) 木島撮影

の維持も困難な状態に至りつゝ、あり憂慮にたえずこゝに氏子一同志を合せ愛宕納税組合を結成し納税還付金を新神社建設資金として蓄積し亦境内地隣接の山林も関係者の協力により新たに境内地として拡張整備が行われ逐次新神社建設の機運が動き昭和五十一年一月十七日区民全体会議により神社造営の議が決定され建設資金は愛宕納税組合基金と区民による区費十々年分の奉納拠出金及び篤志者寄付金を充当し新神社建設の事業は建設委員を設けて工事を完成し神靈を新宮に遷し境内を浄め神木の成長を計り氏神としての崇敬を集め悠久の長きに愛宕神社の尊厳を維持するものである

と経緯が記されている。

水神社

所在地 小関二八〇番地。(大榎)  
祭神 水波能売大神。

社殿、本殿八坪。 摂社 子安神社 ○・三坪、子安地蔵尊を祀る。

社殿は現在部落公民館として共用している。

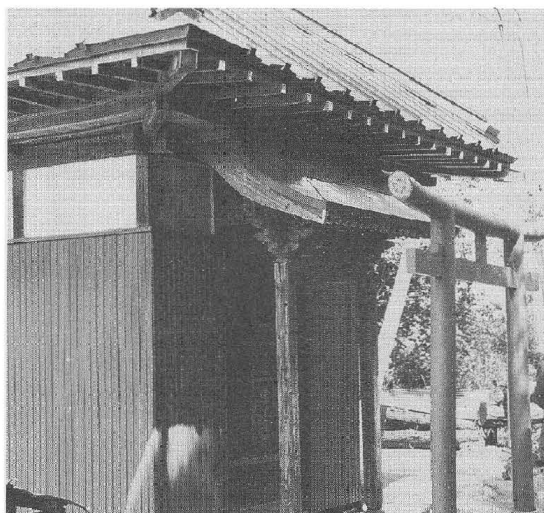
子安神社  
所在地 小関一三四三番地。(八川)  
社殿、本殿三・五坪。 境内、六六

六・六平方メートル。金鳥居。

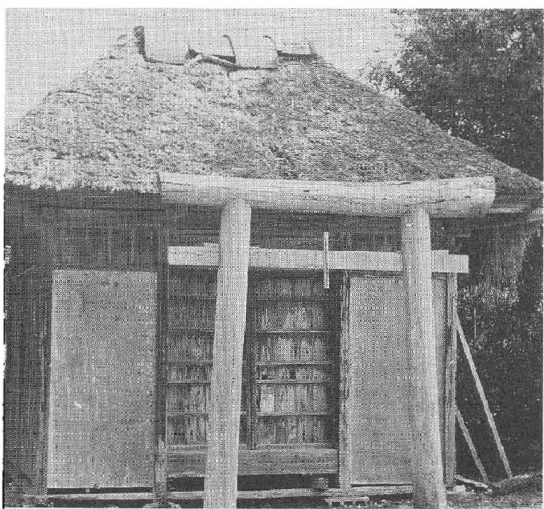
摂社、水神社○・五坪。内陣に鬼子母神?を祀る。

道祖神  
所在地 小関九二〇番地。(八川)

祭神 青面(金剛)  
建造物、鳥居(黄金色、昭和五十九年十月吉日)<sup>(二九八四)</sup>社殿、



写91 道祖神(八川) 木島撮影



写92 子安神社(八川) 木島撮影

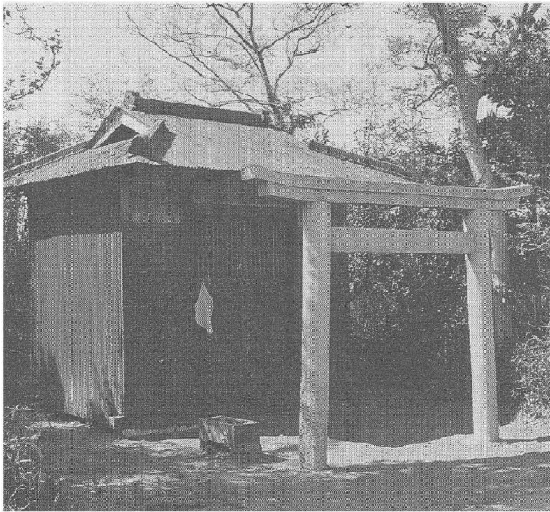
拝殿二、二七五坪(〇・五坪の向拝付く。上部に凝った彫刻あり、扁額に「道祖神」とある。)本殿〇・二五坪。  
縁起は詳らかではないが、旧貝殻道の路傍にあるところから塞さいの神としてまつられたものであろう。

### 子安神社

所在地 小関一三八七番地。(八川)

祭神、木花咲耶姫。建造物、鳥居(木造) 社殿、齋庭三坪。

縁起については不詳であるが、「文政七(一八二四)甲申年十二月吉日 願主八川女中一結」という記録が残されている。



写93 子安神社(小関納屋) 木島撮影

子安神社

所在地、小関大縄場。(小関納屋)

祭神、木花咲耶姫。

社殿、二・二五坪(トクシ葺) 鳥居(石造・佑昭和四十四年三月(一九六九)小関女人中)

御手洗(奉獻昭和二十八年九月吉日(一九五三)小関本区女人中)

境内、九九平方メートル。

例祭日、一月一五日。 摂社、疱瘡神。

縁起は詳らかでないが、諏訪神社の創建と同時代と  
思われる。

諏訪神社

所在地 小関二〇三五番地の一。(小

関納屋)

祭神 建御名方神。

例祭日、九月九日(一〇月第二日曜日)。

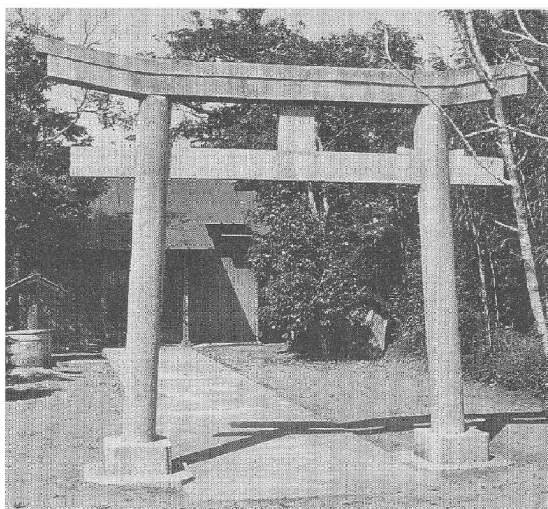
境内、一四一・九平方メートル。(妙覚寺持)社殿、

拜殿、六坪。本殿、二坪。 鳥居(石造佑昭和四十七年(一九七三)

十月吉日氏子中) 御手洗

古伝によると、創建は文久四年大村屋騒動のころと

推察される。もと妙覚寺寺山に鎮座していたが、明治



写94 諏訪神社(小関納屋) 木島撮影

三四年ごろ現在地に遷座して修築され、現在に至った。長野諏訪大社の分霊を勧請し、農耕神として祀った。神輿は成東浪切不動尊より譲りうけ、氏子区域を巡幸した。

琴平神社  
所在地 小関二一七四番地。(小関納屋)

祭神、崇徳上皇すむねじょうこう。例祭日、一月一〇日、一〇月一七日

社殿、本殿瓦葺入母屋造一四坪。

境内、五〇八・二平方メートル。

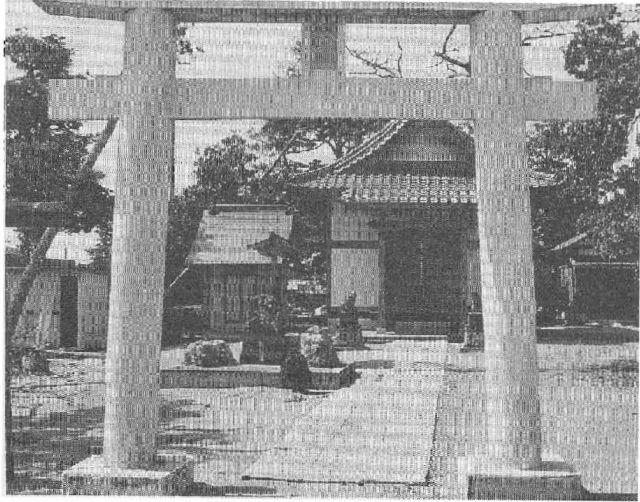
建造物、①鳥居(石造) ②鳥居(金属で外側をまく) ③

勝利口社宮(文政六庚) 二月吉日大村伊八郎喜惣(二八三三) ④抱瘡神

(二八三三) 文政五年 四月吉日大村伊八喜惣 ⑤御手洗(奉獻文政九戌年九月吉日) 当村大村伊八、小松原口口、小関村口口(作田村石田)  
(二八三〇) 文政三年 五月吉日大村屋伊八 ⑦開運口社宮(文政三庚) 五月吉日大村屋伊八 ⑧狛犬(奉納昭和八年九月一日建之) 関東大震災十周年記念片貝須原石政刻) 太鼓庫三坪

撰社 子女神社

所蔵の「金毘羅宮」の木札には、文政二年小関妙覚寺住職の起縁により、新開部落の世話役小松原五良左



写95 琴平神社(小閔納屋) 木島撮影

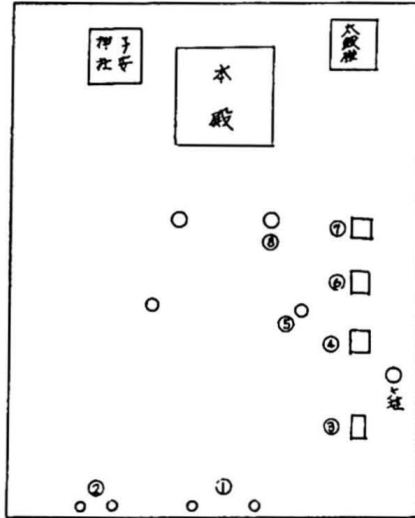


図16 琴平神社配置図 木島作図

納昭和七年旧二月三日古川光太郎石橋清太郎加藤吉造) 社務所 六坪。

稻荷神社

所在地 小閔二二九七番地。(小閔納屋)

祭神、宇迦之御魂神、社殿、五・五坪(瓦葺) 建造物、鳥居(木造) 御手洗二基(一基に奉

衛門の土地に鎮座し、地域住民三十五名により奉斎したことが分かる。  
現在は区民による維持がなされ、管理は、氏子総代を責任者とし、五分区に神輿世話人を配置し、管理維持している。

第一章 郷土の神社

祭神 八大龍王。  
居 (石造・神明型)

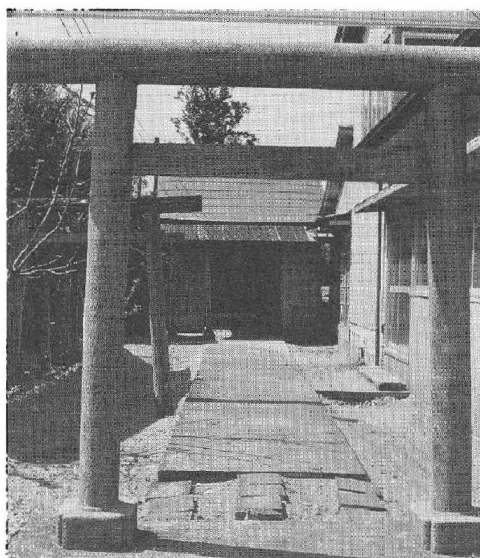
龍神社

所在地 小関二三五番地  
(小関納屋)

本殿、五坪。建造物、鳥

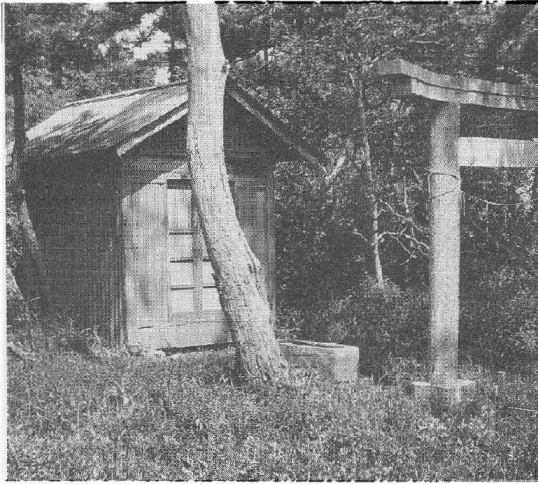


写96 稲荷神社(小関納屋) 木島撮影



写97 龍神社(小関納屋) 木島撮影

伝えるところによると、文政年間(一八一八―三〇)にはすでに祀られていて、遠く佐倉、習志野・東京方面からの参詣者があったと記録されている。昭和七年に本殿(一九七九)・同五四年鳥居、五六年には本殿を再建した。社務所は五七年新築し、殖産興業の守護神として崇敬されてきた。昭和六年には講中があった。



写98 子安神社(小関納屋) 木島撮影

摂社 子安神社、木造鳥居、社殿、○・五六坪。御手洗。例祭日、一〇月一七日。  
縁起は不詳であるが、海神としてあがめられてきた。現在は琴平神社に合祀され、部落青年館(消防庫)の南側に隣接し、鳥居、社殿があるのみである。

(一) 竜は、蛇形の鬼神で、天竜八部衆の一。八大竜王は、法華經序品に挙げられる八つの竜王で、わが国では水神信仰と習合して、湖沼の水神に八竜権現など八大竜王にあやかった神格を付している場合が多く、雨乞の神ともなっている。

子安神社  
所在地 小関二二一五番地。(小関納屋・北川岸)

社殿 ○・七坪。例祭日、正・五・九月の第三日曜日。  
建造物、鳥居(コンクリート造・昭和五十二年七月二十七日、<sup>(一九七)</sup>北川岸)御手洗、境内に「敬神堂」と称する建物があり、一月には女ビシヤ、二月には春祈禱。犬の供養、ばばびしゃが行なわれる。

以上、旧片貝地区の神社について述べたが、中には宗教学法人法による届出神社もあれば、氏子住民が部落共同で祭祀を続けている単立神社もある。記述に当たっては

実態訪問調査と、章末に列記する氏子総代や古老の皆さんからお話を承わったことを付記して筆をおく。

(古川 史良)

(話者) 山口俊彦・石橋豊・子安庄兵衛・中村和郎・小川皓・高橋藤一・杉山瞭・田村敏・鈴木繁直・宮本義一・大塚義典

参考文献

- |              |             |      |
|--------------|-------------|------|
| 山武郡教育会編      | 山武郡郷土史      | 大正五  |
| 宮本市太郎筆記      | 神社明細帳       | 昭和二九 |
| 山武郡町村会編      | 山武地方誌       | 昭和三〇 |
| 中村城鈴木実編      | 九十九里町誌      | 昭和三二 |
| 九十九里町誌編集委員会編 | 九十九里町誌各論編上巻 | 昭和五五 |
| 斎藤家文書        | 契講連名帳       | 嘉永二年 |

### 第三節 作田地区の神社

面足神社 所在地 九十九里町作田本須賀番外一番地。  
祭神 面足尊・惶根尊。

例祭日 九月一九日。境内、三三三九・六平方メートル。社殿、拜殿、瓦葺一〇坪。幣殿二坪。本殿銅

板葺四坪。

建造物 ①鳥居 (石造台輪「大六天神」の扁額尙「天下大平国土安穩万民快樂村内安全祈者也」昭和<sup>(一九六三)</sup>三十八年十二月十一





写99 面足神社(作田) 作田撮影

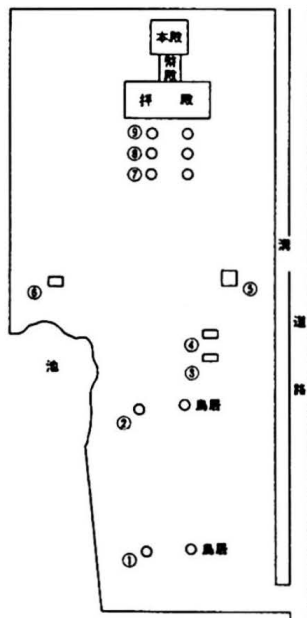
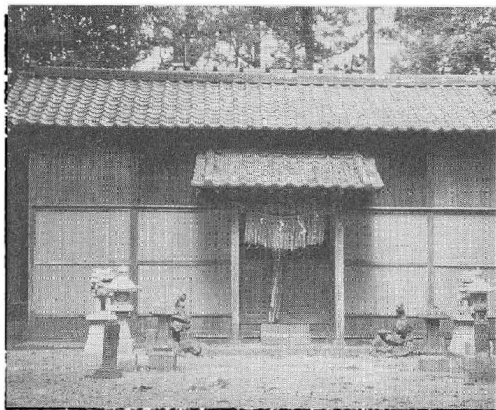


図17 面足神社配置図

日尙福井県吉田郡永平寺町□花谷日蓮宗大法山淨妙寺住職作田好忍)、②  
 鳥居(石造・明神扁額「面足神社」尙上総国本須賀村惣氏子・神主今宮  
 和泉守藤原□濟大坂京町堀六丁目尙上総国佐久田村惣氏子・宝永七<sup>(二七〇)</sup>庚  
 霜月吉日)、③御手洗(納御寶前宝曆<sup>(二七六)</sup>庚(二〇)十一月佐久田右馬之  
 助)、④御手洗(昭和二年二月十五日作田秋太郎)、⑤塞大神(作田宗一家の管理邪靈の侵入を防ぐ神「道祖神」、⑥水神  
 社(安政四巳年四月作田□□)、⑦燈籠(大正十一年九月作田区□□椎名重太郎)、⑧燈籠(寛政九<sup>(二七九)</sup>丁巳歲三月吉日武射郡本  
 須賀村橋本四良左衛門)、⑨狛犬(献納者磨滅)なお②の鳥居は千葉県東方沖地震により損壊したため、現在の鳥  
 居は、昭和六十三年十月吉日、八千代市大和田新田四六〇関谷藤之再建とある。また、新しい狛犬と灯籠が  
 平成元年五月、石田正宗によって献納されている。

本社の縁起は詳らかではないが、作田本郷の神明殿に保管されている「宗源 宣旨」(写取)によれば、「正



写100 拝 殿 作田撮影



写101 本 殿 作田撮影

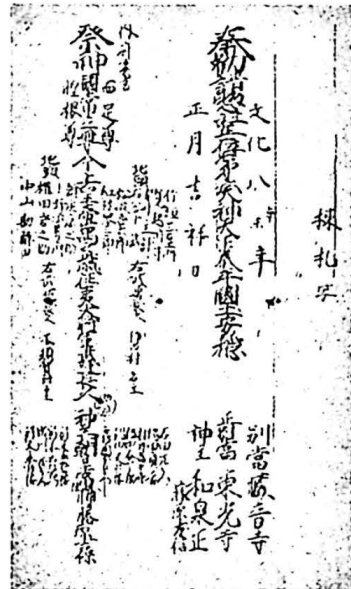
ト部朝臣兼敬」とあるので、宝永五年(一七〇八)以前から作田・本須賀両村の鎮守として崇敬されていたことがわかる。

次に、作田宗一家文書に「上総国武射郡佐久田本須賀(賀)両村の産神惣社第六天之祠官今宮和泉守藤原信重、先例の神事に任せ参勤時に風折鳥帽子かざり着すべきこと神道裁許の状件の如し享保十八(一七三三)年七月朔日 神祇管領上從三位侍從ト部朝臣兼道」とある。同じく作田宗一家文書の「棟札写」(写100)によると、文化八年には改築普請が行なわれたことがわかる。

この写しで判明したことは、内府裏書に、「第六天神」の祭神を国常立尊・面足尊・惶根尊の三神としてい



写102 宗源宣旨 神明殿蔵



写103 標札

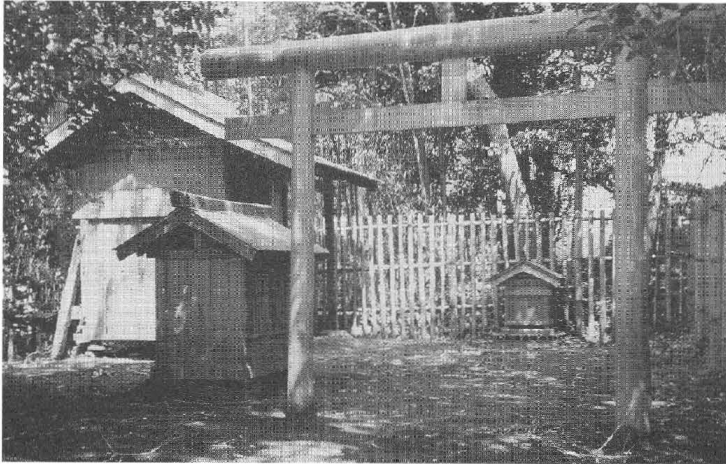
名、と名主名をあげているが、名主の子孫については不明である。

かつては、九月一九日の例祭日に中谷部落の獅子舞が奉納された。この日中谷部落には舞台が設けられ、獅子舞を始めとする演芸大会が催され、静かな農村に笛、太鼓の響きが木霊したものである。

九月一八日には、オタチ入レの行事があり、水ごりして、禪一丁の二人の若者が御神刀をかついで各戸を回って歩いた。特に若者が仲間入りをした時、戦時中は出征する時、この役につき、御神刀が各戸をくま

る。本来、第六天は仏教の他化自在天と称したが、江戸時代すでに面足尊が比定されているのをみると、町内の第六天の多くが、明治以後の神仏分離令による社名改称の際、面足神社と称したわけがうなずける。なお同写しに、両村の地頭

回って歩いた。特に若者が仲間入りをした時、戦時中は出征する時、この役につき、御神刀が各戸をくま



写104 神明殿(本郷) 作田撮影

くまわることゝ悪魔が払われた。

管理者

作田、本須賀地区。総代、作田宗一

神明殿

所在地 作田三〇七番地の一。(本郷)

祭神 面足尊、惶根尊。境内、二一六・

五二平方メートル。建造物、本殿一坪。鳥居(木造)。摂社  
瘡瘡神。子安様の小祠。

縁起は神官の今宮和泉守が自宅の西側に神明殿を建立し  
て、面足神社の前殿として、本殿の礼拝にかえたとのこと  
である。

管理者 本郷部落

稲荷神社

所在地 作田四八六三番地。(北川岸)

祭神 宇迦御魂。例祭日、昔から一日、

一五日には参拝者が多く、現在では北川岸部落の老婦人た  
ちが社殿神域を清掃している。建造物、鳥居(石造・明

神、昭和<sup>(二九五七)</sup>三十二年旧九月建之、作田高橋 東京官島茂治)御手洗

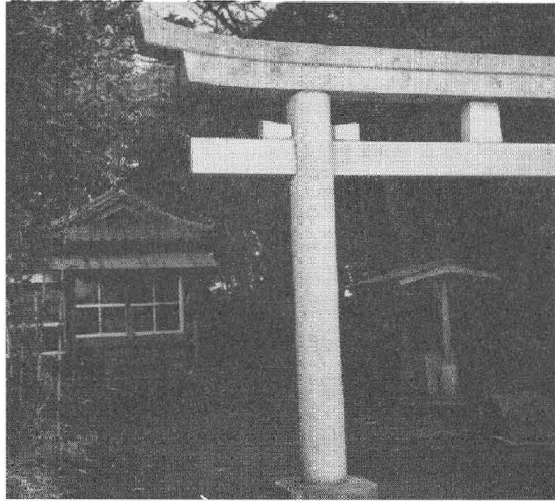
(昭和<sup>(二九六八)</sup>六十三年二月吉日)社殿拝殿(含集会所)七・五坪。鳥居

(新本殿の)石造明神 新本殿〇・二五坪。なお古くは県道

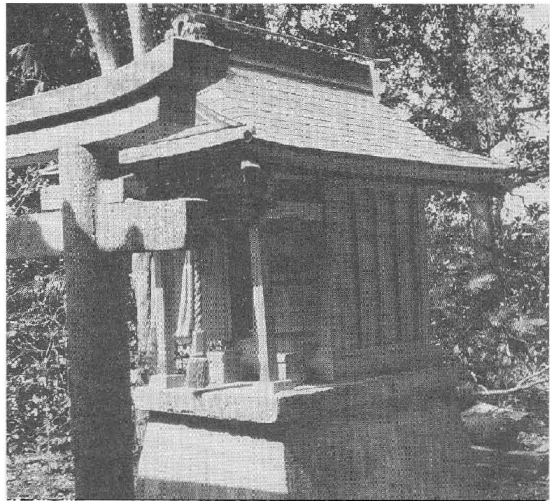
沿いに木造の一の鳥居があった。

御神体は京都の伏見から勧請したと伝えられる。伏見稲荷は、帰化人の秦氏はたが商工業の方面で活躍したの  
で、後世の稲荷が諸産業の守護神としてあがめられたと思われる。一般に稲荷の祭日が二月の初午とされて  
いるのは伏見大社の影響をうけたものである。

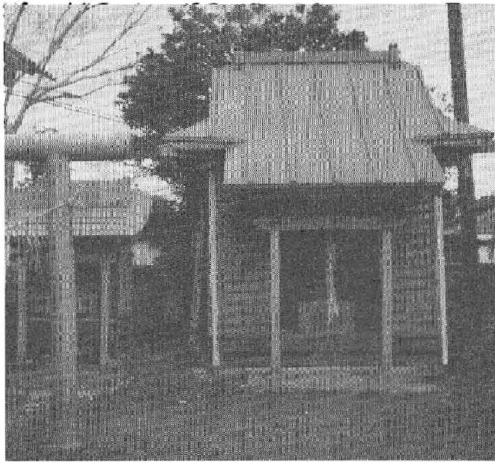
イナリは、イネナリすなわち稲の実りを意味する言葉で農耕神である。稲荷と狐きつねとが結びついて、同上の  
ものとみられるのは、狐が山の神ないし田の神の使い、またはそれらの神そのものと信ぜられたためであろ



写105 稲荷神社(北川岸) 木島撮影



写106 新本殿 作田撮影



写107 月読神社(山中) 作田擬影

う。狐の鳴き声やその供物の食べ跡から、漁の吉凶を占った漁民によって、稻荷は漁業神としてもあがめられた。

この稻荷の境内部分はその昔、船のゆききできる深いところ、つまり濡ぬのよせる所で、鳥居が海岸に近い県道ぞいにあつたことでも漁業神であつたと考えられる。片貝の松井源七はこの稻荷に深い信仰をよせていたとのことである。

明治の始めのころ祭日は十数軒の露店商がたちならび、多くの信者を集めていた。

疫病が流行したころには、疫病治癒への信仰をあつめて

いたとのことである。昭和三十三年(一九五七)ごろ火災により全焼し、

再建した。 管理者 北川岸部落

所在地 作田五〇二〇番地の一。

月読神社(三夜様)

(山中)

祭神 月夜見之命。 例祭日、毎月二三日。

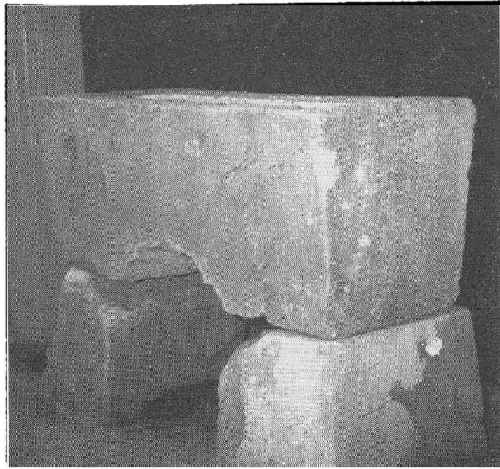
境内、五〇四・九平方メートル。建造物、①鳥居②本殿、

二・五坪。③大神様。④子安大明神。⑤鳥居。⑥御手洗

(奉納) (二八六五) 元治二年三月吉日 繩船水主中 又五郎・松五郎・市五郎・

長三郎・政吉・吉五郎・佐太郎・市五郎・岩藏・辰五郎・□□・□

□・米吉・岩藏・亀次郎・丙藏・庄藏・世話人・七藏・捨次郎) ⑦



写109 御手洗 作田擬影

修したが、その時屋根裏から紀州の人が寄贈した石像と大漁祈願の木の札がでてきた。したがって、この土地の漁師たちも、紀州の人たちと交流があったことがわかる。明治から大正にかけては、北の下の三夜様よりも賑わったということである。

十数年前までは年寄りが集まって「ナムアミダブツ」を唱えていたが、現在は部落の青年たちが「三和会」という組織をつくり部落の自治について話し合う場となっている。また年一回青年会主催でお盆の十三日か十五日にカラオケ大会を開いている。当日は青年会の積立金と寄付を合わせて、酒、ソバ、餅についてのふ

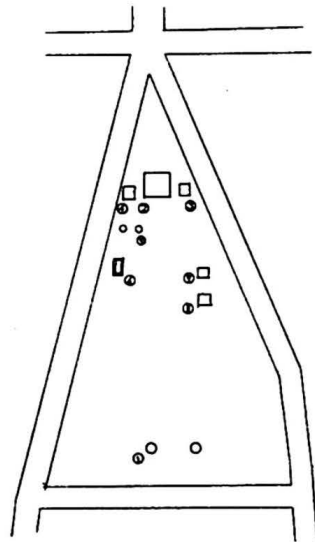
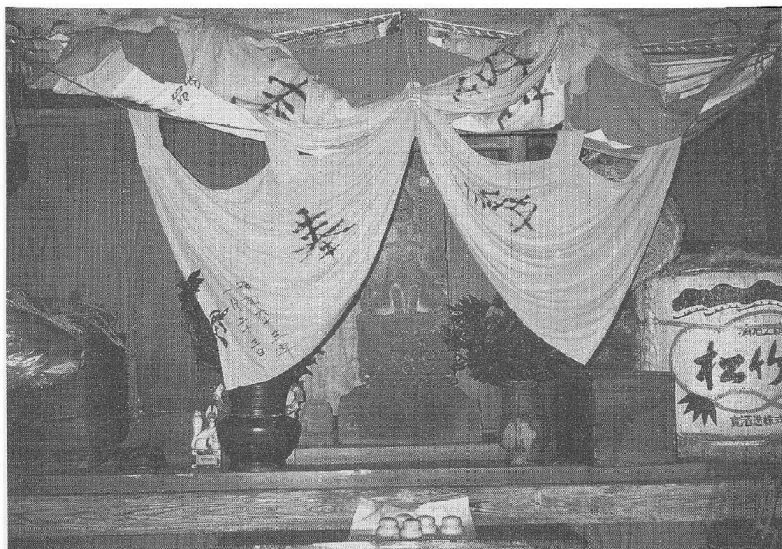


図18 月読神社配置図

疱瘡神。

古老の話によると、昔、天王様の神輿があったが、大きすぎて担げなくて地中に埋めてしまったとのことである。

昭和二〇年代までは草屋根であったのをトタン屋根に改



写108 本殿内陣 木島撮影

るまいをしている。このときには作田納屋の老若男女が大挙して集まり、三夜様に参詣している。管理者 山中部落。

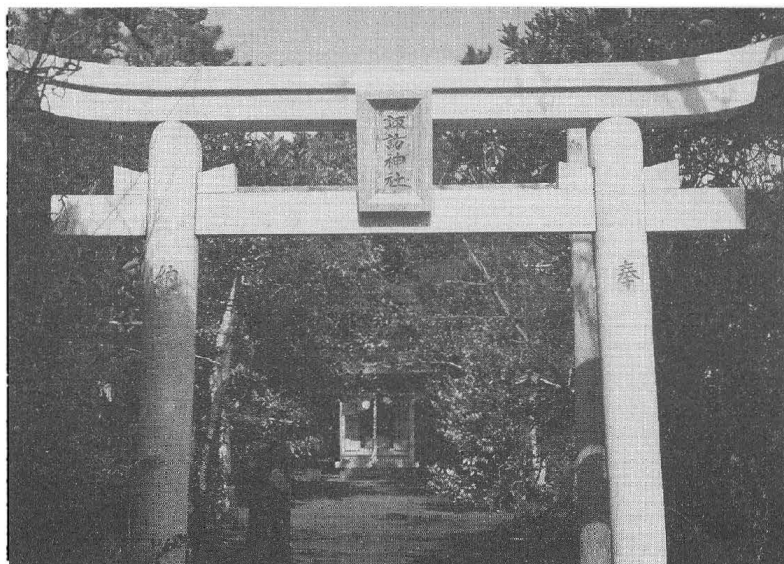
諏訪神社  
所在地 作田四一九五番地の三。  
(南川岸)

祭神 建御名方命。境内、二九七平方メートル。建造物、鳥居(石造・明神 昭和六十二年一月吉日建之 南川岸氏子一同)本殿、銅板葺〇・八坪。御手洗(昭和六十三年一月吉日、御園栄治)

縁起由緒 「古事記」によれば、大国主神の国譲りに際して、その御子建御名方の神が、建御雷神との力競べに敗れ、諏訪湖までおちのびて、その地にとどまったという。諏訪明神の本地として語り継がれた物語りでは、この神の前身が甲賀三郎という勇士で、地底の国から蛇体で帰ったという。

諏訪の神は、古くは狩猟の神としてあがめられ、さらに農業神としても信仰されたが、後代は武神と





写110 諏訪神社(南川岸) 木島撮影

しても崇敬されている。

ここ南川岸の諏訪様は、村井淳家の漁業の守護神であったといわれ、また一方関谷竜司家の氏神であったとも伝えられている。

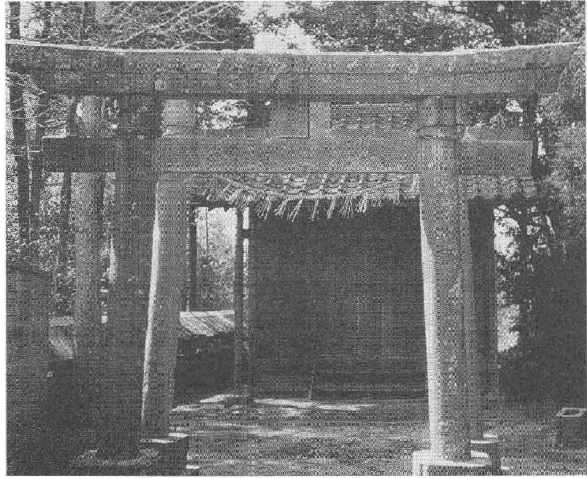
諏訪様から出た狐に化かされた話がある。麦の穂がそろい始めようとする頃、納屋から魚を買って帰途についた。あたりはすでに暗くなり、重い魚を手にさげた男は、自宅へと急ぐのだが、道は遠くなり、一晩中歩き続け、夜が明けてしまった。持っていた魚は一匹も残っていなかった。また諏訪様近くの土地を求めた人には好い事がなかった。ということである。 管理者 南川岸部落

八坂神社(天王様)

所在地 作田三〇四八番地  
(下谷)

祭神 須佐之男命。 境内、三二六・七平方メートル。 建造物、社殿、拜殿・本殿九坪。鳥居二基(ともに石造明神手前のものは昭和九年旧二月六日、作田も

第一章 郷土の神社



写111 八坂神社(下谷) 作田撮影

た時、東金市松之郷の天王様の御神霊をいただき、この地に建立された。

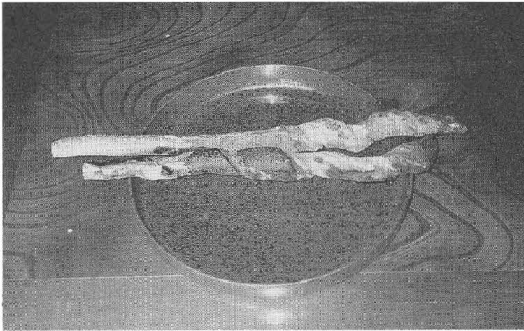
二月六日には篝火をたいて、部落の役職や当番を決め、次の宿におくる。その時、二個の提燈と、頭送りといって「木のネジレ

と建之奥は下谷部落建立 御手洗

天王様というのは、疫神を統一する神威あらたかな神で、通例、牛頭天王のこととされている。古くから疫病の流行は御霊のたたりとみなされ、それを鎮める牛頭天王に対する信仰は、平安時代中ごろ以後一層顕著になった。

下谷の天王様について、土地の古老は次のように語っている。

明治以前、疫病が流行し



写112 作田下谷天王様の頭送りのネジレ棒  
(男性の象徴) 作田撮影

棒」二本（写112）——この棒は男性の象徴——を次の宿におくるのだが、ネジレ棒の二本は新婚の男性に持たせる。

また、カマドのすみをとがして、墨つけをする行事がある。墨をつけようとして追いかける者、逃げまわる者、しまいには通りがかりの人でもかまわず墨つけをする。

二月七日には、一年間の部落の行事をきめる。（作田信談）

男の象徴ネジレ棒の一本には、明治二九年と刻まれており、人の手油のせいか光沢があった。一本のは以前のがいたみ、新しいものにとりかえたという。

管理 下谷部落

月読神社（三夜様）  
所在地、作田二七四一  
番地。（荒場）

祭神 月読命。境内、九九平方メートル。例祭日、昭和二〇年ごろまでは、三夜講を正月、五月、九月と、年三回行なっていたが、近年は正月だけとなった。建造物、鳥居（コンクリート造明神）幟立、小祠。

縁起由緒

三夜講は正月の二十三日、宿は順番で、午後



写113 月読神社（荒場） 作田撮影

三時ごろからおこない、会費制にしている。篝火をたくのは十二月三十一日、一月六日、一月二十三日、二月六日の年四回である。管理 荒場部落

八坂神社(天王様)  
所在地 作田三四一番地の四。

(新地)

祭神 須佐之男命。境内、六六・〇平方メートル。

建造物、本殿、三・四五坪。

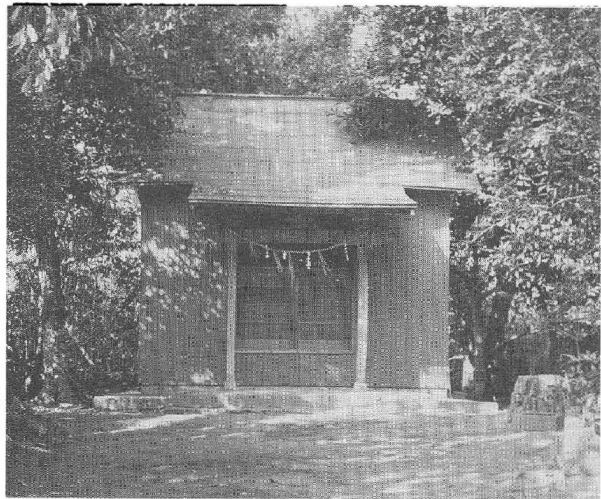
鳥居 コンクリート造 摂社 子女様。疱瘡神。道祖神。

例祭日、二月六日は篝火をたく。二月七日はオビシヤ。年六回篝火をたく。一月七日・二月七日・六月七日・九月一七日・十一月三十一日。

縁起 下谷の天王様と同様である。

特記すべきことは、関谷長兵衛家の氏神であったらしいということである。

管理者 新地部落



写114 八坂神社(新地) 作田撮影

(作田公男)

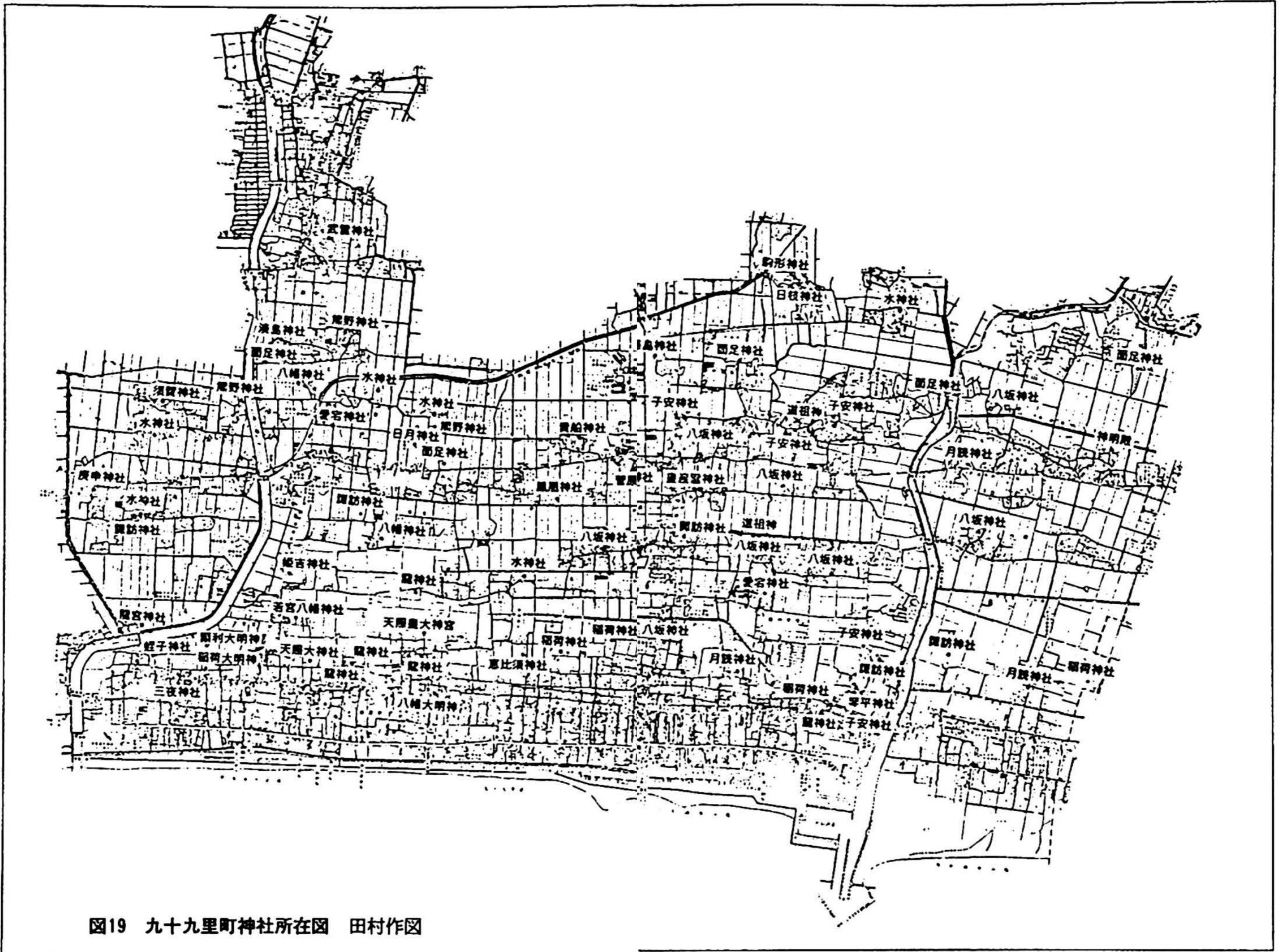


図19 九十九里町神社所在図 田村作図

## 第二章 郷土の寺院

### 第一節 顕本法華宗の寺

#### 顕本法華宗

日蓮宗の各派の中、日什にちしやう（一三二四～九二）を派祖とし、京都妙満寺を総本山とする日蓮宗の一派。ふるくは、日什門流、妙満寺派とも称する。日什滅後、門下は強義折伏じやうぎせつぷく的精神を継承した。その門流から出た心了院日泰（一四三三～一五〇六）が、上総七里法華を開拓した。

のち、常楽院日経（一五五一～一六二〇）は、浄土宗の源誉と宗論に及んだが、暴漢に襲われて敗北し翌年弟子五人と京都六条河原で耳そぎ鼻そぎの刑に処せられている。その後、什門の教学が確立され、上総に宮谷みやや檀林だんりんが創設され幕末に至った。

なお、この日什門流は、一八七六年（明治九）日蓮宗妙満寺派と称して勝劣派（陣門流・八品派・真門流・日蓮正宗など）に属し、一八九八年（明治三二）一月、改めて顕本法華宗と公称するに至った。

一九四一年（昭和一六）、顕本法華宗は身延山を本山とする日蓮宗・日興を派祖とする本門宗と合同して日蓮宗となり身延山久遠寺を総本山とした。しかし、第二次世界大戦を経て、一九四六年（昭和二二）宗制の変

革にあり、また教団離脱による単立の運が開かれるに伴って一九四八年（昭和二三）日蓮宗から分離し、再び妙満寺を総本山として顕本法華宗と称して現在に至る。

七里法華と片 七里法華については、すでに『九十九里町誌・各論編上巻』に詳説してあるのでここで貝地区の寺院 は略説したい。

日泰に帰依した酒井定隆が、自己の領内、中野・土気を中心に、北は成東、東は九十九里浜、西は生実に及ぶ約七里四方にまたがる領内に他宗の寺院建立を許さず、ことごとく法華宗をもってした宗教政策を、世に上総の七里法華という。

文明の始めごろ（一四七〇年代の始め）日泰は関東の伝道を志し、海路東進して船中で定隆を教化し上総浜野郷に開教、この地の廃寺を興して本行寺となづけた。これを拠点として教線を次第に東方にひろげた。一四八八年（長享二）に定隆は土気城に入った。ここにおいて浜野より日泰を招いて教線をはり、城中に一字を建立して日泰を請じた。この年五月一八日には奉行栗原助七郎・宮嶋伝七郎をもって領内の道俗寺院をして悉く法華宗に改むべきことを令したと伝える。

さて、この改宗令に片貝地区の寺々はどう対応したであろうか。口碑によれば、当時すでに真言宗に属した教行寺・本隆寺・妙覚寺の三寺は存在し、唯々諾々として改宗には応じなかったようである。

旧妙覚寺（真言時代の古名は不明）は、現在地ではなく高倉・三浦名・小関・田中荒生の四か村の入会地「経塚」の地に伽藍があったという。改宗令に抵抗したため旧堂・寺宝は焼かれた。経巻はひそかに土中に埋めたため経塚の名が残ったと伝えられている。

教行寺の場合も古記録がないので、しかとしたことは分からないが、やはり抵抗したと思われるふしがある。文政十一年子片貝村明細書上帳（小川家文書）によれば、「字経塚本廟老ヶ所 村持ニ御座候」という字名が残されているところから、この地も旧教行寺の寺域か旧堂の所在地で、改宗の際に经文・石塔などを埋没させたと思われる。

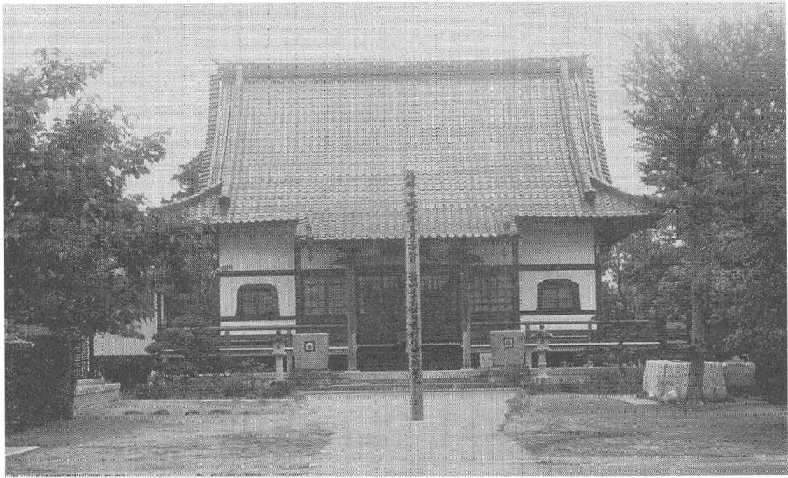
本隆寺もまた改宗に肯んじなかつたようである。古老の言によれば、「焼失前の本隆寺は、現在のデーミチ（ジ）の墓地にあつた」という。しかし本隆寺の焼失は、古記録によると文政四年二月一日なので、焼失前は現本隆寺の創建前の誤伝ではなからうか。前掲の「明細書上帳」の廟所の項に「字大明神廟所」という記録がある。この「大明神」は、大明寺の転訛（デーミシ）で、真言宗時代の旧本隆寺時代の古跡ではあるまいか。さらに写115の本隆寺開基日増上人の墓が、この墓地内に現存する。建立年月日は、上人の没後二



写115 日増上人の墓 木島擬影

六二年後の文政三年の四月である。いずれにせよ、一山の住職、とりわけ開基を共同墓地に葬ることはあるまい。してみれば、現本隆寺が建立されるまでは、旧寺がこの地に存在し、開基は寺域内に葬られたと見るのが妥





写116 東頭山妙覚寺(小関) 木島撮影

当ではあるまいか。

以下、片貝地区の三か寺について述べる。

#### 東頭山妙覚寺

所在 小関八四二番地。宗派、顕本法華宗。

開基、日伝上人。創建、永正元年（一五〇四）本尊、十界曼荼羅。寺域、八四二六平方メートル。

縁起、本寺の真言宗時代については前項で述べたとおりである。

定隆の改宗令から一六年後の一五〇四年（永正元）住民の熱望により現在地に再建された。再建の大檀那は領主酒井定隆自身で、家臣の小関兵部少輔・成川玄蕃の兩名を普請奉行に任命して工事を監督させた。当山の再建の開基を「日伝」と称するが、定隆の法号が「玄通院日伝」であるところから、定隆を開基に擬している。したがって現在も定隆の命日、四月二四日を開山忌とし、二四日には施餓鬼も執り行なっている。

旧諸堂は、創建以来元禄年間までに順次整備され、当

時輪奐ときりんかんの美を誇っていたという。かつては現在の堂宇の外に、経藏・鬼子母神堂・鼓樓・番神堂・門番所等があったが幕末までに破損し取り壊したという。(現住、河野日教師談)なお、山門の棟札には「奉折誦陀羅尼品卷万巻成就寺檀榮久処于時明和(一七六六)子年霜月吉日」の文字と、当時存在した六坊の名(常田坊・大行坊・正字坊・本廣坊・常仙坊・円住坊)が見られる。

また、本寺には江戸中期以後、文人墨客や学者の訪れるものが多く、中にはこの地を終の住処すまいかと定めた学者もあつた。いま、寺内の一隅に眠る西山翰海かんばん(一七四〇―一八一四、対馬出身の儒者)・乾坤八いんけんはち長沼祐達(一七七―一八二八、陸奥・三春出身の儒者)・目黒自琢(一七八一―一八三二、もと幕府の医官)らは、村の好学の子弟まがに儒学・医学を教え、学問文化の淵ふたとなつた。(詳細は「九十九里町誌資料集第十三輯金石文参照」)

次に掲げた図20は寺内の伽藍配置図である。山門を入れて正面奥が本堂(間口七間・奥行六間に一間の回廊がつく、昭和五八年(一九八三)建立)、左手奥から客殿(一八坪旧坊を改築)庫裏(六二坪・平成三年三月完成)、常泉坊(二二坪)、右手に鐘楼(旧梵鐘は元禄(一七〇二)五年鑄造、

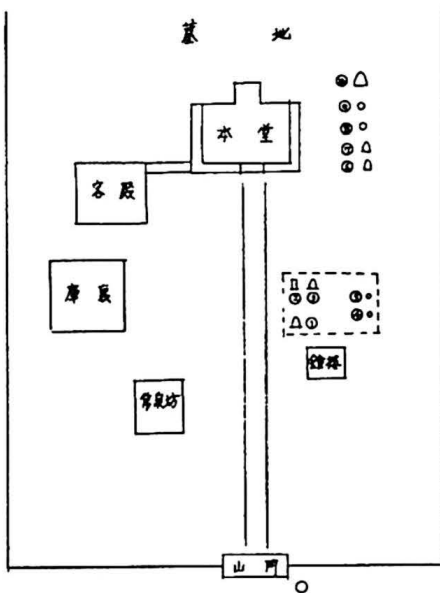


図20 東頭山妙覚寺伽藍配置図 田村作図

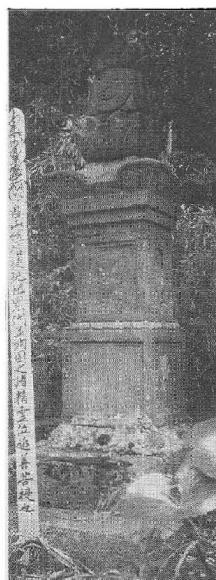
塚墓碑

次に当山の歴代住持名を挙げると、

初世日伝―二世日瑞―三世日照―四世日廣―五世日意―六世日穩―七世日念―八世日閑―九世日晴―一〇世日祐―一一世日琬―一二世日意―一三世日皓―一四世日勇―一五世日偵(寛延)―一六世日隆―一七世日保―一八世日修(安永)―一九世日軌―二〇世日賀―二一世日元―二二世日恂―二三世日證―二四世日便(文政)―二五世日峻―二六世日穩―二七世日綱―二八世日誘―二九世日進―三〇世日恵―三一世日台(明治)―三二世日浄―三三世日柱―三四



写117 鐘 楼 木島撮影



写118 寛文期の宝篋印塔

昭和一八年國に献納、現梵鐘は昭和二七年香取秀真作(一九五三) (写117) ①処士乾君墓表、②西山翰海先生墓碑 ③自琢先生墓表 ④小関五郎左衛門家墓碑 ⑤成川玄蕃家墓碑 ⑥子安春洋墓表 ⑦大塚洋顕彰碑 ⑧供養塔(文化二歳壬戌 二八〇五)十月十三日施主片貝村岸本次左衛門兄弟一結) ⑨宝篋印塔(寛文年間 二六六〇年代) (写118) ⑩藤代昌

世日襲一三五世日誠一三六世日教（現住）

と、「過去帳」に記されている。内、本山貫主を勤めた者六名という。

檀家数、四八〇軒。

成就山本隆寺

所在 片貝五二〇二番地（前里）

宗派 顕本法華宗。開基、日増上人。

本尊 十界曼荼羅。

寺域 一二四二五・九七平方メートル。

図21は伽藍、建造物の配置を示したものである。写119の山門を入ると正面に客殿（約三三坪）があり、その左手に本堂（回廊を含めて約一〇〇坪）写仏がある。その堂宇の広壮さは町内寺院中、一、二を争い、向拝や欄間には手の込んだ彫刻が施されている。

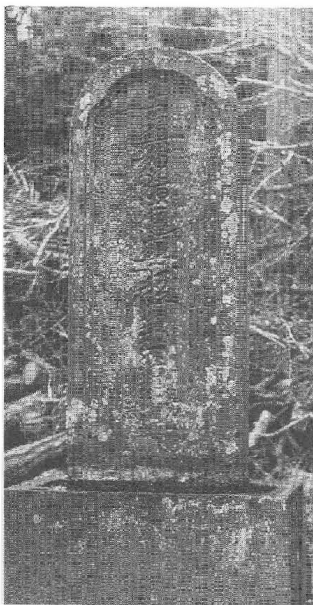
客殿の手前には庫裏（約三〇坪）がある。図21の①は、山門の前、道を距てて建つ供養塔（自我偈三万巻玄題一五千部施主十方諸檀中寛保三龍集癸亥季十月十五日造立焉）②歴代住持供養塔（昭和五十年造立）③供養塔（奉修行玄題一千部人数五百人契一結法界万靈願主当村惣目那敬白当山十六世日弘享保九甲辰十月十三日）（写12）④供養塔（奉口唱題名二千部奉真統経王一百部奉擬開基日什正師正当三百五十遠忌元文五庚申歳二月廿八日）⑤歴代住持供養塔（寛保元辛酉天十月十



写119 成就山本隆寺山門 木島撮影

第二章 郷土の寺院

七日造立) ⑥日台上人墓(三四世) ⑦古川南峰先生 ⑧復堂布治君追慕碑(明治十三年建) へ ⑦⑧については九十九里町誌資料集第十三輯に詳述、⑨松井貞先生顕彰碑、⑩中村一之先生顕彰碑、⑪⑫の旧坊は現存しない。



写121 供養塔 木島撮影

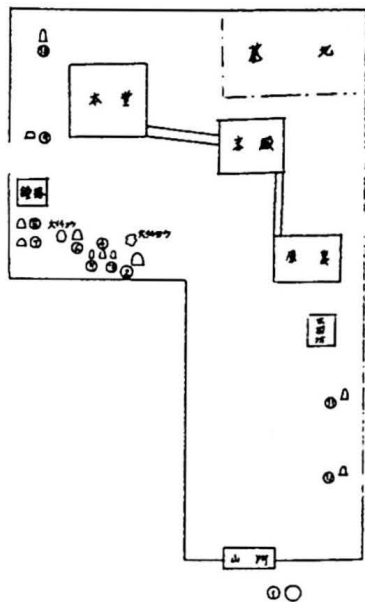
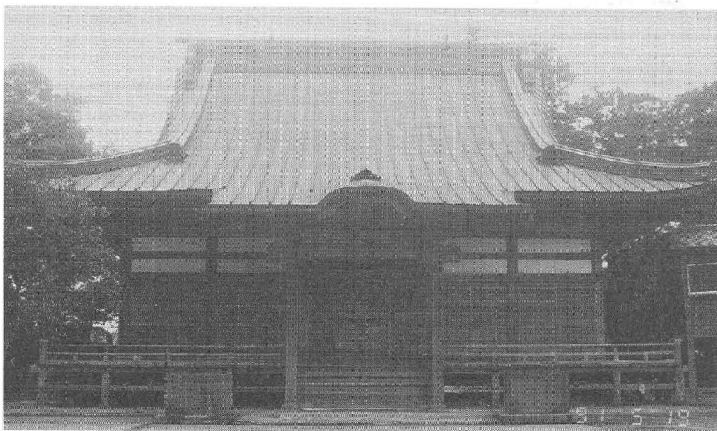


図21 成就山本隆寺伽藍配置図  
田村作図



写120 本隆寺本堂 木島撮影



写122 旧実成坊 古川力撮影

していたことがわかる。  
また、

写122は解体取壊し直前の実成坊。

鐘楼の旧梵鐘は昭和一八年献納、現梵鐘は昭和二九年再建、  
設計指導は理学博士青木一郎による。

当山の創建は、古記録によれば一五二八年(享祿元)と伝えられてはいるが、前項で述べた創建当初から現在地にあつたかどうか判然としない。

「文祿三甲午(一五九四)『上総国片貝村田畑御縄辻』(小川家文書)

御寺(本隆寺) 田 中田 五筆 二反二畝拾歩

下田 六筆 壹反八畝

合 十一筆 四反拾歩

畑 中畑 四筆 七畝拾歩

下畑 四筆 壹反二畝七歩

合 八筆 壹反九畝拾七歩

田畑合 十九筆 五反九畝貳拾七歩

右の文書によれば、太閤検地のころすでに表記の田畑を有

「本隆寺本堂諸尊建立之覚

千時元禄第九曆丙子（二六九六）十一月朔日

御両尊施主本隆寺諸檀方老若男女一統

当山十二世開眼法師

観持院 日脱

「小川家文書」

によれば、釈迦・多宝如来の両尊像が造立されている。

「 覚

一、当寺開基日増と申し候

享禄元戊子年（一五二八）草創（享保十四年迄二百貳年）

一、境内 年貢地

一、寺中十坊□前老軒

一、寺付田地高十五

一、檀家貳百八拾軒 外ニ町家無之

右之通り相違御座無く候

享保十四酉年二月

本 隆 寺

右は小川家文書「本隆寺田畑給々高反別覚帳 明治元年辰十月日」であるが、享保十四年（二七二九）当時の記録が転記されたものである。当時一〇坊あり、檀家二八〇軒とある。

「 覚

本 隆 寺

一、舊記の儀は四拾九ヶ年以前文政四巳年（一八二二）二月十一日類火焼失仕り候

明治二巳年迄

同文書中には、右の記録がある。本隆寺が火災に遭ったという話は古老の談に耳にしたが、それが文政四年であつたことがわかる。類火焼失とあるが、坊から出火ともいう。再建には現在と違つて長年月を要したであらう。

一 書 上 覚

上総国山辺郡東金町

本寺本漸寺末

同国同郡片貝村

御四給入会

本 隆 寺 印

一 高拾六石式斗六合

内御領分

高三石五斗

残而御三給様

高拾貳石七斗六合

一 高六石七斗九升

外二三反歩新田

内一石式斗式升持添

残而御領分

高四石七斗九升

右は今般村々寺院住職有無并びに持添高隋人など御調べニ付き書面之通り書き上げ奉る以上

御領分

片貝村

組 頭 徳 太 郎 印

焼失ニ付

普請中村賄

本隆寺末

教 行 寺 印



天保十四卯年九月

多古 御役所

同 庄兵衛 印  
名主 藤左衛門 印

「小川家文書」

右の文書は、天保一四年（一八四三）のもので、文政四年（一八二二）から二二年後であるが、まだ「焼失ニ付普請中村賄」とあるのをみると、まだ伽藍すべての再建は完了していなかったと考えられる。

一 高人別取調書上帳扣

上総国山邊郡片貝村 本隆寺

末寺 教行寺

上総国山邊郡東金町本漸寺末

柴山藩支配所

同国同郡片貝村

成就山本隆寺住

以 精 院

午五拾麥才

一、境内二千六百四十六坪

御年貢地

一、本田持添高拾六石九斗壹升六合

此納米式拾伍式斗五升四夕式才

入口米九拾八俵壹斗四升

内米式拾伍式斗五升四夕式才引

徳米七拾七俵式斗八升九合五夕八才

内米五俵也

米三斗式升

米三斗三升

門前百姓三百給米

門番給米

掛番人給

米拾俵

ノ米拾六俵式斗五升

引残 米六拾俵三升九合五夕八才

一、禮家 七百六拾八軒

一、塔中 八 軒 内無住 常照坊 玄成坊 本因坊

一、上総国天羽郡佐貫産同村安楽寺弟子

文政四巳年得度 文久元酉年より本隆寺住職

一、東京三味線堀産前片貝村本隆寺弟子

文久三辰年得度

諸堂普請 修覆手当

当時 五軒

塔中 圓壽坊

宜 叶

午六拾俵才

一、高老石三升五合

納米老俵斗老合六夕四才

入口米四俵式斗

徳米三俵九升八合三夕六才

一、撰州大坂産藝州加茂郡原飯田村妙福寺弟子

天保十亥年得度

一、下総国印旛郡佐倉産佐倉経胤寺弟子

天保八酉年得度

一、下総国千葉郡登戸村産上総国山邊郡

片貝村前教行寺弟子弘化四未年得度

同 久城坊

秀 遂

午參拾九才

同 實城坊

存 明

午參拾九才

同 玄因坊

勇 善

第二章 郷土の寺院

一、上総国長柄郡腰当村産同村光福寺弟子  
嘉永六丑年得度

一、上総国山邊郡宮谷村百姓仙太郎伴  
明治元辰年七月召抱

一、常州新治郡田中村百姓安兵衛事改  
万延元申年召抱

娘	嫁	伴	女房	同寺百姓老軒	姫	同人女房	門番	僕	同
つ	な	吉	も	三	ち	や	治郎兵衛	幸	真如坊
休	る	藏	よ	吉	よ	え	午拾參才	吉	宏
	午參拾四才	午參拾八才	午七拾貳才	午拾六才	午四拾七才	午五拾六才		午貳拾壹才	午貳拾九才

(境内持高は後出)

- 一、越前国足羽郡南居村産同村妙正寺弟子  
天保十二丑年得度 文久二亥年十二月より教行寺住職
- 一、上総国山邊郡上谷村産

人別合拾八人之内 僧 七人 俗 六人 女 五人  
右御調ニ付奉書上候処相違無御座候以上

明治三年六月

本 漸 寺

御 役 僧 中

二男 勝 藏 午拾七才  
午十才

同村同寺末

同村

經王山教行寺住

俊 義

午參拾九才

下男 善右衛門

午六拾才

右

片貝村

本 隆 寺 印

末 寺

教 行 寺

(小川家文書)

右は、柴山藩役所に提出したものの扣であるが、当時の当山の実情をよく伝えている。

歴代住持名は、境内の供養塔によると次の通りである。

開基日増—二世日意—三世日田—四世日達—五世日淳—六世日玄—七世日典—八世日来—九世日光—一〇世日旋—(元棟) 一一世日光—(元棟) 一二世日脱—(元棟) 一三世日観—(元棟) 一四世日暹—(元棟) 一五世日亮—(元棟) 一六世日審—(元棟) 一七世日怒—一八世日意—(明和) 一九世日立—(明和) 二〇世日演—(明和) 二一世日如—(明和) 二二世日休—(明和) 二三世日怡—(明和) 二四世日恕—(明和) 二五世日修—(明和) 二六世日果—(明和) 二七世日定—(明和) 二八世日得—(明和) 二九世日弘—(明和) 三〇世日相—(寛文) 三一世日慧—(寛文) 三二世日顕—(寛文) 三三世日完—(寛文) 三四世日合—(寛文) 三五世日豊—(寛文) 三六世日暢—(寛文) 三七世日果—(寛文) 三八世日顕—(寛文) 三九世日連—(寛文) 四〇世日顕秀  
(現住)

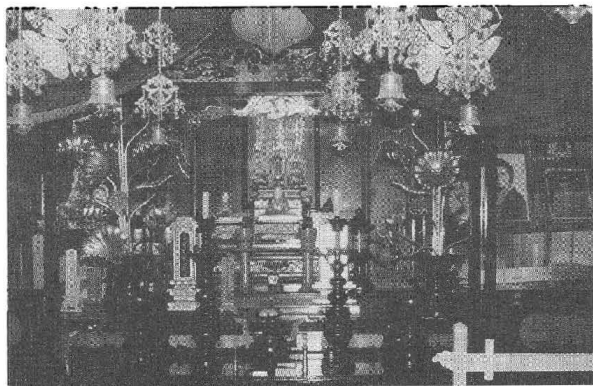
檀家数、七九〇軒。

経王山教行寺

所在 片貝二六八番地。(中里)、宗派 顕  
本法華宗。開基、日増上人。 創建、享禄元  
年(一五〇四) 本尊、十界曼荼羅。 寺域、二九二〇・五平方メ  
ートル。

門を入って正面に、写仏の本堂(二八坪)がある。庫裏(三七坪)は、本堂の右手に連なって建っている。

図22の①の供養塔には、(棹石正面に南無妙法蓮華経法界萬靈、偈、一天四海皆備妙法、偈、奉誦自我偈一千部、偈奉口誦玄隨一千部、(裏)、文政



写123 経王山教行寺本堂内陣 田村撮影

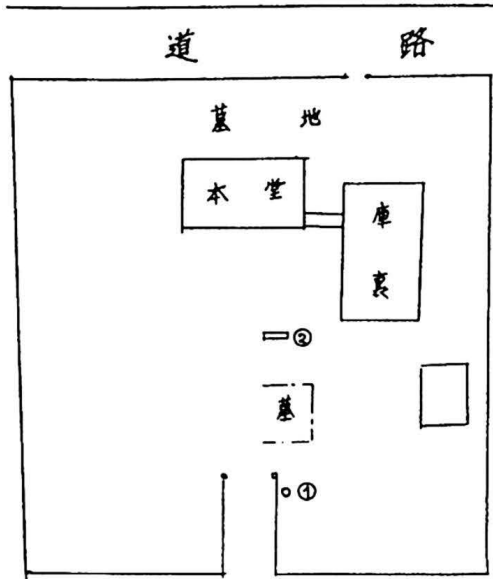
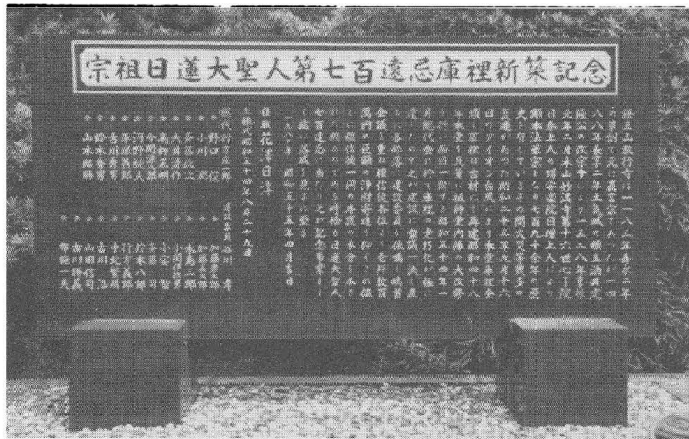


図22 經王山教行寺伽藍配置図 田村作図

二己<sup>(二八九)</sup>卯年六月、經王山教行寺立惣、中段の台石には十方諸檀中とあり、さらに世話人として鈴木源兵衛、古川佐兵衛、古川惣次左衛門、下モ谷源八、花沢□□、中里五良右衛門、同総兵□□□□□□□□□□基壇には自我偏講中として願主積泰惣、同立

正、古川完七、同妻、鈴木源兵衛、同妻、古川佐兵衛、鈴木玄左衛門、同妻、布留川弥五衛門、同妻、古川権三郎、河野源左衛門、飯高吉衛門、古川源七、古川佐平次、小川左四郎、鍛冶清左衛門の名を刻む) ②記念碑(昭和五五年四月)



写124 記念碑 田村撮影

寺伝によれば、一一八三年（寿永二）、教行上人の開基による真言宗の寺として創建されたと伝えられている。

その後、酒井氏の七里法華の改宗令に遭い、心了院日泰上人の甥に当たる（記念碑による）日増上人が改宗後の開基となった。

「文祿三甲午（一五九四）『上総国片貝村田畑御縄辻』（小川家文書）

教行坊

田 上田 四筆 七畝老歩

中田 五筆 貳反九畝貳歩

下田 三筆 五畝六歩

合 十二筆 四反貳畝拾參歩

畑 上畑 貳筆 六畝拾歩

中畑 三筆 四畝貳拾八歩

下畑 七筆 壹反六畝六歩

屋敷 老筆 壹畝拾歩

田畑屋敷合 二十筆 五反八畝貳拾九歩

右の文書は、当山創建後九〇年たったころのものであるが、ここでは「教行坊」と寺名が記されている。しかし、田畑の面積は本寺の本隆寺に比べてほとんど遜色がないのは、真言時代からの寺勢がうかがわれる。

次に掲げる文書は、小川家文書「高人別取調書上帳扣」の教行寺の部分である。

「(前略)

一、境内參百九拾坪 御年賣地

同村同寺末

同村

一、本田高四石五斗四升

經王山教行寺住

一、持添高老石四升

俊 義

合高五石九斗八升

午參拾九才

納米六俵参斗式升五合

入口米式拾式俵式斗

内米老俵式斗 下作米取立世話給

ノ米七俵参斗式升五合

徳米拾四俵九升五合

一、本寺檀方之内随百五拾軒

一、越前国足羽郡南居村産同村妙正寺弟子

天保十二丑年得度 文久二亥年十二月より教行寺住職

一、上総国山邊郡上谷村産

下男 善右衛門

午六拾才

(後略)

右は、本隆寺の項に掲げた明治三年に柴山藩役所に提出した「高人別取調書上帳扣」の教行寺の部分である。

歴代住持名も旧真言宗時代については、改宗時に焼却されたとみえて伝わっていない。改宗後も、寺の過



去帳に逸名が多く、全貌をつかむことができない。改宗後は、

初世日増―二世日成―三世日増……………日成<sup>(貞亨)</sup>……………日清<sup>(元徳)</sup>……………日成<sup>(宝永)</sup>……………日永<sup>(正徳)</sup>……………二世元智……………三〇世

源寿……………三四世日持―三五世日成―三六世日顕―三七世日曜―三八世日明―三九世日正―四〇世日淳(現住) ( )内は本堂裏の墓石よりである。

檀家数、二一五軒。

(木島里八)

参考文献

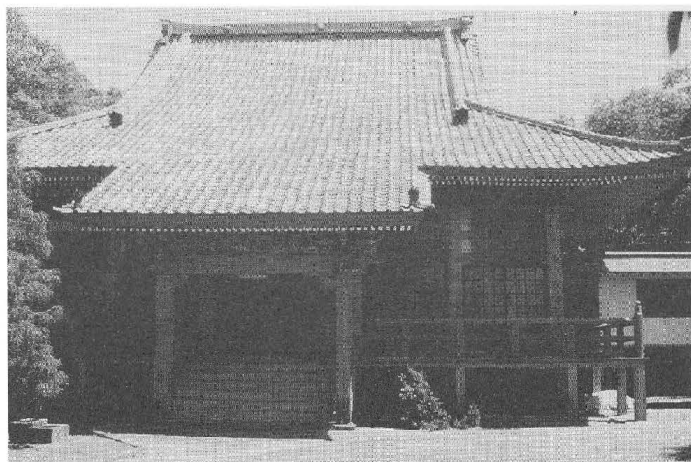
宮崎英修編 日蓮辞典 東京堂 昭和五七

この稿をなすに際して妙覚寺住職河野日教師、本隆寺住職栗原顕秀師、教行寺住職花沢日淳師より御示教を賜わったことを付記して謝意を表す。

経王山浄泰寺

所在 真亀二四四八番地。宗派 顕本法華宗。

開基 日耀上人、



写125 浄泰寺本堂 齊藤撮影

縁起については、詳細・簡略な史料・記録が『九十九里町誌各論編上巻』(三〇九―三一九ページ)に紹介されている。要約すると、一四八六年(文明一八)<sup>(1)</sup>、上総七里法華改宗令により真言宗より改宗、末寺九か寺、九坊を有し、上総下三か寺の一つと称せられ、江戸幕府より御朱印高十石を賜わった。(写込)

一七〇三年(元禄一六)、火災により焼失した(口碑)。一七〇三年といえば、元禄大地震のあった年であるが、それと関係するのか、どうか、今は確かめるべくもない。そのため東へ約一町半ほど(二七〇メートルぐらゐ)の場所に再建し、現在に至っている。

一八八七年(明治二〇)二月、三世大塚日裕が、内務省に提出するために作成した調査資料(「番外誌料用紙」、以下「番外誌料」と略記)によると当時の様子がうかがえる。

末寺九ヶ寺

上谷村寶珠山飯嶋寺

上谷村薬師山本浄寺

柳橋村法流山能念寺

下傍示村白幡山本泉寺

南今泉村寶樹山本泰寺

南今泉村貴宝山常運寺

九十根村稻荷山善立寺

砂古瀬村法華山浄蓮寺

北今泉村鎮護山等覚寺

また、朱印状(江戸幕府が寺社に領地を保証した証文)が、一六四九年(慶安二)以降下賜されていることが記録されている。

慶安二年八月二四日大猷院殿様御朱印頂戴写上総国山邊郡真龜村浄泰寺領同村之内拾石事任先規寄附之畢、全可收納并寺

中門前竹木諸役等免除如有来永不可有相違者也

慶安二年八月廿四日

以下、綱吉(貞享二年 $\parallel$ 一六八五)、吉宗(享保三 $\parallel$ 一七一八)、家重(延享四年 $\parallel$ 一七四七)、家治(宝曆十一年 $\parallel$ 一七六二)、家斉(天明八年 $\parallel$ 一七八八)、家慶(天保一〇年 $\parallel$ 一八三九)、家定(安政二年 $\parallel$ 一八五五)、家茂(万延元年 $\parallel$ 一八六〇)と全九通である。おもしろいことに、「古事の儀は、当山は文化度までに兩度焼失仕り不詳、什宝等これ無く候」(番外誌料)であった。

寺宝 木造式十界曼陀羅本尊(町文化財指定)

これは、案内板に次のように説明されている。

浄泰寺は文明一八年(一四八六)の開山で、上総七里法華により法華宗に改宗した。開基日耀上人当時は祖師像、当寺縁起の日什・日泰上人像と釈迦・多宝の二如来、上行・安立行・淨行・無辺行の四菩薩のみで、延宝年間中興の祖といわれる日耀上人によって講・裂信心の者の積金により、京七条の仏師大藏御弟子宮崎右近を招いて持国天はか四天王像を、ついで文殊・普賢の二菩薩像、さらに鬼子母神・十羅刹女像を造立したもので一部は後年更衣調進されている。

寺域 約一〇、〇〇〇平方メートル

伽藍配置は左図の通りである。先年、山門を元の寺域の所から現在地に移築した。(図23)

「九十九里町誌各論編上巻」掲載の「享保<sup>申</sup>年(一七一六か一七二八)浄泰寺境内図」(浄泰寺蔵)によると「寺内惣坪数老千四百坪(約四万七五二〇平方メートル)」とあり、現在の五倍弱の面積となり、伽藍境内とも宏壮を極めたことが想像される。その後、堂宇等の変化があったようで、一八八七年(明治二〇)の時には、

本堂南面十間四方古来ノ靈像日蓮大士崇カナリ(写込)

第一節 顯本法華宗の寺

一月五月九月十二日参詣群集ナリ  
 鬼子母神堂東面壹間四方  
 鐘樓堂三間四方  
 庫裡南面間口十四間半奥行十二間ナリ  
 表門南面二間東西四間  
 坊舎実成坊南面間口六間奥行三間半  
 坊舎本寿坊東面間口五間奥行三間

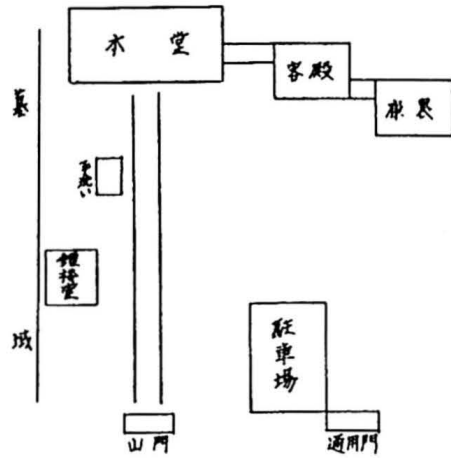
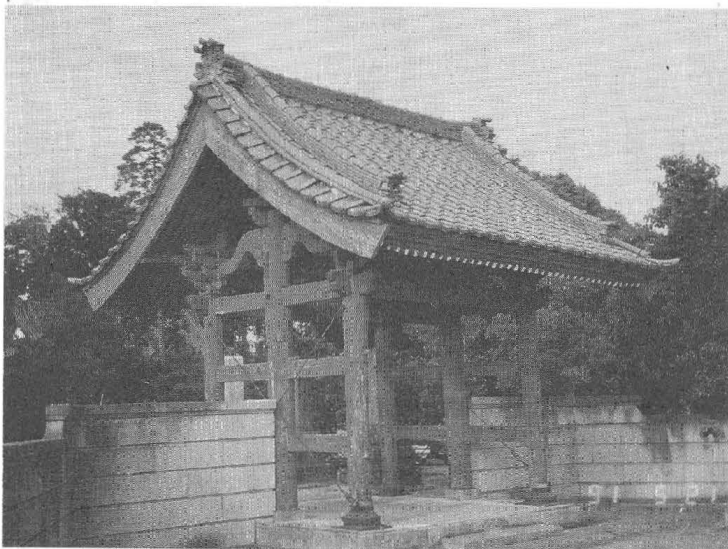


図23 浄泰寺伽藍配置図



写126 山門 齊藤撮影

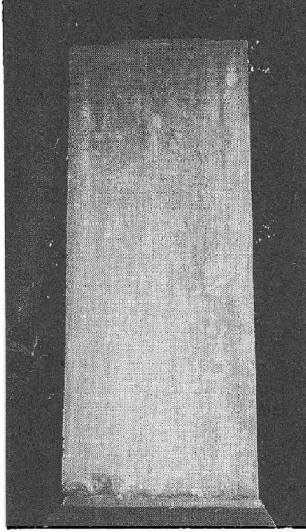
坊舎真如坊東面間口五間半奥行三間半

所在字上庭中 坪数九百四拾九坪

と規模の縮小がみられるが、明治初年（一八六〇）の排仏毀釈運動の時勢を過ごして来たにしては、よく残っているのではなからうか。

また、鐘楼（写127）には新鑄の梵鐘があるが、かつては一六七九年（延宝七）鑄造、上総国山辺郡東土川領不動堂の住人佐久間源右衛門寄進の梵鐘が設置されていた。

供養塔類、古刹だけあってその数は多い。主な



写128 伝井伊直弼撰文揮毫 慈伯大徳碑

ものをあげると、「寛文十一年（一六七二）津波供養塔」、「宝暦五年（一七五五）津波供養塔」、「伝井伊直弼撰文揮毫慈伯大徳碑」（写128）、「天保十一年（一八四〇）題目碑」（写129）などである。特に幕末の大老井伊直弼（一八一五―一八六〇）の撰文揮毫の碑は、注目に値しよう。風化が強いが、それでも流麗な変体仮名の雅文で、見る者をして感嘆させる。「あんせい



写127 鐘楼 齊藤撮影



写129 題目碑 齊藤鋹影

(安政)とあらたまるとし」すなわち一八五四年、直弼四〇歳、京都守護職時代である。教養人・茶人であった直弼が小閑を得て、茶道修業時代の友人慈伯大徳のために誓いたものであろうか。歴代住職 境内を入ると左手に「当山歴代先師報恩謝徳之塔」が建立されている。これに歴代住職名が刻されている。

開基―日耀上人―二世―日弘

三世―日納 四世―日深 五世―

日昌 六世―日仵 七世―日浄

八世―日應 九世―日寿 一〇世―日盛 一一世―日靈 一二世―日松 一三世―日玄 一四世―日専  
 一五世―日甚 一六世―日照 一七世―日審 一八世―日覚 一九世―日顕 二〇世―日普 二一世―  
 日理 二二世―日亨 二三世―日香 二四世―日演 二五世―日厚 二六世―不詳 二七世―日威 二  
 八世―日如 二九世―不詳 三〇世―日付 三一世―日心 三二世―日祐 三三世―日晃 三四世―日  
 錦 三五世―日揮 三六世―日優 三七世―日寿(現隠居)

碑陰には建立の由来が刻されている。

当山ハ永正三年八月開基日續上人ニヨリ創建サレ爾來四百七十八年顕本法華宗ヲ護持シ現在ニ至ル、時ニ昭和六十六年が  
什祖ノ六百遠忌ニ相当ス、慈ニ先師ノ御報恩ヲ深謝シ、歴代塔ヲ建立シ増円妙道位隣大覺ヲ折念スルモノナリ

檀家数 約五〇〇軒。

注(1) 一説に永正三年(一五〇六)開山ともいう。

(2) 「番外資料」には鐘銘と序が記されている。

檀信佐久間氏 旧臘以家塾付嫡子 世業為漁父多年 取生命今成陰士 忘貯捨財 欲恐罪愆辨因果 為後世資糧乃銘範華  
鯨 施淨泰寺而補法器所闕也 可謂其志深矣法器中首出庶物者其惟鐘乎 今虞之擊則蒲牢一聲 上徹天宮五袞頓休 下遍  
海底三熱速息焉 由是觀之吒王輟輪蒼麟 脱苦之功 盍冊禮德乎 惟鐘告四方 普眾方疆 合令聞者 以永荷擔妙法 万  
鈞其勝因 不亦博乎

銘曰

檀鐘金重 新虞梵宮 藁籥受氣 剎亮懸宮 晚吼殘月 暮唵清風 脱幽出厄 在此聲中

十一世監寺沙門學志 日靈謹誌

維時 延宝七己未首夏誕生会日

上総国山辺郡東浦真龜

經王山 淨泰寺

(後略)

石尾山善福寺

所在 粟生一一二五番地。宗派 顕本法華宗。

開基 一音院日円上人（京都繪本山妙満寺第二九世）

縁起 一六二五年（寛永二）の創建とされる。

それ以外は不詳。ただし、寺院そのものが今日まで粟生（村）を中心とした人々の信仰のもとで、連綿として続いていることは、諸史料が示している。享保年間（一七一六―三五）建立の「飯高氏墓碑」、一七六〇年（宝暦一〇）作の石造金剛力士像、一七九四年（寛政六）「齊藤氏板曼陀羅」、その他古記録・文書に寺の記載が見られる。「飯高家文書 上総国山辺郡粟生村寛政五丑年九月 日記十六」（九資第七輯上巻）一四八頁）に、一七九四年（寛政六）「七月廿六日 廿日ニ善福寺より銅燈籠台外ニ笠なども無之也尋候所台斗有之候由不用心ニ付遣候趣善福寺申之土蔵ニ入置」、また一七九六年（寛政八）二月九日（同右）一五一頁）には、彼岸の法要を行っている。

二月九日 彼岸ニ入寓信来巳七月六日十七回忌 幸俊五月九日廿一回忌 蓮常

来巳六月廿八日十三回忌 信行院妙勝日勝来巳三月六日百年忌 香蓮院後室妙薫

四月廿一日七回忌

右五靈法事祭祀執行

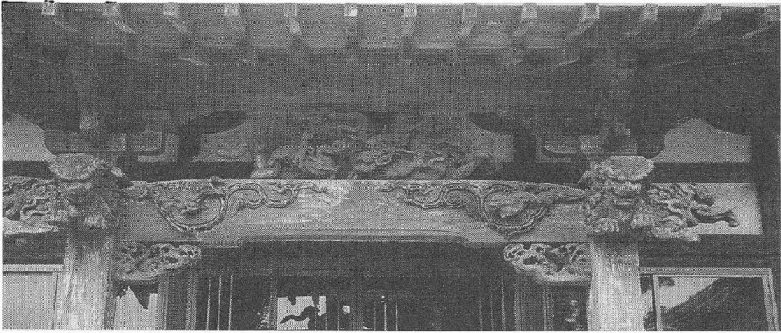
妙善寺急病不參 善福寺届持 契一結呼村中施米 但代金貳両ト積ル

粟生村飯高家の菩提寺として、寺運さかんだったことがうかがえる。

また、江戸時代の戸籍とも言うべき「宗門人別改帳」（飯高家文書）、「九資第二輯八六頁）に、善福寺の記載



第二章 郷土の寺院



写130 本堂正面龍の彫刻 齊藤撮影



写131 石の仁王像 齊藤撮影

がある。

下人宗旨之覚 惣兵衛

(中略)

右之下人共寺請状拙僧方江取置申候為後日仍而如件

善福寺

寺宝 宗祖日蓮大聖人尊像(旧上総国庁南武田氏の尊像)、向拝の一刀彫

の龍(写13)、石造金剛力士像阿吽一对(写14)。

金剛力士(仁王)像の建立については、村の歴史を物語ることがあった。「九十九里町の文化財」(町教育委員会発行)から引用してみよう。

「粟生善福寺本堂正面、階段の両側に安置されている石造の金剛力士像は、宝暦一〇年(一七六〇)江戸松屋町の石工上総屋仁兵衛の作である。飯高家文書によれば、宝暦六年(一七五六)粟生の表飯高十兵衛が蒲沼宮免の収益積立金を資とし、不足金八両を助力して造立したが、十兵衛の名を刻して第六天社に奉納したため、村内から「宮免は村惣持であるはず、何の相談もなく十兵衛個人の寄進のごとき有様では納得できない。」などの苦情が続出し、台座の文字を「惣氏子、助力願主飯高氏」と刻みなおして決着することになる。

金剛力士像は寺門の左右を警護することから、後に別当の善福寺に移され、境内南隅におかれた。近年、寺堂改修の際現在の位置に安置されたものである。

石造の金剛力士像は全国的にも珍しく、また「いぼとり仁王」と呼ばれ、村民から崇められてきたという。金剛力士とは、梵語グヤバードバジラを意訳したもので、仏寺を護る武力を象徴した鬼神である。上半身は筋骨隆々とした裸形で、顔は口を開けている阿形(密迹金剛)、口を閉じている吽形(那羅延金剛)、ともに忿怒の形をしており、阿は息を吐く形、吽は息を吸う形といわれ、あわせて「阿吽の呼吸」という。」

寺域 二六九七平方メートル

歴代住職 現住職鈴木日和師を以て三三世を数え

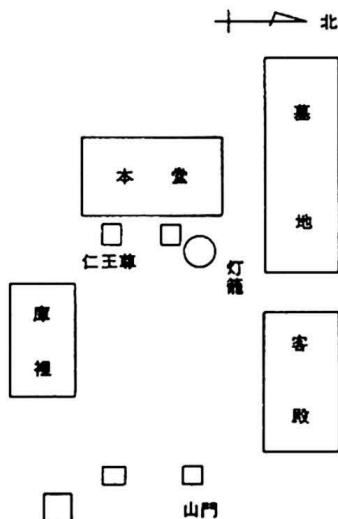


図24 善福寺伽藍配置図

第二章 郷土の寺院

るが、詳しくは分からない。しかし、断片的な史料により数代は判明する。

開基一音院日円上人(寛永二年、京都総本山妙満寺第二九世)、英信院日亮贈上人(享保一九年)、日東(天明四年卒、妙塔一三〇世、安国山二一世、粟生村飯高氏の産)、一一世日善(宝暦六年、宮谷檀林玄講八五世)、一五世日誠(寛政六年)、善勇(天保二一年、西野村齊藤氏の産)、一道院善哲日理上人(文政七年)、一義院善怡日第上人(弘化三年)

伽藍配置

供養塔類

宝篋印塔(写132)

現存する石造物で最古の物と思われる。刻字には、

「寛文四歳<sup>甲</sup>辰(一六六四)五

月日奉□□□□、□□□、百廿

四人衆、□□□□、施主上総

栗尾村敬白、日月天碑「奉

寄進大日月天王御宝前粟生村、

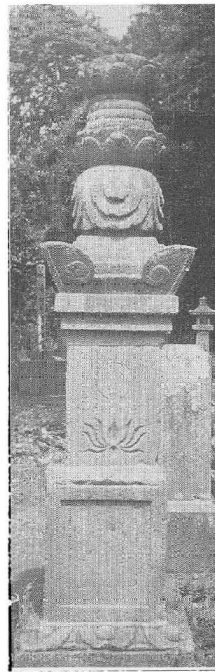
延宝四<sup>(丁)</sup>卯歳九月十九日願主惣

氏子」、供養塔(写133)(表)

「南無妙法蓮華經 法界萬靈」



写133 題目碑  
(宝暦6年)



写132 寛文4年(1664)  
建立の宝篋印塔



写134 善福寺本堂 齊藤撮影

「題目碑」である。

当山は南柳山善立寺と称し、慶長十四年二月日日円聖人によって開山せられ爾来法燈燦然として輝き今日に至る檀家は西野丘西野納屋下貝塚納屋広瀬に在り百余戸にして護持経営す昭和五十六年日日蓮大聖人七百年忌を記念して報恩塔を建立

(4) 願以此功德 普及於一切 我等与衆生皆共成仏道 (5) 開眼

法師上総国山辺郡三門村 帝立山廿三世日全 宮谷檀林玄講八十五

世時代同国同郡粟生石尾山善福寺十一世善亮日善 (6) 一千部靈廻

向之一千部成就乎 自我偈式萬遍 宝曆六丙子年十月十三日造立

(台座) 関下村 大沼村 宿村 田中新生村 片貝村 粟生村 細屋

敷村 貝塚村 不動堂村 真亀村 西野村 藤下村) 馬頭観世

音菩薩像「元文二年巳九月吉日願主粟生村中」 不動明王像「元

文三年正月廿八日」 大灯籠「平成三年二月飯高重之夫妻両親の菩

提を願って建立」

檀家数 二一二軒(うち町外二二軒)

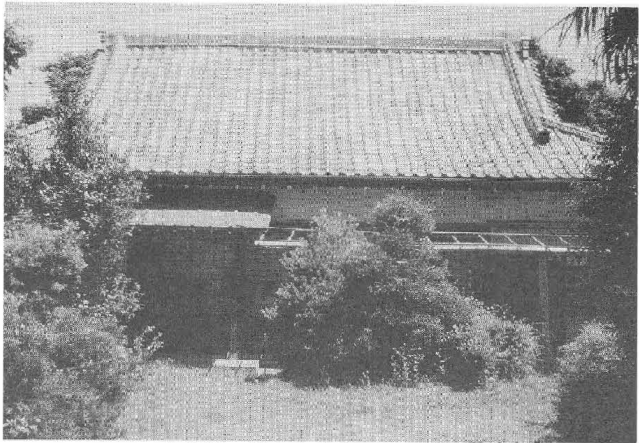
所在 西野二七四番地。開基 日円上人

縁起 詳細には伝えられていないが、

二つの石碑により、その一端がうかがえる。

一、一九七八年(昭和五三)、玄明院日統上人による再建

第二章 郷土の寺院



写135 善立寺本堂 齊藤撮影

鋪両今泉衆世且□拜之故□寒米粟烈經□不動堂閔之下真龜論  
 經戮力於□邑檀越經營之□菩藤野下荒生□塚崎薄島努力之積  
 記其邑者也！(下部)且塚 粟生 不動堂 藤野下 荒生  
 □塚崎 広瀬 薄島



写136 善立寺旧題目碑

し各家先祖の供養するものなり  
 二、明和四年建立の「題目碑」(写136)である。文字の風化甚  
 (一七六七)  
 かがえる。碑の表に題目、左側面から文章が始まる。

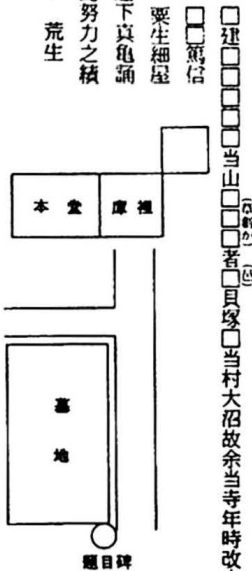
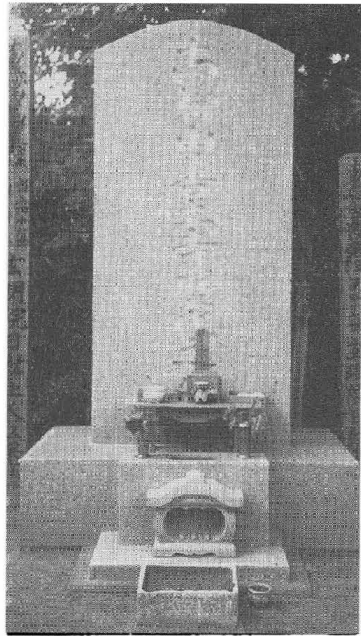


図25 善立寺伽藍配置図



写137 歴代住職碑 齊藤殿影

寺域 約一〇〇〇平方メートル

伽藍配置 供養塔類

題目供養碑

(表)南無妙蓮華經 日蓮大菩薩 (右)寛保元

酉天十月十三日 (左)永寿院道円 円寿院妙久

願主西壁祐佐瀬弥左衛門

歴代住職 不詳。二、三墓碑等により確認

できる。(写137) 開山 日円上人、

累徳院日秀大徳 (昭和三年十月廿四日卒) 栃木県塩谷郡北高根沢村平田鈴木氏ノ産 一明院善覚日教大徳 (昭和三十三年十

二月十日目齊藤孝建之) 四十六世玄明院日結上人 (昭和六十三年五月二十九日 権僧正日善義祐八十七歳) 四十七世玄珠

院日乾上人 (平成二年九月三日 日善乾義六十三歳)

檀家数 一一〇軒。

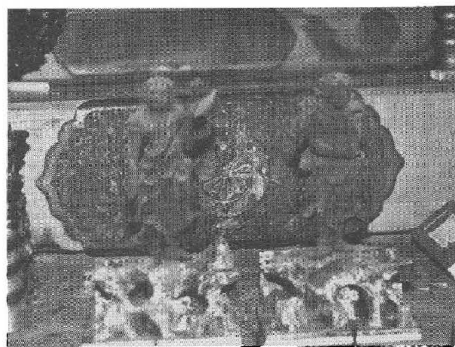
所在 不動堂七七二番地。

不動堂 本尊 不動明王 (旧像は昭和二八年ごろ盗難に遭い亡失。現在の本尊(木造・立像)は、その後成

田山新勝寺より勧請。脇侍の制吒迦・矜羯羅の二童子は旧来のもの)。(写138)

縁起 口碑では、源頼朝伝説に関連して伝えられている。頼朝が石橋山の合戦に敗れ逃れてこの地を過ぐる

時、村人に村名を尋ねたところ、不動尊をまつる御堂を問われたと思い、「不動堂」と答えたという。以来こ



写138 不動明王脇侍の二童子  
(右)制吒迦(左)矜羯羅

の地は不動堂村と呼ばれるようになったという。堂宇のある場所は「若城」と呼ばれる。(『九十九里町誌』各論編上巻二八ページ・中村城・鈴木実共著「九十九里町誌」(写139))

また、飯高家文書には「元文式巳(七三七)年五月不動堂御奇進請取の事」がある。それによると、不動尊前の田地を

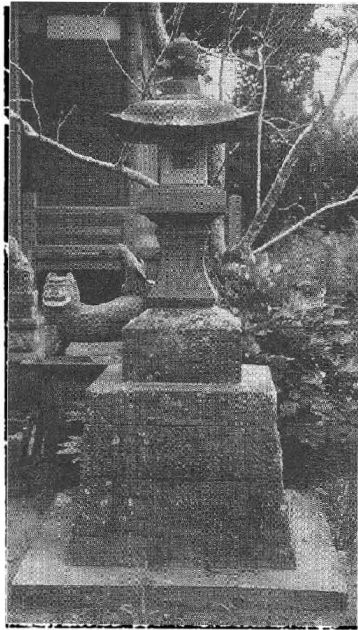
寄進してもらったので、不動堂村の組頭覚兵衛が、粟生村の飯高宗兵衛宛に請取証文を差し出している。

なお本堂宇は、古くは天明期(一七八一―一八九)に焼失し、再建され、更にその後天保一三年(一八四二)一月二日に火災に遭い、二年後の弘化元年に現在の堂宇が建てられた。その経緯は町文化財審議会副委員長鈴木銀市が「広報くじゅうくり」(昭和五年八月号)に掲載した記



写139 不動尊(不動堂) 齊藤撮影

録を引用したい。



写140 文政7年(1824)奉納の  
常夜燈 齊藤撮影



写141 常夜燈台座寄進者(正面) 齊藤撮影

「尊堂再建の記録を見ると、「天保十三年(一八四二)一月二日、不運ノ火災ニカカリ堂ハ焼失セリ、シカルニ不動尊像ノ灰燼セサルハ誠ニ以テ不思議ノ靈像ト云ハサルヲ得ス、後人亦以テ仰クヘシ尊堂焼失ノ際奇談アリ、別当真龜経王山ノ塔中ノ住僧「立察」ナルモノ、其ノ夜ノ夢ニ「大所焼時我此土安穩」ノ経ヲ誦マント欲シテ将ニ夢醒又不図戸外ニ出レハ風勢強ク、猛火天ヲ貫キ直チニ不動尊堂ニ至レハ、堂南内陣及御厨子過半焼失ス、彼ノ「立察」身心強盛ニ、南無妙蓮華経々々高唱スレハ、不思議ニモ「火不能焼」ノ金言空カラス、尊像ハ猛火ノ中ニ赫然トシテ安立スルヲ拝ス、而レハ抱持シテ経王山ノ敬堂ニ移尊シオワンス、噫妙法ノ利益靈像ノ験アラタカナリ、是レ疑フヘカラス」 弘化元年(一八四四)堂を再建して不動明王の入仏供養を営みて、其の発起人として当時十六ヶ村在役、高屋覚兵衛、名主治右エ門、組頭源内、組頭新兵衛、組頭四郎右エ門、組頭左兵エ、百姓代藤右エ門諸氏等が中心となり、再建したのである。」

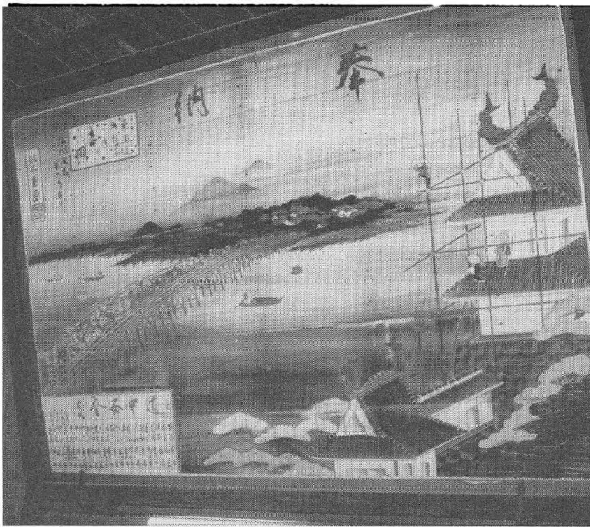


建造物 石碑（「忠賢」富塚四郎兵衛明治四十五年（一九三三）五月）御手洗（奉納当村納屋若者中天保十四  
（一九三三）四月吉辰）狛犬（昭和四十八年九月）狛犬（奉 大正十三年旧九月当区世話人一同 納当区一同片貝須原石政刻）常夜  
 燈（二基）次のように刻されている。（写140・141）

奉納常夜燈上総国不動堂佐久間覚兵衛勝成文政七（一八二四）甲 歳九月吉日（台座正面）真龟邸金右衛門 当  
 村若者中 熊藏 真龟村下若者中 西野邸佐兵衛 三郎  
 兵エ 粟生村商人中 セウ入政右エ門 十藏 片貝村北  
 新田作次郎（同左側面）真龟邸茂吉 上若者中 利左衛  
 門 西野村九兵衛 網商人衆中 荒生新次郎 片貝村庄  
 次郎 権治郎 宿新田亦五郎 貝塚村弥五兵エ 長右エ  
 門 今泉村万治郎 冲合世話人佐次右エ門（同裏面）当  
 村源五右衛門 源内 権右エ門 吉治 三四郎 佐右エ  
 門 伝吉 新右エ門 庄右エ門 四郎□□ 庄藏 甚兵  
 エ（同右側面）世話人五兵衛 藤右エ門 □□邸世話人  
 覚左エ門 隠持商人中 粟生邸源八

絵馬堂内には多くの絵馬が奉納されている。

写真の絵馬は「道中安全祈願」である。図柄は東  
 海道五拾三次のうち吉田の宿（現愛知県豊橋市）。弘化  
 四歳（一八四七）作。画工は榮玉。この絵は有名な浮  
 世絵師安藤広重（一七九七—一八五八）の描くところの



写142 堂内絵馬 齋藤撮影

「吉田の宿」(一八三三二天保四製作)を模写したものであろうか。橋向いの山、川面を行交う舟、老松に多少の相違はあるものの、構図はそのままである。栄玉については不詳。その名より浮世絵師鳥文斎栄之(一七五六—一八二九)系統に学んだ者であろうか。

管理 不動堂区

注(1)制吒迦童子、不動明王の脇侍。原語は従僕または悪鬼の意。尊容は紅蓮色の童子形で、手に金剛杵、金剛棒をもち、天衣(纏衣)をまとう。教理的には怒りを表わし人々の誤ちをただすという。

(2)鈴羯羅童子、不動明王の脇侍。原語は用を伺い何でも命ぜられたことを行う従僕、もしくは精霊の意。制吒迦と対となる。教義的には行者に給仕・奉仕するために現われる慈悲の化身とされる。『岩波仏教辞典』による。

この稿を成すにあたり、浄泰寺・善福寺・善立寺の各ご住職・鈴木銀市氏のご協力を得た。記して感謝する次第である。

(齊藤 功)

第二節 真言宗の寺

法興山 東光寺

新義真言宗智山派。

所在地 作田二九五番地。(本郷)

寺域 三四七一・六平方メートル。

建造物 ①本堂、瓦葺四八坪。②庫裏。③歴代住持の墓。④改

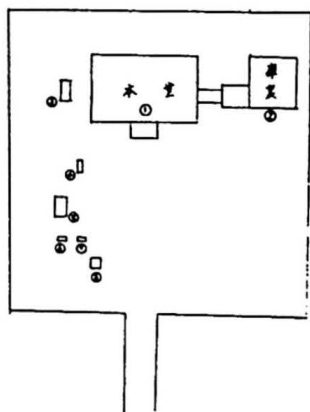


図26 東光寺配置図



写143 法興山東光寺(作田本郷) 作田撮影

建碑(別記)。⑤南畝先生夫妻瘞骨之処(碑)(昭和十八年夏五月)。⑥石塔(享和三年十一月十九日日本郷十九夜講中)。⑦庚申塔(享和十三年七月吉日)。⑧宝篋印塔(寛延三年庚午天皇月法光山東光寺現住證詮 施主 左久田氏右馬之助 正勝)

寺宝 大日如来座像(本尊)・不動明王像・聖観音像。  
現住職、三十九世。檀家数、約四〇〇戸。

縁起については、境内にある「改建碑」を引用したい。

「法興山東光寺改建碑」

南総作田の郷に古刹あり 法興山東光寺と称す 新義真言宗智山派に属す 其の本寺は蓮臺寺と為す 始め伊豆賀茂郡に在り 法華勃興の時に遇ひ所在の寺院多くは宗旨を變じて日蓮宗に入る 是時に当り独り毅然として旧を守りて變ぜず 故を以て他の庄迫殊に甚しく遂に南総武射田の郷に遷り 後又川代の郷に転ず 下寺十二箇寺あり その首位は即ち東光寺なり 按ずるに開基以来已に四百余季を過ぎ住持を代ふること廿数世なり 徳川幕府の中葉に至り祝融の災に罹り寺宝法具旧記一切を挙げて烏有に帰す 後宝永二季(一七〇五)五月堂宇を再建し山門鐘樓法具一切を

具備し法燈ほとう頗おほなりしも其後住持其の人を得ず 寺運漸ゆるく振たはず 当時日蓮宗隆昌りやうしやうを極め南隣なんりん一帯の部落は悉たく之に帰依し所謂七里法華なるもの則ち是なり 然れども此間に処し 克よくく宗旨を一貫したるは又以て偉たなりと称するに足る 明治維新の後百事改革学制新に公布せらるるや小学校々舎に当つること久しく爾來風雨数十年堂宇頽たふ廢は墓は荒は蕪らし穢けに寺名を存する耳 大正の末小嶋良忠師入りて住持となるや其の荒廢の状を見慨然として堂宇改建の志を立てこれを世話人諸氏に謀る 諸氏亦大いに之を賛し其の勞を分たんことを請ふ 爾來苦心慘憺其の企画を進め有縁の喜捨を募り其の資に充てんと欲す 諸氏俱に東奔西走して其の功程を補く 檀徒四百余家あり有志各々淨財を罄へし斯業の完成を期せらる 昭和十二年九月堂宇改建竣工 尋で墓域を整理し無縁を引ひ諸般の施設漸く成らんとす 作田敏世君特に良忠師及び世話人諸氏の勞を多とし且つ深く感ずるところあり 自ら資を投じて其の來由を貞取まこととり以て不朽に傳えんと欲し文を余に徴す 余も亦權徒にして而も君が宗族なり 君が此舉あるを喜び敢て不文を以て辞せず其の梗概を誌すと云爾

昭和十三年三月

作田泰國撰並書 酒井龍泉刻

創建年代については、前住手塚仁照師の筆になる「縁起」によれば、本寺は永祿年間（一五五八―七〇）と記されている。さらに、作田地区の同じ宗派（新義真言宗智山派）で無任の西照寺・西明寺・宝蔵寺を、一九六六年（昭和四一）吸収合併して現在に至っている。

前述の境内北隅にある「歴代住持の墓」の中に、「権大僧都法印慧了東光寺住僧慧寛惣筆子中、施主筆子（教えを受けた生徒）中九十四人、宝曆十三（一七六三）癸未天九月初三日」とあるのをみると、古くから東光寺の住職が青少年の教化を通じて、地域文化の向上に寄与していたことがうかがわれる。

(一) 新義真言宗智山派

古義真言宗に対する。宗祖弘法大師空海、派祖興教大師覚鑊（かくばん、一〇九五―一四三三）。はじめ覚鑊が真言宗の復興を試み、高野山上に大伝法院を造立し、金剛峯寺・大伝法院の兩座主を兼ねたが、金剛峯寺方がこれに反対したため高野山を下り根來寺に移住した。覚鑊滅後、頼瑜（らいゆ）が加持身說法説を創唱し、一二八八年（正応元）大伝

法院も完全に根来に移して高野山から独立し、新義真言宗が成立。一五八五年(天正一三)豊臣秀吉の根来攻めにより  
専著(一五三〇〜一六〇四)、玄宥(げんゆう、一五二九〜一六〇五)の二能化(高僧)は大和長谷寺、京都智積院に  
入り、前者は豊山派、後者は智山派となった。

(2) 蓮台寺は、伊豆賀茂郡蓮台寺村にあった真言宗の寺院。幕末にはすでに廃寺となった。

(3) 明治六年(一八七三)に作田小学校が創設され、東光寺は小学校の教場としてあてられ、その名を作田小学校あるいは共立小  
学校と称した。

西明寺(銀杏寺)

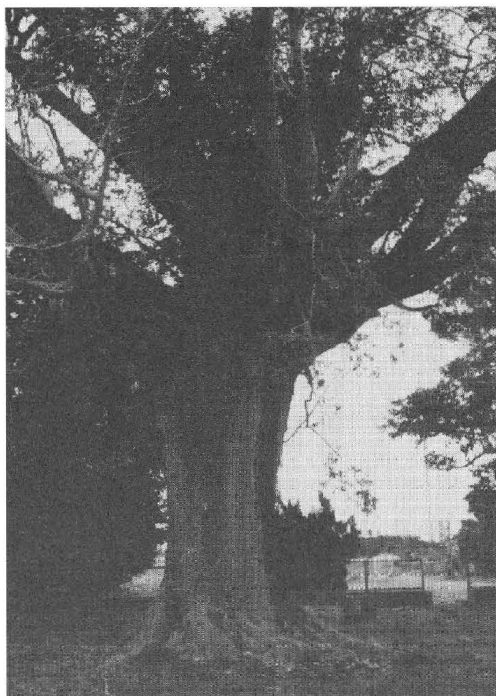
東光寺と同宗派

所在地 作田八一七番地の一。境内、

一三五九・六〇平方メートル。

一九七三年(昭和四八)三月に建てられた「西明寺遺跡」の碑には、

「西明寺の檀家は千葉常胤の一族にして第十七世康胤三三〇余年の累世を最  
後として、天正十八年(一五九〇)四月豊臣秀吉小田原征伐の時千葉城は解  
散しそれぞれ一族は各地に散在せり  
我等の宗祖はこの地上総国山辺郡佐久  
田郷に在住し本寺を建立せり」



写144 西明寺の大イチョウ(伊予坊) 作田撮影

とあるが、すべて不詳である。

また、この土地では西明寺とは言わずに、銀杏寺と呼ぶ人が多い。写144に見るとおり樹齡四五〇年という巨木が、いまでも宿り木の常緑樹を抱えて茂っている。

昭和二〇年代までは、四〇坪ほどの茅葺屋根の住居風の家が建っており、周囲には竹がうっそうと茂っていた。

写145の庚申塔には、青面金剛の下に三猿が刻まれている。この塔は、伊予坊耕地の裏にあたる場所にオサル様と呼ばれる小高い所にあつたのを、土地改良のおり、西明寺南側に運んですえたとのことである。

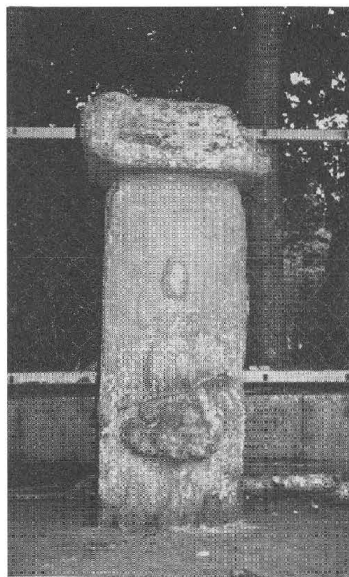
庚申講というのは、六〇日ごとの庚申かづしまの日に、仲間同志で集まり、庚申様の掛図や庚申塔をまつりながら、夜を徹して話しあう風習が名地にみられる。この神はたたりやすい神として恐れられている。

東光寺と同宗派

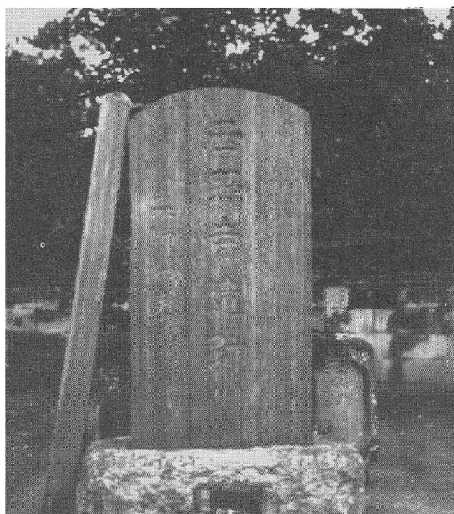
西照寺跡(薬師様)

作田八五五番地の一。境内、一〇九・八六平方メートル。

開基、沿革はすべて不詳であるが、かつて古老たちの話によれば、この寺は朱塗りの欄干のまわった大きな寺であり、現在地より後方にあつたとのことである。土地の人々は「薬師様」とよんでいる。写真146の碑には「西照寺遺跡」「薬師如来」、裏面には「昭和五十年三月一日建之」と刻まれている。



写145 庚申塔(伊予坊)  
三猿 作田撮影



写146 西照寺遺跡 作田撮影

(宝永六<sup>(二七〇)</sup>澄慶法印)がある。

宝蔵寺跡(不動様)

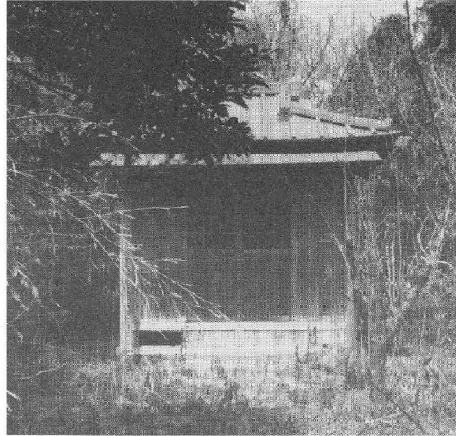
東光寺と同宗派、所在地、作田二二六四番地。(荒場) 境内、四四五・五〇平方メートル。寺宝、本尊、不動明王立像<sup>(二七三)</sup> 元文三<sup>(二七三)</sup>年卯月吉日 大佛師法橋連長作。寺域には、子安様一坪。外に三基の庚申塔がある。奥の方から、享保五<sup>(二七三)</sup>子十月吉日 施主 石田清重郎、次が、率成就庚申侍 二世安<sup>(二七三)</sup>、手前が、荒場新堀善男女人講中とある。

なお本堂内陣に、地藏菩薩とおぼしき立像が安置されている。本寺の創建は不詳であるが、村井淳家の先祖が漁業を営んでいたおり、最盛期に菩提寺として建立された

作田地区は、昭和五〇年を境にして大規模な土地改良が実施され、この碑の南西に約六坪ほどの茅葺屋根の寺院が建っていたが、これを解体して参道から農地に通ずる形の新道がつくられた。

仏教では、薬師如来は万病を癒<sup>い</sup>してくれる仏としてひろく信仰されている。現在でも、薬師様には目の病気の治癒を祈る風習が著しく残っている。

いま遺跡として画された一角には、前述の遺跡碑の外に、御手洗<sup>(二七五)</sup> 延享二<sup>(二七五)</sup>乙丑十二月、子安大明神。墓石(享保六<sup>(二七三)</sup>〇<sup>(二七三)</sup>実阿闍梨不生位) 墓石(明和六<sup>(二七六)</sup>己丑<sup>(二七六)</sup>星<sup>(二七六)</sup>〇<sup>(二七六)</sup>〇<sup>(二七六)</sup>) 墓石



写147 宝蔵寺(荒場) 木島撮影

である。

持明院跡

東光寺と同宗派と思われる。

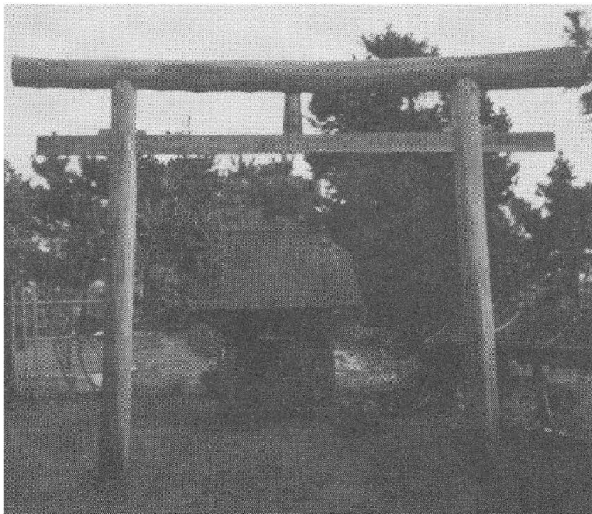
所在地 作田三六八〇番地。(中

谷) 寺域 三三〇平方メートル。

縁起については不詳であるが、昭和二〇年代まで、一五坪ほどの茅葺屋根の老朽化した堂が建っていた。

というのが通説である。

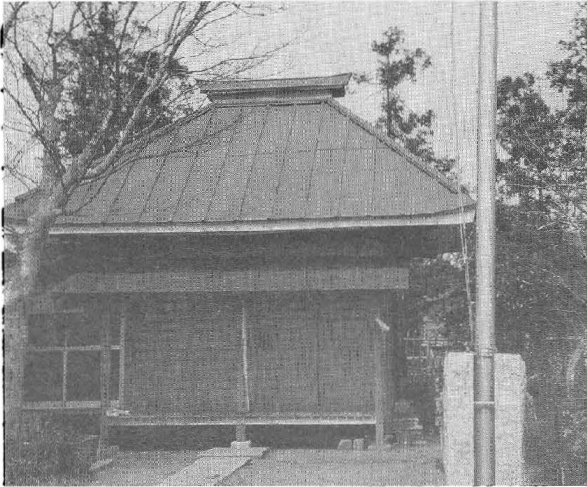
昭和三〇年代の初めごろまでは、一五坪ほどの堂があった。土地の人たちは「不動様」と呼んでいる。大正から昭和初期にかけては護摩をたいていることもしばしばあったとのこと



写148 持明院(中谷) 作田撮影



第二章 郷土の寺院



写149 観音堂(伊予坊) 作田撮影



写150 普門品供養塔 作田撮影

観音堂

(所在地、作田八二六番地。(伊予坊)

境内 二六三・九六平方メートル。本堂、九・五坪。

寺宝、十一面観音(本尊)。なお境内には、写150の普門品供養塔(慶応二丙)がある。  
年四月吉日 願主 古関六郎右衛門

(八五三)丙 十一月九日建之。御手洗(安政三丙)

正月一七日には、篝火を焚く。部落各戸から人が集まり、火にあたりながら御神酒をいただく。燃え残った炭を家に持ち帰り門の入口におく。この篝火にあたると風邪をひかないといわれ、炭を置くと火事にならないと伝えられてきた。

昭和一〇年代のころまでは、篝火をたく時間には露天商の夜店がでて、綿アメやいり豆を売っていた。本尊十一面観音は、十一の頭脳を持った観音菩薩で、変化観音のなかで一番最初に登場し、最も数多く造られている。十一面にさまざまな表情があるのは、十一面観音の能力の多様さを示している。病気を治したり、罪を許すなどの御利益があるといわれている。

地藏堂

所在地、作田二九六二番地、浅野宅地先(田向)

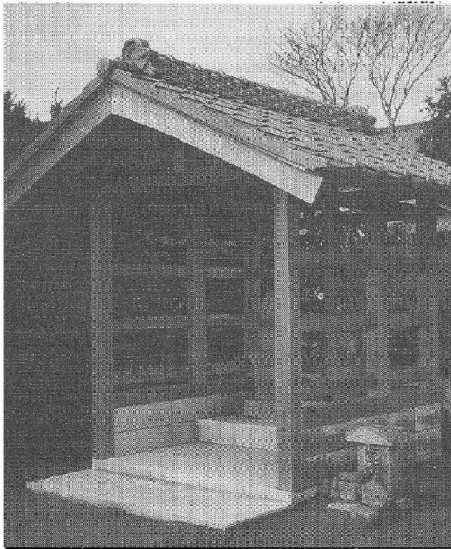
縁起、何れの石像も風化おびただしく、像の歴史を物語っている。

右の石像は地藏仏であり、台座に「東光寺 覺澄」と刻まれている。地藏というのは仏教にいう菩薩の一つ。観音と並んで民間に根強く信仰されている。

釈迦の涅槃の後、弥勒の登場までの無仏の世界を救うと説かれている。また地獄では、亡者にかわって苦しみを受け、冥途におもむく者を救うという面がひろく受け入れられた。

左の石像は庚申様である。台座に「丁辰、十九夜、享和□□四月」とある。

庚申様というのは、腕六本の青面金剛で、たたりやすい神として恐れられている。庚申塔と呼ば



写151 地藏堂(田向) 木島撮影



写152 閻魔堂跡(上南原) 作田撮影

れる石塔は室町時代ごろから建てられていたが庚申待の文字や阿弥陀三尊などが刻まれている。それらの多くが村はずれにあるのは、庚申が猿田彦様に付会されて、道祖神の信仰とも結びついたためと思われる。

寺域 七八平方メートル。 雨屋・一・三六坪。

### 閻魔堂跡

所在地、作田二二八四番地。(上南原)

宗派 真言宗。寺域、二七四・〇平方メートル。

開基は不詳であるが、昭和二〇年代までは一五坪ほどの茅葺屋根が建っていて、堂内には閻魔様が大きく

面かれた掛軸がかかっていた。

昭和初頭のころまでは、道路を隔てて向い側にあ  
る一八〇三坪の共同墓地を管理する人が住んでいた  
のである。

墓参する人は、自分の墓にもうでる前に閻魔堂に  
線香と燈明をあげるのが常であった。

閻魔王とは、人の生前の罪を裁き、人々に罰を科  
していくところから獄主ともいわれる。この閻魔王  
の本当の姿は地藏菩薩なので、生前に地藏菩薩を信  
仰していた者や、その身内になるものは、地獄の責  
苦から逃れることができると考えられていた。

ここで、今関方正氏から聞いた閻魔堂の物語を記しておきたい。

「閻魔堂がとりこわされてから二十余年になる。ここに住んでいた墓番は強い権力をもっていた。最後の墓番は六代目ぐらいになる。葬式で墓地まで来ると、あとはすべて墓番の指揮に従わざるをえない。墓地地蔵前におそなえものをして線香をあげ、それから埋葬になるが、念佛講は閻魔堂の墓番に丁重に挨拶してここで待たされ、指示に従いながら事はすめられた。」

墓地における墓番はこの場での最高の権力者であり、こわいような存在であった。折にふれ墓地の清掃もしていた。

閻魔堂は粗末な建物であったが、家の中にも数個の線香立てがあり、線香の煙が断えることは殆どなかった。現在のこの土地は雑草が茂り、手押しのポンプが人待ち顔である。

#### 如意輪観音

所在地 作田中谷の下、津堀川沿い路傍。

石像には、「嘉永七年(一八五四)□月十八日作田新田」と刻まれている。

如意輪というのは意のままに(如意)宝珠や法輪を用いて人々の願いをかなえてくれる観音菩薩のことである。宝珠は金銀財宝を生み出し、法輪は福德智慧を生み出すという。

作田地区には二か所如意輪観音がまつられているのを見るが、いずれも川沿いにあるのは、水との関係で水子供養を意味しているのではないかと思う。

所在地、作田荒場、作田川畔。

#### 如意輪観音

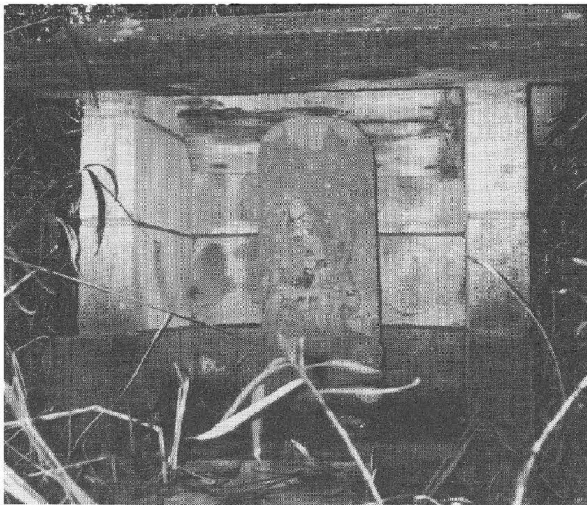
縁起は、前項と同じ。

(作田公男)

第二章 郷土の寺院



写153 如意輪観音(中谷の下) 木島撮影



写154 如意輪観音(荒場) 木島撮影

参考文献

大島建彦編  
若林隆光監修  
中村元他編

日本を知る事典  
文化財ウエブチング  
岩波 仏教辞典  
岩波書店  
社会思想社  
日本交通公社

昭和四六  
昭和六二  
平成元

### 第三節 妙智會

妙智會の創 片貝西の交差点に「妙智会大恩師聖地」とし  
治と沿革 るされた大きな案内標識が立っている。

これに従って県道片貝飯岡線を作田方面に歩を進めると、ほ  
どなく松林の間から黄金に輝く佛塔が見えてくる。

妙智會教団千葉聖地である。

準県道をはさんで、海側が練成苑、反対側が聖苑と区分され、  
ほぼ等面積で、合計二万数千坪の広さがあり、図27のような施  
設が配置されている。

施設の造営は、一九五七年（昭和三二）に始まり、以来年ごと  
に敷地が拡張され、一九七三年（昭和四八）に「久遠佛塔」が、  
一九八三年（昭和五八）に「大道場」が落慶、落成し、現在の規  
模となった。

毎月一八日の縁日には、多数の信者がバスを連ねて参詣にお  
とずれ、附近は時ならぬ賑いを見せる。

- ①久遠佛塔 ②ご廟所
- ③地藏菩薩 ④開教記念館
- ⑤聖苑集会所 ⑥大道場
- ⑦練成会館 ⑧食堂棟
- ⑨プール ⑩参道集会所
- ⑪職員寮

妙智會教団提供

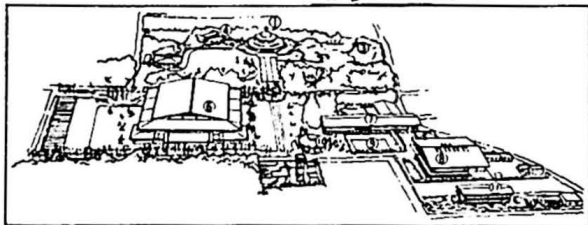


図27 妙智會教団千葉聖地



写155 久遠仏塔  
(妙智會教団提供)

妙智會千葉聖地は、妙智會創始者の地縁によって、その誕生の地、九十九里町小関に設けられたものである。

妙智會教団は、一九五〇年(昭和二五)一〇月二日、宮本ミツによって創立された。

宮本ミツは、一九〇〇年(明治三三)四月一五日、本町作田石田安太郎・りよの三女として生まれ、一九一八年(大正七)本町小関、宮本平八郎長男孝平に嫁いだ。

ミツは、夫孝平に従って佛立講に入信、一九三四年(昭和九)靈友会に入会し、法華經の教えにもとづいて、夫とともに修行一筋の信仰生活を送った。

孝平は一九四五年(昭和二〇)一月に没したが、ミツはその後もひたすら修行にはげみ、広宜流布に力を注ぎ、ついに積尊の教えそのものである法華經を正しく世に伝えるべく、妙智會を創立したといわれる。

妙智會教団の教義 妙智會教団は、綱領として、

- 一、恩師による佛道樂土に感謝する
- 一、教行による人格完成に努力する

一、忍善による世界平和に邁進する

を掲げ、その本尊は「十界互具の曼荼羅」である。

この曼荼羅は、釈迦の「宇宙を三千世界」とし、十の世界すなわち、佛・菩薩・縁覚・声聞・天上・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄を守護する諸佛諸天善神が鎮座し、日蓮大聖人が法華弘通の旗手として図頭されている。

教義は、法華經をもって先祖供養を行踐することを根本とし、

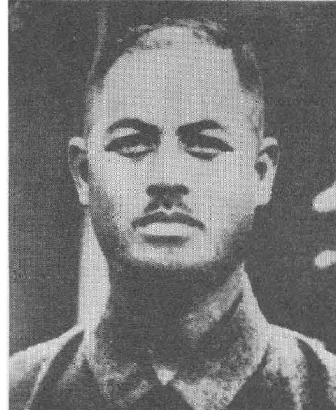
「先祖の一人一人に法名をおくり、法華經を讀誦して供養し、すべての先祖とその六親眷属の成佛を願うこと」を目的とする。

供養をうけず苦しんでいる先祖のある限り、子孫の安心立命はありえないという「孝」を中心とした教えである。

このようにして先祖供養を行ないながら、法華經の教えに従い自己の内面的改善のための修行を行うが、その目標を要約するとつぎの三つになる。

その一は、妙智會の全信徒が大恩師とあがめる宮本孝平が、終生唱えた「忍善」を日常の基本精神とすることである。

「忍善とは善を行うための忍耐であって、消極的な忍耐でなく



写156 大恩師宮本孝平・会主宮本ミツ  
(妙智會教団提供)



積極的行動を前提とし、不平やグチは厳しくいましめられている。この善とは佛教でいう「菩薩道の実践」でもあるといわれる。

その二は、自己向上の道として懺悔の修行に入り、人格完成に努力することである。

人間は意識すると否とにかかわらず、その前世・現世において無数の悪を積み重ねている。その悪を吐き出し、六根を清浄にすることが懺悔の修行である。悪を行おうとする心を矯正し、清らかな心を保つこと。

さらには過去の悪業を洗除するため、人の佛性を拝み、父母に孝養を尽し、師長を恭敬する。そうして正法にもとづく人間関係をつくり、平和主義に徹し、深く因果の法則を信ずるといふ実践に入ることである。

その三は、佛・国土・一切衆生・父母に報恩感謝することを生活の軌範としている。

このように、先祖供養・忍善・懺悔・感謝の四本柱を實踐することにより、家庭円満・幸福と社会の教化を図り、現世を安穩成佛させ、繁栄した平和世界すなわち佛道楽土を建設することを最終目的としている。

(田村 敬)

参考資料

妙智會教団	妙智會	妙智會	不詳
〃	みなもと	妙智會	昭六二
〃	聖地大道場	妙智會	不詳